

現代の埃及

サタンの組織制度は「世」と呼ばれる、何故なれば之は見える部分と見えざる部分の兩部を以て成るからであつて、地上の諸國諸民は過去數千年間サタンの支配下にあつて此の世の一部を形成してゐた。此の故に此の世は聖書中に「惡しき世」として形容されてゐる。サタンは此の世の主即ち神であつた、(ヨハネ傳十四章卅節、コリント後書四章三、四節)。神は古代埃及に關する記録を聖書中に保存して置いて、キリスト再臨と其の御國建設の時に於ける此の世の狀態を預言する方法を執られた。此の故に古代埃及は現代のサタンの組織制度に屬する商業と武力の方面の特色を殊に發揮したのである。イエス・キリストは此の世に於て十字架に釘けられた。故に其の磔刑の場所が特に「埃及」と稱へられてゐる、(默示録十一章八節)。之ぞ即ち埃及がサタンの組織制度である事を立證する更に他の一證であつて、彼の組織制度が今尙ほ地上に存在してゐる事を瞭かに示してゐる。

埃及は其の富と武力とを以て有名であつた。世界の富で「キリスト國」と稱する諸國が今有する程の偉大なる物は今迄に會つてなかつた。其處には極めて少數の千萬長者と百萬長者が

ある一方が億の貧窮者がある。而して之等の貧困なる大衆が富裕なる少數者の爲に壓抑されてゐる事は丁度古代埃及の貧民が少數の富裕なる特權階級から壓制されてゐたと同様である。戰爭を製造するのは之等少數の富裕者であつて、彼等は之によつて莫大の富を増し加へるのである。運輸の諸機關、大會社と銀行、電気瓦斯會社、都市の大建築物、土地及び世界の物質的富の殆ど大部分は「キリスト國」の財界大巨人達によつて所有され支配されてゐる。大戦艦、潜水艦、航空機、銃砲、火藥其他人類殺戮に用ふる武器は「キリスト國」に屬する富裕な諸政府によつて所有されてゐる。之等の莫大なる物質的富と大仕掛けの殺人的破壊武器は果して神の組織制度を形成するものであらうか。キリスト・イエスを以て首位者とする神エホベの組織制度は斯かる破壊的武器を必要とするであらうか。之等のものがサタンの組織制度に屬してゐる事に就ては何人も一點疑ひなき筈である。

今日地上の財界巨人は何れも所謂「キリスト教」を受け容れてゐる。何故なれば彼等は代價を拂つて己が救ひを買ひ取り、己の悪行爲に對する刑罰から免れんとするからである。惡魔の欺瞞的宗教のお蔭によつて地上の商人等は莫大の富を致し、多くの美味を満喫した。彼等は彼等に對する宗教的保護と慰藉の代價を支拂つて安心してゐるが、然し時は急速度に差し迫つて來て、彼等がバビロンと名附けられたる惡魔の組織制度、特に其の宗教の部分によつ

て惑はされてゐた事を悟り知る時が最も接近してゐるのである。

現代のアツスリヤ

古代アツスリヤは政治家を首脳とする強大なる政治制度であつた。然し此の大強國も實は財界の巨人達によつて運用されてゐた。政權者は要するに金權者の代辯者に過ぎなかつた。大軍備制度が組織されて支配者側の意旨を強制的に執行した。悪魔の宗教は備へられて此の大組織制度の残忍なる流血暴行爲を覆ひ隠す煙幕として働いた。之ぞ即ち「かの魔術の主な美しき妓女、多く淫行を行ひ、其の淫行をもて諸國を奪ひ、その魔術を以て諸族を惑はしたるに因りてなり」(ナホム書三章四節)の言に該當す。

所謂「キリスト國」は現代のアツスリヤであつて神が古代アツスリヤの記録を聖書に残し置かれたるは今日此の時、地上に實在する状態を之によつて預言せんが爲である。今日地上の政治家は諸國の首脳部にありて大言壯語を吐き、此の世の諸々の難問題を解決して地上に平和を樹立すると誇稱す。之等政權者を代辯者に用ひて之を操る所の實際の権力は此の世の偉大なる金權者である。そして軍隊用の武器を提供して支配者の意志を執行せしめつゝある者も實に此の金權者である。

古代アツスリヤの商業家即ち金權者は其の當時の悪魔の宗教を利用した、その如く「キリ

スト國」の宗教的部分も此の世の運用に於て政治家と資本家を擁護援助してゐるのである。カトリック、プロテスタント新教、猶太教の教師ラビ、その他此の世の支配者より「承認」を受けたりと云ふ諸宗教の教師たちは今日の支配權者の徳を宣揚するに一致努力し、地上に平和を樹立して民衆に福利を來らすべしと誇稱してゐる。

古代アツスリヤは残忍なる流血的組織制度であつた。而して現代のアツスリヤ即ち「キリスト國」は世界の人文史上如何なる時代にも勝つて多くの流血的罪業を敢行した。世界大戦に於て數百萬の血は地に流され、更に幾千萬の人々が「キリスト國」の大武力制度を擁護する犠牲となつた。

古代アツスリヤは「詭譎及び暴行の滿ち掠め取ること」の多き國であつた。(ナホム書三章一節)。世界大戦に續いた十年間に民衆が總らゆる方策によつて「掠め取られ」た事は既知の事實である。農夫が艱苦して開墾した土地は資本家の奸黠なる手段によつて掠め取られ、他の二權者即ち政治家と宗教家とは資本家の悪行爲の遂行を巧妙に援助した。各種税金は愈々増し加はり、多數の人々は不當なる重税に堪え兼ねて折角所有してゐた土地や家屋を手離すの餘儀なきに至つた。公吏は其の公僕たるの本分を忘れて民衆の上に暴虐の権力を揮つた。大資本家たちは政治家の候補者を指定し、民衆をして唯選舉の形式を履ましむる丈で己が望

む所の候補者を自由に選出した。之は米國に於て殊に然りである。そして大資本家は會社を組織して民衆に必要な衣服食糧の全部を左右す。

其の物質的富に於て今日の「キリスト國」程強大なるは人文史上未曾有の現象であるが、然かも此の莫大なる富は極めて少數者の手に握られてゐるのである。各國は何れも銃砲、軍艦、航空機、爆發藥其の他知らゆる人類殺戮用武器を以て武装す。

政治家たちは各種の平和條約の締結に贊成すと稱しつゝ、實は其の内面に於て所謂「キリスト國」に屬する各國共に軍備擴張に熱中し、空前未曾有の大戦備を整へてゐるのである。此の政策に於て政治家は他の金權者と教權者より強力なる援助と支持とを受けてゐる。

「キリスト國」の宗教制度は自らキリストに服従すと稱しつゝ、キリストの再臨と其の御國の到來を否定し、神の聖言に聽いて其に服従する事を拒絶す。教職者と宗教指導者たちは何れも傲慢不遜にして神に奉仕せんとする者に嘘偽の罪狀を強い、神エホバの聖名によりて真理を語らんと熱心に努むる者を拒絶迫害するのである。サタンの組織制度の中堅分子として此の世の宗教家は他の支配階級の援助支持を受けてゐるが、其の援助支持者は之を爲す事が彼等にとつて宗教的に安然であると思惟してゐるのである。

使徒パウロは今日此の時に發生する事に關して斯く豫め告げてゐる、「末の世に艱の日來ら

ん、汝此の事を知れ、其の日至らば人たゞ己を愛し、貪婪、矜誇、驕傲、詭詐、不孝、恩を忘れ、不潔、不情、怨を解かず、誘譎、慾を縱まゝにし、殘刻、善を好まず、友を賣り、放肆、自負、神よりも佚樂を愛する事をせん。彼等は敬虔の貌あれど實は敬虔の徳を棄つ。汝斯くの如き者を避くべし」(テモテ後書三章一―五節)。

此の故にバビロン、埃及およびアツスリヤの三強國はサタンの見ゆる組織制度の三要素の特色を發揮してゐる。爾後之等三要素の特色は引續いて出現した諸々の世界強國の全部に顯はれてゐた。以上三國の後にメデヤ・ペルシヤとギリシヤ、羅馬の諸強國が現れ、之等の諸國は何れも惡魔の宗教を行つた。古代羅馬の宗教は「異教」と呼ばれてゐた。後に強力なる羅馬の政治家は己が國に「キリスト教」を採用し、之を其の組織制度に引き込んで、バガン異教の儀式禮拜をそれに應用して今日のローマ・カトリック教會制度を造つた。羅馬は大武斷國となり、其の商業家と政治家及び宗教家共に相提携して民衆を抑壓したのである。

然る後に英帝國が出現して強大なる世界強國となり、金權、政權及び教權の三要素を具備した支配權を合成し、爾來今日まで其の支配を續けて來たのである。強大なる商業的勢力と殘忍なる大武力と宗教の大組織制度が英國の國家政府を形造つてゐる。此の世の如何なる國も神の組織制度に屬してゐないは確實である。其處に二大組織制度のみが存在するものとす

るならば此の大英帝國は當然サタンの組織制度に属するものである。米國も英國と同じくサタンの組織制度の三要素によつて支配されてゐる。世界大戰は第八の世界強國の聯繫を生んだ。即ち國際聯盟であつて之は聖書の中に既に預言されてある、(イザヤ書八章八―十節。默示録十七章九、十一節)。此の聯盟は各國の資本家、武斷家によつて支持され、「キリスト國」の宗教家によつて全き承認を得てゐる。そして教職者は一九一九年に宣言を發して、「國際聯盟は地上に於る神の國の代用となる」と聲明した。事實に見て國際聯盟は神の組織制度に属すべきであらうか。若し然らずとするならば之も當然サタンの組織制度に属するものである。

神に敵對

一九一四年(大正三年)キリスト・イエスはエホバによつて其の王座に擁立された。此の同じ年に世界大戰は發生し、其の大戦中に「キリスト國」に属する諸國は敵味方の別ちなく一致して、神エホバに向ひ眞に奉仕せんとする者に對して憤怒を顯し示した。神の大預言者イエス・キリストは此の事に就て既に斯く預言する、「其の時人汝等を患難に付し、汝等を殺すべし、又汝等我が名の爲に萬民に憎まれん」(マタイ傳廿四章九節)。

一九一八年(大正七年)に至り世界大戰に参加したる「キリスト國」の諸國は、眞に全人類に

祝福の時來るとの福音を宣明して神に奉仕せんとする者に公然と嫌忌を表明した。それ等の謙遜なるキリストの追隨者は檢擧投獄され、無實の罪狀を以て公判に附され、偽證を以て斷罪された。多數のクリスチャンは毆打され、殺害された。彼等は陸海軍の監獄に投げ入れられ、忠實に神の眞理の御言を告げて互ひに殺す勿れと聲明した爲に總らゆる不當なる取扱ひを受けた。而して斯かる憎惡嫌忌はサタン自身の使曠下に躍る彼の組織制度によつて示されたのである。

「サタンの裔」と「婦の裔」とは此の時に出現した。エホバは此の兩種の裔の間に怨恨を置かんと告げ、亦「サタンの裔は婦の裔の踵を碎かん」と示し置かれた。キリストは「婦の裔」であつて、キリストに属する最後の成員は「彼の足」であり、其の中に「踵」をも含んでゐる。大昔に於て與へられた此の預言は一九一八年になつて始めて成就し始めたのである。

神の御恵みを受けて天界の事を悟り見る事を許されたる聖徒達に一九一八年以後に至つて示されたる更に一つの大異象は、今や「婦」が産まんとする「男兒」を呑み食はんと覘ふ處の残忍にして血に餓ゑたるサタンの組織制度であつた、(默示録十二章一―四節)。所謂「キリスト國」制度に属する牧師、神學博士其他の指導者が先導となつて、エホバが神に在す事、キリストが王なる事、其の御國の到來せる事、エホバが其の王キリストを王座に擁立された

事、義の政府が建設されて頓て全部の悪を全地より一掃破却される事を忠實に宣明せんと欲する者に對して、公然と憎惡迫害を加へた事は一般公知の事實である。惡魔は忠實に奉仕せんとする者を嫌忌して其を呑み食はんと努む。而して所謂「キリスト國」の教職者や宗教指導者たちは亦之等の忠信なるクリスチャンを嫌忌憎惡す、何故なれば彼等は其の父なる惡魔の意志を行はんとするからである、(ヨハネ傳八章四十二―四十四節)。

サタンは所謂「キリスト國」をバビロンの一部に加へた、故にバビロンの名稱は「キリスト國」の上に附される、何故なればそれがサタンの組織制度であるからである。サタンの組織制度に屬する偽宗教家の手を通じて地上の政治家や資本家が此の惡しき組織制度の中に参加させられた。神は其の御豫定の時至るに及びて必ず此の事實を或る程度迄之等の總ての者に知らしめ、政治家や資本家をして此の惡しき宗教制度から自らを離反せしめられる時が到來する事となつてゐる。

道徳的状態

世界大戰以前の道徳の狀態は充分に惡しかつた、然し大戰以後になつて更に惡化した事は一般の認め知る所である。官公署には何れも贈收賄の醜事滿つ。官公吏の多くは私人の願使下に奔走し、新聞紙上には無數の犯罪と疑獄事件充滿す。若き男女學生の思想と操行は甚し

く惡化して父兄を憂慮せしむ。多數の正直なる人々は酒類の醸造と使用を禁止する禁酒法は道徳の頹廢を防止するに良策なりと信じて之に賛成した。而して事實は惡魔が此の禁酒法を利用して人々の間に不道徳と放蕩とを助長したる實證を明白に示してゐる。

世界大戰以前には男子が煙草や酒を使用するは悪い習慣であるとされてゐた。然るに大戰後に於ては女子が男子よりも多量の煙草と酒を公然と使用し、殊に公立學校在學の若い男女學生の間に於て特にその甚しきを見る。之等の憂慮すべき状態に對し多くの識者は何等かの救濟方法を發見せんと努力す。斯かる頹廢墮落の狀態を誘致したに就いては充分其處に理由がなければならぬ。然り、其處には理由がある。而して其の理由とは即ち左の如し。

神エホバは一九一四年(大正三年)に其の王を王座に擁立された、(詩篇二篇六節)。それに續いて天界に戦争起り、一方にキリスト・イエスと其の天使たち、他の一方にサタンと彼の配下の天使達とが立つて相戦つたがサタンは敗れて天界から放逐された、(黙示録十二章七―九節)。サタンが放逐された爲に天界には大歡喜の時あり、それと共に斯く聲明された、「我等の神の救と能力と其の國と神のキリストの權威既に至れり」(黙示録十二章十節)。然る後に神の預言者は又告ぐ、「地と海は禍ひなるかな、そは惡魔己が時の幾時もなきを知り大なる怒を懷きて汝等の所に下ればなり」(黙示録十二章十二節)。斯くの如く惡魔は今其の全力を地に傾注

してゐる事を示してゐる。「地」とは地上の全般を支配しつゝある所の支配階級を云ふ。而して此の預言の成就する時には、地上に混亂満ち、その支配階級間に困亂と惑迷充滿して彼等は其の原因と理由とを發見するに苦しむと示されてゐる、(ルカ傳廿一章廿五、廿六節)。更に「海」とは不安動搖する民衆を意味してゐるのであつて、此の状態は今、我等の眼前に於て刻一刻と急速に悪化して行く。之ぞ即ち何故に社會道徳が過去十年間に斯くの如く悪化したかを示す唯一の理由である。

サタンの組織制度が此の地上の諸問題を支配しつゝあるは幾多實證に見て極めて明白である。神の大預言者イエス・キリストは此の事を預言して置かれた。そして其の預言は今我等の眼前に成就してゐる。サタンは其の巧妙な計畫を遂行する爲に全力を盡して地上全人類を神エホバより離反する事に努め、全人類を惡のドン底に陥れんと努力してゐる。彼は最絶頂の到來近き事を看取して、今全人類の頹廢腐敗に其の全力を傾注してゐるのである。政界と財界の巨人たちは社會人心の改善を試み、教職者は地上の理想化を叫んで相提携して平和條約を結び、地上に永久の平和を來らさんと企つと雖も、彼等の協同的努力の悉くは必ず失敗するのである。地上の惡狀を救済する方法は地上に絶無である。サタンの組織制度は其の支配權を揮ひ、其の治下の民衆の手足は緊縛されてゐる。今教會制度の内外共に多く

の直き人々ありて彼等は現下の惡狀を救済せんとて一致努力するも彼等折角の努力も常に失敗に終つてゐる。然し其處に完全なる一の救済方法がある。而して之は唯一の救済方法であつて、その如何なるものなるかを知るの好機會が地上全人類に與へられたと云ふ事を知るは此の場合最も重要な事である。

此の救済方法を人々に知らさんが爲に特に本文は書かれたのである。人々は如何にして惡が消滅させられるかと云ふ事を知る前に先づ其の惡の發生の原因を知る事は最も大切である。我等が若し先づサタンの組織制度が如何にして形成され、如何に殘忍兇惡であり、傲慢にして流血的であり、不道徳にして而して強大であるかと云ふを悟り知つたならば、其の後に此の強大なる組織制度を破却一掃せんとする更に大なる權力の存立する事を始めて正當に理解する事が出来るのである。人力を以ては決して之を爲す事は出来ぬ。今日の所謂「キリスト教」なるものがサタンの組織制度に屬し、其壓制的な殘忍制度の運用を援助しつゝある事實に見て、所謂キリスト教は神エホバの宗教に非ずして惡魔の宗教であることを悟り知る事が出来る。而して何故に教職者や宗教指導者たちが一般に聖書研究者と呼ばれてゐる謙遜なるクリスチャンの一團によつて宣布される神の聖書の眞理に反對するかと云ふ理由は之によつて明白となる。

人々が眞理を知るに今日ほど大切なる時は未だ曾つて無い。サタンは全力を盡して人々が眞理を知らんとするを妨害す。多くの統治者と其の民衆は共に何れもサタンによつて眞理の前に其の眼を盲まされてゐる。然らば人々をして眞理を知らしむるには如何なる方法を用ふべきか。

第七章 證

エホバは其の御目的を實行するに、それを秘密になさるゝに非ずして、其の御目的に對する必要な通牒を示し給ふ。サタンが人間を組織し、彼等をしてエホバの名によつて偽善的に呼び交はしめたのは、人間アダムの園から放逐されし時より間もなき後であつた。(創世記四章廿六節)。人間は惡の路を急ぎ下つた。サタンは亦、天界の天使である神の子等を墮落せしめ、其の本位を忘れて、彼等の住める處より離れ、人體に化身して、人間の女等と交淫せしめた。此の暴逆の故によつて神は其の惡しき代の人々を滅ほし盡さんと決意された。(創世記六章七節)。神はそれを實行する以前に先づノアを遣はして聖旨に關する證言をなさせしめられた。(ヘテロ録書二章五節。ヘテロ前書三章廿節)。ノアの爲せし事は「預言」であつ

て、此の世の終末に際して發生せんとする事を豫示したのである。之は主イエスの御言に見て一點疑ひなき處である。

神が其の民イスラエルを埃及王パロの暴壓下より救ひ出された時に、モーセとアロンとをパロ王と其の民の前に遣はして御目的に關する證言をなさしめられた、(出埃及記三章十八節。四章十六節。五章一―四節。なほ出埃及記六章より十二章までを見よ)。此のモーセとアロンによつて爲されし事と、其の後イスラエル人の上起きた事は皆此の世の終末に際して發生せんとする同様の事を「預言」したるは確實である、(コリント前書十章十一節)。既に成就せる預言は神の組織制度と悪魔の組織制度の二大組織制度があつて互ひに敵對し、天界に於ては既に之等兩者の間に交戦あり、尙ほ一大戰の行はるゝは最早避け難く、此の大戰には地上全人類を捲き込む事を示してゐる。故にエホバは其の善しと見給ふ方法により、正に來らんとする此の大戰と聖旨に關する必要なる通牒を全地諸民に交附さるゝ事となつてゐる。

同

被造物の全部が決定しなければならぬ重大問題は、「誰が全能の神か」と云ふ點である。此の問題は愈々最終的に決定される事になつてゐる、何故ならば神は其の旨を聲明されたからである。ニムロデがサタンの指揮下にベベルの塔を築いた時に、彼の目的はサタンがエホバ

よりは偉大にあらずとするも少くもエホバと同等位の大能者なる事を示さんとするにあつた。エホバは其の塔を破壊して人々の言語を混亂せしめ、之によつてエホバが全能の神に在す事を顯はし示された。

埃及王が傲慢となつて神の選民を壓迫した時に於て決定さるべき問題は即ち此の「誰が最高の神か」と云ふ點であつた、其の時にエホバは其の最高至上の權力を顯はして、人々の利益となる爲に其の御名の聖き事を示すと共に、エホバが神に在す事を埃及人に教へられた、(サムエル後書七章廿三節)。

アツスリヤ王が傲然たる態度を以てエルサレム城外に現はれたる時に決定さるべき問題は「誰が最高の神か」と云ふにあつた。其の時エホバはアツスリヤの大軍を撃滅して誰が最高權威者かと云ふ事を表示された、(イザヤ書卅六章十八節。卅七章卅六―卅八節)。

今日、所謂「キリスト國」を形成する此の世の諸強國はサタン即ち悪魔と共働してエホバの上に誹謗を蒙らしめつゝ、尙ほ自らキリストの追隨者なりと稱してゐる。而して今、決定さるべき大問題は「誰が全能の神か」と云ふ事と、「我等は誰に服従すべきか」と云ふ點である。エホバは此の問題が必ず決定さるべき旨を聲明してられるが、然も其の時は最も近いのである。然し神は之を決定する以前に於て先づ其の御目的に關する證言を此の世の諸國諸民の

手に交附さるゝのであつて、其の結果此の世の主権者等と民は眞理を知るの機會を得る事となる。而して彼等が之を聞くの機會を有しなかつたと云ふ口實を全く塞がれて了ふのである。此の證言は此の大問題が最後の決定さるゝ直前になされなければならぬは神エホバの大預言者なるイエス・キリストの示し給ひし如くである、「御國の此の福音は諸々の國人に證をなさんため全世界に宣べ傳へられん、而して後、終りは至るべし。其の時大なる患難あらん、世の始より今に至るまで斯かる患難はなく、また後にも無からん」(改譯マタイ傳廿四章十四、廿一節)。

神エホバが大患難の直前に此の證言を與へらるゝ此の事は、即ち人々に向つて警告を與へ、此の事實を聞き知つてサタンの組織制度より脱し去り、エホバの御力と其の御保護下に安然を求めんとする者に其の機會を提供さるゝ譯である。それと同時にサタンは其の全力を盡して、此の世の主権者等と民衆に此の證言を聞かしめざるやうに妨害するは確實であつて、此の爲にサタンは此の世の諸國諸民を己が組織制度中に閉ぢ込め置かんとするのである。

證言者は誰か

此の證言は本問題に對して必要な説明を加ふる證者によつて與へらるゝのである。全能者として神エホバの聖名の爲に證言を爲す證者とは何者なるか。此の問題は、神が従前斯かる

場合に如何なる者を使用されたかと云ふ事を知るによつて決定さるべきである。エホバは眞理の福音を配達せしむる爲に用ひられた人々の上に其の聖靈を與へられた。之即ち彼等が神の聖名に於て語る權威を衣せられた事を意味す。エホバは斯かる者を己が證者たらしむべく高きより其の力を與へ給ふのである。聖靈はエホバの聖旨に基きて働く所の見えざる力である、(ヘテロ後書一章廿一節)。神が過去の事蹟に關する記録を残し置かれたるは即ち人々をして未來に發生せんとする事を諒解せしめんが爲である。

神はイスラエル人を己が預言的民として編成されたる時に、其の民の爲に奉仕すべき祭司を設け、聖き膏を彼等の上に注がれたが、之即ち彼等がエホバより權威を衣せられ、承認を與へられたる事を意味するのである。聖き膏は神の聖靈を表象するものであつて、神はその代理者たらしめんとする者の上に之を與へられるのである。祭司達の諸々の任務の中には、神の律法とその御目的に關して人々を教導する事が含まれてゐた、(マラキ書二章七節)。當時の組織制度の祭司等は、「シオンの築かるゝ時」に於て神の眞の組織制度に奉仕する同じ級の者を預言的に示してゐたのである。

神は其の預言者を通じてエホバの大預言者なる大能の子キリスト・イエスの來る事を預言した。そのキリストの爲すべき任務に就て預言者イザヤは斯く記す、「主エホバの靈我に臨め

り、こはエホバわれに膏をそゝぎて貧しき者に福音を宣へ傳ふることを委ね、我を遣はして心の傷める者を醫やし、俘囚人に免しを告げ、縛められたる者に解放を告げ、エホバの恵みの年と我等の神の刑罰の日とを告げしめ、又すべて悲しむ者を慰めしめ給ふ」(イザヤ書六十一章一、二節)。イエスは其の地上に於ける任務を開始するに際して此の預言の書を取り上げ、衆人環視の中で此の預言を御自身に適用された。

「主の靈われに在す故に貧しき者に福音を宣へ傳へん事を我に膏をそゝぎて任じ、心の傷める者を醫し、又囚人に釋さん事と醫者に見させん事を示し、又壓制へらるゝ者を放ち、主の喜ばしき年を宣へ播めんが爲に我を遣せり。イエス彼等に云ひけるは、此の録されたる事は今日汝等の前に成れり」(ルカ傳四章十八、十九、廿一節)。イエスが之を讀む時に「我等の神の刑罰の日」を除かれたには其處に充分の意味があつたのである。

イエスは己が再臨する事を知つてゐられた、そして其の再臨の時即ち此の世の終結する時であつて、空前絶後なる大患難の前に「神の刑罰」が人々に告げられなければならぬ事を知つてゐられたのであつて、之は後にイエスが其の弟子達に示された御言と完全に一致してゐる、(マタイ傳廿四章十四、廿一節)。ペンテコステの時より後、主イエスが其の殿に來られてシオンが築き上げられる迄の期間内にキリストの體の成員が選り取られて彼に集められる事

となつてゐた。此の成員の最後の部分が「彼の足」の部を形成するのであつて、彼等はその膏をそゝがれし權威に基く責務を行はなければならぬ、(イザヤ書五十二章七、八節)。

イエスは三年半に亘り、當時の人々と支配者等に向つて神の御目的に關する證言を與へられた。イエスはピラトの前に立たされて、其の地上に於ける任務と、御自身が王なりや否やと云ふ問題に關して質問を受けし時に斯く答へられた、「我これが爲に生れ、これが爲に世に臨れり、そは眞理に就て證言を爲さんためなり。すべて眞理に屬く者は我が聲を聽く」(ヨハネ傳十八章廿七節)。斯くの如く主イエスは御自身の任務は證者即ち神エホバの預言者たる事にあるのであつて、すべて此の眞理を學び受くる者は主イエスの御聲に聽き従ひ、主と共に神の證者とならなければならぬと示された、(ルカ傳廿四章四十八節)。

エホバがイエスに與へられた稱號の一に「忠信なる眞實の證者」(黙示録三章十四節)と云ふのがある。之と共にキリストの體の成員たる者はイエスの如くにならなければならぬと示されてゐる、(ロマ書八章廿九節)。イエスの如くになると云ふ事は即ち、その體の成員は皆己が全部を以て神エホバに獻げ、喜んで神命に服従しなければならぬと云ふ事を意味してゐる。即ち彼等はエホバの證者とならなければならぬのである。

「聖名を崇むる民」

ペンテコステの時よりイエス・キリスト再臨の時までの期間内にエホバが此の福音を宣へ傳へしめられたる御目的は「聖名を崇むる民」を人々の間より選び取られんが爲であつた。狡猾なる敵サタンは其の初期に於て神の御目的を顛覆せんとて其の行動を開始した。總てを欺瞞と譏詐とによつて行動する事の必要なるを知つてゐる彼サタンは、地上に於ける教會制度の指導者等の心の中に誤信を植ゑつけて、教會の使命は此の世をキリスト教に教化する事であり、キリスト・イエス再臨の爲の準備として全地を道徳的善良で満たす事であると考へしめたのである。サタンは人間が之を爲す事の不可能なるを最初から知つてゐた。然し人間をして此の事を企てしむる事によつて人間をその爲の多忙の裡に封じ込め置き、以て彼等の心を神の眞の御目的より遠ざける事が出来ると考へたのである。

羅馬帝國が國教を制定してそれを「キリスト教」と命名した時に其の指導者等は民衆に命令して強制的に彼等を教會の會員とならしめたのである。之ぞ即ちサタンが此の制度を捕へて、之を己が組織制度中の宗教分子となしたる譯であつて、斯くして此の所謂「キリスト教會制度」はバビロンの一部となつて了つたのである。而して此の強制的命令に反對したる者は總らゆる虐待と苦難を蒙つたのである。

教會に關する眞の目的は正直なる人々の眼界より全く失はれて了つたが、之即ちサタンの

悪しき感化の結果である。イエス在世當時に於て、パリサイ人が盲目なる民衆の手引きであつた如く、其の如くパリサイ人の實體なる今日の教職者は同じくサタンの奸策の爲に盲者となれる教會内の人々に對して盲目の手引きとなつてゐるのである。

羅馬教會に於ける悪狀が最も甚しくなつた時に、正直なる人々の或る者は教會から離れ去つて所謂プロテスタント教會を形成した。然しプロテスタント教會も亦サタンの感化の下に埋没し、教會の目的を誤解して、世界をプロテスタント主義に教化する事が其の使命であると誤信するに至つた。其の結果として多くの血なまぐさい戦争が発生し、特に歐洲に於てはカトリック教會(羅馬教會)とプロテスタント教會が互ひに血を流し合つて戦つた。之等兩種の教會制度は何れも公然と此の世の政治騒ぎに參與し、實際に於て此の世の支配階級の一部となつて了つた。眞理は彼等の前に全く隠れ去つた。此の邪惡なる状態は主イエス・キリストの再臨にまで及び、即ち眞理の基礎的教理が復興する、時にまで及んだのである。一八七八年以降、眞理の探求者に向つて基礎的眞理の復興事業が繼續して行はれる期間があつたが、此の期間はエリヤの歩みし道によつて預言されてゐる所の仕事の期間であつた。此の期間中にカトリック教會とプロテスタント教會から多數の人々が引き出されて、彼等は喜んで眞理を抱きしめて居たが然し彼等には未だ従前の誤謬が多く附き纏つてゐた。之等の

誤謬は預言者によつて「汚たる衣服」として示されてあるのであつて、之は彼等がバビロン即ち悪魔の組織制度より離れて出て來れる時に身に纏ふて來たるものである。斯く眞理の知識を得てカトリック教會やプロテスタント教會より脱出し來れる者の多數は、彼等の主なる責任は自らを天界に相應しき人格者に育成する事にあるのであると誤信してゐた。其の結果として彼等は美はしき人格修養事業を開始し、自己を多くの人々の前に高潔なるものと見せて人々の注目を自己に惹きつけんと試みたのである。彼等が之を爲すに眞面目であつた事は無論である。

主が其の忠信なる者をして其の御國の一部に參與せしめらるゝと考へる事は其の人々の自由である。又此の爲に彼等がその言行意に出來得る限り純潔を保たんとする事も自由である。然し彼等はキリストの追隨者たる者が此の地上に於て爲さざるべからざる肝腎の任務を見落した。凡てのクリスチャンたる者は批難を受けざる生涯を送つて、凡て正しき事を爲すにその最善を盡さなければならぬ事は無論である。然しそれのみにては未だ彼の爲すべき事の全部ではない。人間は己が努力のみにては善良にして完全なる者となり、それによつて王國に於てキリストの統治に參與する者となる事は出來ないのである。

御國に入るの前提として先づ神エホバと主イエス・キリストに對する己が愛と忠信を立證

しなければならぬ。斯かる愛は喜んで神の御命令を守る事によつて立證される。(ヨハネ傳十 四章十五、廿一節。ヨハネ第一書四章十七、十八節。五章三節)。之即ち「勝を得る者」とはサタン

守る事にある。

エホバは人間に向つて聖言の意味を漸進的に顯示し給ふ「義しき者の道は旭光の如し、愈々光輝を増して晝の正午に至る」(箴言四章十八節)。使徒等はペンテコステに於て聖靈を以て膏そゝがれたる時より後神の御目的を見て之を諒解し始めたが、後に至つて彼等は益々明かにそれを諒解したのである。其の如く神の民も基礎的眞理の回復するを漸次的に學び知ると共に、後主キリストが其の殿に來られた後に於て一層明かに見る事を得るに至り、而して今猶ほ神の言の上に光輝は増々増し加はりつゝあるのである。イエスは此の地上に在りし時に其の教へを猶太人のみに與へられた。其の後亦三年半の間、イエスの弟子等は猶太人のみに教を傳へた。猶太教は其の教職者や指導者等の不忠不信の結果として單なる一個の形式的

宗教と化して了つた。ペンテコステ以後或る期間はイエス・キリストの弟子等の間に此の形式と儀禮主義が多く尊重されてゐた。

或る正直なクリスチャンは「割禮を受けざれば救はるゝ事なし」と眞面目に考へてゐた。割禮は律法の契約に基いて猶太人のみに適用さるべきものであつた、彼等が猶太教の暗黒から脱して此の事實を見得るに至るまでは相當の月日を要した。豫定の時至るに及びて神はペテロをして一異邦人なるコルネリオに眞理の福音を傳達せしめられた。異邦人は割禮には絶對無關係である。福音が異邦人に傳へられ、而して彼等異邦人が未だ割禮を受けてゐないと云ふ此の事は當時多數クリスチャンの間に論議の種となつた。

之等の問題を決定する爲にエルサレムに於てイエスの弟子等の會議が開催された。主イエスの弟子の一人なるヤコブが議長席に着いた。會議進行中にペテロは起つて、如何にして神は彼をして異邦人に福音を傳達せしめられたかと云ふ事、神の言と御目的の前には猶太人も異邦人も其の間に何等の區別なき旨を述べた。其の時にパウロとバルナバも起つて神が異邦人の間に於て如何に大なる奇蹟を示し給ひしかに就て會議に述べた。ヤコブは神の預言者アモスの言に一致して斯う云つた。

「神初めて異邦人を眷顧み、其の中より己が名を崇むる民を取り給ひし事はシモン既に之

を述べ。預言者の言これと合へり、其の書に、此の後われ歸りて已に傾圮れたるダビデの幕屋を再び興し、其の破壊の跡を再び造りて之を建つべし。これ其餘の民(遺殘者)及び凡て我が名をもて稱へらるゝ異邦人に主を尋ねさせん爲なり。此のすべての事を行ふ神これを言ふ、と録されたるが如し。神は世の始よりその總ての所作を知り給へり」(使徒行傳十五章七—十八節)。斯くの如く彼は示して「神の名を崇むる民」を取る事は最初から神の目的の一部であると告げてゐるのであつて、之はシオンが築き上げられ、昔ダビデの統治によつて豫表されてゐた所の王國の運用が開始さるゝ時に成さるゝのであつて、其の時に王國の祝福は地上全人類に及ぶ事となるのである。

イエスが再臨されて、基礎的眞理がその追隨者に復興されたる時に、彼等は「約束に基く奇」とは即ち基督であると云ふ事と、キリスト・イエスは基督の首位であつて忠信なる追隨者が其の體を形成する事、之等の者は何れもアブラハムの信仰を有しなければならぬと云ふ事を學び知つた。其の時アブラハムの信仰を有し居たりし者は眞理を學び知つて一般宗教家の形式儀禮主義より脱し、神の僕となつたのである。

然し之等の者と雖も上記ヤコブの言は主イエスが其の殿に來られる迄は其の眞意義を知る事が出来なかつたのである。之は別に彼等の負ふべき責任ではなくして、唯主イエスが殿

に來られる迄は之等の預言を諒解する事の出來ざるやうに神が定めて置かれたからである。其の時以前にも彼等は、此の言は神が一團の者を此の世より取りてキリストの新婦となし、神の御名を崇むる者となし給ふと云ふ事は知つてゐるが、然し彼等はエホバの聖名に對する重要な問題が此の中に含まれてゐると云ふ事は未だ知る事が出來なかつたのである。勝を得るキリスト・イエスの忠信なる追隨者がキリストの體の成員となつて其の榮光に參與し、彼と共に神の嗣子となり、又キリストの新婦の名で呼ばれる事は確かであるが、然し上記ヤコブの言は其の事を示してゐるのではないのである。

ヤコブの言は預言であつて、之はそれが成就するか、それとも成就の途中でなければ諒解する事が出來ない事となつてゐる。殿級の者に向つて殿が開かれし以來彼等はエホバが其の御自身の聖名を崇むる爲に一の民を取られつゝある事と、此の仕事は地上全人類に對する祝福の復興が開始さるゝ以前に成されなければならぬ事とを悟り知つた。此の事實に見るも神は地上に於て或る特殊の任務に服すべき者を選び取られる事が明かである。

サタンの組織制度は神エホバの聖名の上に甚大なる誹謗を來らしめた。之は現代に於て特に然りである。所謂「キリスト教會」は一個の形式的宗教に過ぎない。此の制度はキリストの名を取つてクリスチャンなりと自稱してゐるが、其の行ふ處は却つてキリストと神エホバの

名を極度に汚濁、侮辱しつゝあるのである。教會制度の指導者と會員は其の口唇を以て主に近づくとは云へ、其の心にては主より離れ遠ざかつてゐるのである。彼等は徒らに主の御名を稱ふると雖も其の聖名の意義に就ては絶対に無知である。サタンは此の教會制度と其の中の形式儀禮主義を用ひて人々を眞理の前に盲目となし、斯くして彼等を神より離反せしむるのである。神は今、其の御名を人々の前に高く顯はさんとの御目的を示し給ひ、其の聖名を崇むる民を一般の所謂クリスチャンの中より召し出し、之に己が聖名の偉大なる事を宣揚する證言の仕事と與へ給ふのである。エホバの聖名は今、正式に人々の前に示されなければならぬ、何故なれば人々が生命を得るの唯一の道は此の眞の唯一の神エホバと、エホバが此の世の救ひ主として遣はし給ひしイエス・キリストを知る事のみにあるからである、(ヨハネ傳十七章三節)。神は一の民を選び取つて彼等に膏をそそぎ、全地の人々の前にその聖名に關する證言を與ふるの權威を與へ給ふ。

埃及はサタンの組織制度であつた。而して神の選民が埃及王の壓制下に奴隸となつてゐたと云ふ事は、今日地上全人類がサタンと其の惡しき組織制度の下に奴隸とされてゐる事を預言してゐるのである。イスラエル人を埃及の奴隸たる境遇より救ひ出さんとする前に神はモーセと其の代辯者なるアロンを遣はして埃及王パロに斯く傳へしめられた、「ヘブル人の神斯



モーセ、神エホバの聖言をパロに傳ふ

く云ひ給ふ、我が民を去らしめて我に専ふる事を得せしめよ。我この度わが諸々の禍害を汝の心と汝の臣下及び汝の民に降し、全地に我が如き者なき事を知らしめん。我若し我が手を伸べ、疫病をもて汝と汝の民を撃ちたらば汝は地より絶たれしならん。抑々我が汝を立てたるは即ち汝をして我が権能を見さしめ、我が名を全地に傳へん爲なり」(出埃及記九章十三—十六節)。

パロは人々の前に自ら神を輕視してゐるやうに裝ふた。モーセの要求に對してパロは斯う答へた、「エホバは誰なれば、我その聲に従ひてイスラエルを去らしむべき」と。斯く蔑視されたる時にエホバは人間の利益となる爲に御自身の聖名を高く人々の前に立てられるの必要を生じた。

故に聖書は示して、之等の状態は世の末に於て諸國諸民の上に一大危機が臨む時に發生する事を預言してゐるものなる事を教へてゐる。今日全地の状態は埃及に於ける當時の有様と奇しき一致を示してゐる。パロの時代以後今日迄の間に、現在程、當時の埃及に於ける状況と匹敵符合する時代は無かつたのである。神が埃及に於て偉業を示して其の聖名を爲されし事は即ち今日此の時、世の末に於て全被造物の前に其の御名の聖きを顯はし示さるゝ事を預言してゐるのである。

「忠」 世の實眞なるな信



イスエエに前の立に

今日全地は神エホバを全く忘却し去つたやうである。サタンの代理者がキリストの追隨者の
 貌で顯はれてゐる様子に就て「凡て其の意に神なしとせり」(詩篇十篇四節)とある此の言
 は美事なる符合を示してゐる。今日人間の貪慾と權力的位置、富は其の絶頂に達した。今日
 地上には多くの自稱「キリスト教會制度」はあるにしても其の實質は神より遙かに離れ隔つ
 てる。彼等の思ひが神より離れ去つたに止らずして、偽善はエホバの御名に於て公然と行
 はれて神の聖名を甚しく汚漬してゐる。而してエホバは昔大洪水を以て世を滅ぼされたる
 其の如く、地上に現在する總らゆる組織制度を悉く滅ぼし盡して了はれるのである。一般
 の人々の惡狀は彼等の指導者程は甚しくない。之等指導者こそ全く主イエスが形容されし
 如く「地を滅ぼす者」である。(黙示録十一章十八節)。人々は己等がエホバを知るの知識に不
 足してると云ふ點に於て責任を負はなければならぬ、何故なれば彼等はサタンと其の地上
 に於ける代理者なる教職者に聽き従はず、直接エホバの教導に従ひ得る機會を有し得たに
 拘らず、己が貪慾と我利は彼等をして神エホバを忘却せしむるに至つたからである。
 埃及の歩みし道は今全世界が歩みつゝある道を豫表してゐる。昔は埃及のみに發生したが
 此度は全地に發生するのである。今日貪しき者等は權能を所有する支配階級者より壓迫され
 てゐる。牧師、神學者等の宗教教師は恐ろしき永劫苛責の邪教理を以て人々を脅迫し、恐怖

に戦慄する彼等の頭上に負ひ難き程の重荷を括りつけたが、其の結果として一方には彼等の宗教に愛憎を盡かして神より全く離れ去る者をも多数に出したのである。宗教、商業、政治の三者を以て合成されるサタンの組織制度は聖書中に「獸」を以て表象されてゐる。多数の人は強制と任意とを問はず何れも此の「獸の印」を受けて、悪魔の組織制度に對して精神的に、又實際的にそれ／＼の支持を與へてゐるのである。偽善と悪事の結晶なる「キリスト教會」制度中に多数の人が封じ込められて其の偽善に參與し、又多数の者は唯恐怖觀念に脅迫されてそれに屈從してゐる。之等の者は何れもクリスチャンなりと自稱するとは云へ、彼等は神を誹謗する彼等の指導者等を公然と承認しつゝある此の事實に見て、自ら神の民なりと稱しつゝも實は決して然らざる事を明かに立證してゐるのである。

エホバは預言者をして今全地に實在する現状を明かに預言せしめて置かれた、「我が民（自稱の民）の中には惡しき者（神を代表すると稱しつゝ實は神の御名を誹謗しつゝある牧師や神學者の教職者）あり。網を張る者の如くに身を屈めて窺ひ、民を置きて人を捕ふ、（彼等教職者は人々が神を信ずると否とを問題とせずして唯無暗と人々を其の教會内に引き摺り込む）。籠に鳥の滿つるが如く、不義の財寶彼等の家（組織制度）に滿つ。此の故に彼等（教職者と群の長等）は大なる者となり、富める者となる。彼等は肥えて光澤あり、其の惡しき行は甚だし、（彼等は仲間政治

家や資本家、宗教家の惡事に共鳴し共働す。彼等は訟へを糺さず、（義しく審判かず）、孤兒の訟を糺さずして利達を得、また貧しき者の訴へを審判かず（人々は眞理を必要とするに拘らず、彼等は之を人々に與へず、又人々の眞に求むる所のものを思ひやらず。彼等は唯政治や所謂科學及び之に類似の偽食物を以て人々を養ふのみ）。神は現在の所謂「キリスト教會制度」の悲惨なる状態を斯く形容し給ふ。主の御名に於て偽善の公行されてゐる事の甚しき、今日の如きは未曾有である。然る後に神は預言者をして斯く語り續けしめられた、「我斯くの如きことを罰せざらんや。我が心は斯くの如き民に仇を復さざらんや。此の地（所謂キリスト國）に驚くべき事と憎むべき事行はる。預言者（教職者）は偽りて預言をなし、祭司（教會制度に仕ふる者等）は彼等の手によりて治め、我が民（自稱の民）は斯かる事を愛す。然れど汝等その終りに何をなさんとするや」（エレミヤ記五章廿六―卅一節）。

神は空前絶後の大艱難時に際して所謂「キリスト教會制度」を罰せんとすの御目的を預言者を通じて示し置き給ふ。然し神は何等の豫告的通牒を與へずしては之を爲し給はないのである。此の通牒を交附し、此の證言を與ふる其の時は大艱難の直前たるべしと豫定し置かれてゐる。

此の通牒を交附する爲に其の證者たる器として何者かを用ひ給ふは當然である。此の仕事

はモーセの爲せし仕事と匹敵してゐる。人々は無知の内に閉ぢ込められ、壓迫を受けてゐる、而して神は今其の行動を開始し給ふ。神は此の時に於て或る特殊の一個人を擧げ用ひ給ふに非ずして、エホバが「僕」と命名し給ふ所のキリスト・イエスの忠信なる追隨者の一團を擧げ用ひらるゝのである。此の「僕」を形成する者は、キリスト・イエスが其の殿に臨まれし時に忠信なる者として承認を受けたる者であつて、主は斯かる者に向つて證言を爲すの仕事を委ね、神は此の仕事に彼等に命じ給ふのである。

エホバの聖名を崇むる者として取られる所の民は、エホバの御目的を地上の諸主権者と其の民衆に語り告ぐる人々でなければならぬ。シオンに來りて之を築き、其の忠信者を承認して彼等を殿の状態に入れ給ひし主は、彼等の爲さざるべからざる仕事に就て示して置かれるが、其の仕事とは即ち神エホバの聖名に對する證言をなし、悪魔の組織制度に關するエホバの御目的と、神の組織制度に關する御目的に就て勇敢に宣明するを意味してゐる。

エホバの僕

エホバの聖名に對する證言を爲す者として取られたる者は即ち至高き神の僕である。その「僕」に就て神は其の預言者をして斯く記さしめ置かれた「我が扶くる我が僕、我が心喜ぶ我が選人を視よ。我わが靈を彼に與へたり。彼は異邦人に道を示すべし」(イザヤ書四十二章

一節。

預言者の示したる此の「僕」とは即ちヨルダン河に於てバプテスマを受けし時に神より其の聖靈を與へられしキリスト・イエスである。キリストとは「受膏者」と云ふを意味す。此の故にキリストの體の中に入れられて、聖靈を以て膏そゝがれたる者はこれによつて皆キリストに與る者とされ、「僕」の一部となるのである。(ガラテヤ書三章十六、廿七-廿九節)。イエスは其の殿に來て其の僕等と會計せし時に忠信者の或る者を發見して、その忠信者を承認された。此の事實は聖徒が義の外服の中に入れられて、救の衣を與へられると云ふ預言によつて示されてある。(イザヤ書六十一章十節)。「救の衣」は斯かる者が至高き神の「僕」である事を識別せしめ、又「義の外服」は彼等が主の承認を受けたる僕なる事を識別せしむ。

聖靈を以て膏そゝがれると云ふ事は神エホバの聖名によつて仕事を爲すべく任命を受けることと云ふを意味す。神は其の大なる僕キリスト・イエスに向つて其の爲すべき仕事を任じられた。而してキリストの體の成員たる者は皆其の仕事に參與す、何故なれば彼等は此の「僕」を形成するからである。イエスは眞理の證言をなす爲に此の地上に來たと聲明された、その如く、彼の體の成員も同じく眞理の證言をなさなければならぬ。之等受膏者に與へられある任務は此の結論の正當なるを支持してゐる。聖書は明示して此の任務は主の受膏者にして、義

の外服の内に入れられたる者の全部に適用される事を教へてゐる。
 「僕」に屬する者は其の膏を、がれし理由に基きて、「貧しき者（心貧しき者）に福音を宣へ傳ふる事、心の傷める者を醫す事、俘囚人に赦しを告ぐる事、縛められたる者に解放を告ぐる事、エホバの恵みの年と神の刑罰の日とを告ぐる事、すべて悲しむ者を慰むる事」の任務に就かなければならぬと示されある此の聖言に留意すべきである、（イザヤ書六十一章一、二節）。此の任務は甚だ廣範圍に亘るが、神の他の預言に於て更に詳説されてゐる。此の任務が全基督に適用される以上、基督に屬する者が神の刑罰に關して證言を爲すべき一期間がなければならぬ。神が敵なるサタンと其の組織制度に對して刑罰を執行さるゝ事は絶対確實であつて、此の刑罰に就ての證言を地上諸國の主權者とその民衆に與ふる目的は、彼等をして全能の神エホバを知らしめ、惡魔の組織制度の上に最後の大破滅の來る以前に於て其の下より脱するの機會を與へんが爲である。

主イエスが王國を受けて其の王權を行使し始められた年は一九一四年（大正三年）であつた。主イエスはサタンを天界より放逐して後に其の殿に臨み、忠信なる僕等を任命された。之は主イエス御自身の示されしタラントとミナの譬によつて明瞭である。承認を受けて殿の状態に入れられたる此の一團に對して主は地上に於ける王國の全利害を委ねられた。之に就て大

預言者なるイエス・キリストは自ら斯く告げ給ふ、「然れば汝等もまた預備せよ。意はざる時に人の子來らんとすればなり。時に及びて糧を彼等に與へさする爲に主人が其の僕等の上に立てたる忠義にして智き僕は誰なるか。その主人の來らん時に斯くの如く勤むるを見らるゝ僕は幸福なり。我まことに汝等に告げん、其の所有を皆かれに督どらすべし」（マタイ廿四章四十四―四十七節）。

主イエスは此の僕級に向つて「我汝に多くのものを督どらせん」（マタイ傳廿五章廿一節）と示されてゐる。神エホバが其の「聖名を崇むる民」として取られたのは即ち之等の者であつて、彼等が神の聖名を崇むる爲に取られたりとある以上、彼等は神の聖名に對する證言をなさなければならぬのである。使徒ヤコブがエルサレムの會議に於て示したのは即ち此の種の人々である。而して彼の預言は今其の成就の途上に在る。

神の聖名を崇むるの民として此の世の人々より取られて今地上に在る忠信者はキリスト・イエスの「足」を形成す、何故なれば彼等は最後に地上にある成員であるからである。之等の者こそ神の特殊の證者たる特權を得るのである。之即ち預言者の預言と全く一致す、「歡喜の福音を傳へ、平和を告げ、善き福音を傳へ、救を告げ、シオンに向ひて汝の神は統へ治め給ふと云ふ者の足は、山の上において如何に美はしきかな」（イザヤ書五十二章七節）。

之等の者こそ新しき國家即ち神の國が誕生せる事と、神がキリスト・イエスを通じて統治を開始された事實とを特に證言する者である。彼等シオンの成員は互ひに語り合ふ、「汝の神は統べ治め給ふ」と、彼等は此の意味に於て神の「斥候」である。彼等は預言の進展するを見て、神の聖意を確め知り、其の見る所を互ひに語り合ふと共に又之を聞かんと願ふ他の者等に喜んで語り告げるのであるが、之即ち預言者の言と全く一致してゐる。「汝が斥候の聲聞こゆ、彼等はエホバのシオンに歸り給ふを目と目と相合せて視るが故に皆聲を擧げて諸共に歌へり」(イザヤ書五十二章八節)。神エホバより發する電光は殿級の者の首位者の上に輝く故に其の成員は何れも照らされて神の言の上に光輝を受け、眞理の一致的解明を與へられて、喜び勇み、諸共に聲を揃えて神エホバと其の御國讚頌の歌を歌ふのである。

實證の一歌

神は蓄積的證據、即ち一の預言者の證言と他の預言者の證言とを一致符合せしむるの證據を備へて、其の民の信仰を強むるの方法を執られた、「僕」級の者の位置と其の任務に就て神は其の預言者をして更に斯く示し置かる、「その後我わが靈を一切の人に注がん。汝等の男子女子は預言せん。汝等の老いたる人は夢を見、汝等の若き人は異象を見ん。其の日我また我が靈を僕婢に注がん」(ヨエル書二章廿八、廿九節)。

エホバの靈はその見えざる力である。「注ぐ」とは「激ぐ」若くは「送り出づ」と云ふを意味す。神は其の被造物をして御目的を完成せしむる爲にその上に神の靈を與へられる。神は己が全部を神に獻げて其の聖旨をなさんとする者以外には何者に向つても其の靈を與へられない。此の預言は神が或る特殊の目的の爲に或る級の者に其の靈を與へ給ふ事を示してゐる。此れはペンテコステの時に縮圖的に成就したが、一九一八年主イエスが其の殿に來られた後に完成的に成就した。此處に示す證據は更に進んで神の證者の何者なるかを識別せしめ、又彼等をして其の特權と責任とを悟らしむるを目的とす。

此の預言はイスラエル時代の終末に適用さるゝ事を示してゐると同時に、靈的イスラエルを形成する眞の教會撰擇時代の終末に適用さるべきを示してゐる。預言者ヨエルは示して此の預言は「エホバの大なる恐るべき日の來らん前に」(ヨエル書二章廿一節)適用さるべしと告げてゐる。紀元六九年より七三年の間にイスラエル人の上に「大なる恐るべき日」が臨んだ。イエスは示して、その再臨在の時、神の御國が立てられる時に今一つの「エホバの大なる恐るべき日」が全地の上に臨み、其の日の直前に於て一大證言が爲されなければならぬと教へてゐられる、(マタイ傳廿四章十四、廿一節)。

ペンテコステの時にペテロと其の他の弟子等が聖靈を以て齊そゝがれた。之即ち聖靈の注

がれたる事の最初である、(使徒行傳二章一―五節)。此の時に使徒等は唯聖靈によつて膏そゝがれたるのみに止まらずして、彼等は現場に居合はせた人々に語る爲に各種の國語方言を以て證言する事を得せしめられた。彼等が種々の國語方言を以て語るを聞いた反對者等は嘲笑して斯う云つた、「此の人々は甘き葡萄酒に満たされたる者なり」と。其の時ペテロは心直き人に知らしめんとて斯う告げた、「今は晝の九時なれば汝等の思ふ如く此の人々は酔へる者に非ず。之即ち預言者ヨエルによつて語れる所なり」(使徒行傳二章十五、十六節)。

ペンテコステ以前に於ては、神は其の聖靈を極少數者のみに制限して與へられた。神によつて最初に生れさせられ、豫定の時至るに及びて膏そゝがれし最初の人にはイエス・キリストであつた。ヨエルの預言に云ふ、「其の後(即ち其の時以後)我わが靈を一切の人に注がんと。此の「一切の人」とはペテロが解明せる如く、肉のイスラエルの家のみに限られてゐる、何故なれば此の證言は當時イスラエル人の爲のみに制限されてゐたからである。其の時に多數の人々が主を信じて聖靈を以て膏そゝがれた事は預言者ヨエルの預言せる通りである。(使徒行傳二章卅八―四十一節)。此の場合ペテロは單にヨエルの預言を引用したに止らずして彼自身の言も又一の預言であつた、「神云ひ給はく、末の世に至りて我わが靈をもて凡ての人に注がんと。汝等の男子女子も預言すべし。又汝等の若き者は異象を見、老いたる者は夢を見るべし。其の時我わが靈を我が僕なる男女に注がんと。彼等も亦預言すべし。我上なる天に奇蹟を現はし、下なる地に休徴を示さん。即ち血あり、火あり、煙あるべし。主の大なる顯赫るしき日の來らん前に日は暗く、月は血に變らん」(使徒行傳二章十七―廿節)。

使徒ペテロの云ふ此の「末の日」とは即ち此の預言の完成的に成就する時の何時なるかを示してゐるのである。「末の日」とは疑ひもなく此の世即ちサタンの組織制度の終末期、即ちキリスト統治の開始を指してゐるのである、(テモテ後書三章一―五節)。我等は今既に此の「末の日」に在る。故にヨエルの此の預言の完成的に成就する事を期待すべきである。

使徒達の死後、地上に於ける教會制度の上に暗黒時代が臨んだ、何故なれば其の指導者達がサタンの指揮下に移り去つたからである。主は最初人々の間に「善き葡萄酒の樹」を植ゑつけられたに拘らず、之は頓て地の「異なる葡萄酒の樹の惡しき枝」に變つたのである、(エレミヤ記二章廿一節)。然る後に神はペテロをして斯う預言せしめられた、「主の御前より慰安の時(爽快ならしむる時)來り……」(改譯使徒行傳三章十九節)と。此の「慰安の時」は來た、而して之は主イエスの再臨を以て開始し、預言者エリヤの仕事によつて豫表されたる期間であつて、教會の爲すべき或る特殊の働きを豫示してゐた。

一九一八年(大正七年)の苦難時に際して、キリストの追隨者の多數は之で地上に於ける教

會の仕事は終つたと考へた。其の時キリストの眞の追隨者の或る者は、未だ地上に於て爲さなければならぬ仕事の残つてゐる事實に目覺めた。一九一九年(大正八年)より一九二三年(大正十二年)迄の間に、主を愛する者等の間に一大覺醒が出現した。彼等の示した熱誠はこれ神の靈が彼等の上に置かれた事を示してゐる。神エホバの聖名に對する最大の證言事業は一九二二年(大正十一年)より開始され、今日も尙ほ盛大に進展中である。之ぞ即ちヨエルの預言の第二次的即ち完成的成就の行はれつゝあるを示してゐるのである。

此の預言には斯く記さる、「其の時我わが靈を我が僕なる男女に注がん。彼等も亦預言すべし」(使徒行傳二章十八節)と。一九二二年(大正十一年)以前に於ては、眞理の宣明は主として獻身者中の少數者のみによつてなされてゐた。然し此の年以後、神の國建設と刑罰及び地上人類に對する祝福の證言は主の受膏者の殆ど全部の手によつて爲されるやうになつた。

預言即ち宣明は口の言でなす事も出来るし、又眞理の音信を印刷に附して之を人々の手に配附する事によつても爲される。而して印刷物による眞理宣明の仕事は今や多數の老弱男女の手によつて盛んに行はれつゝあるのである。故に「凡ての人」とは男女の區別と従前の状態に拘りなく男女の獻身者の全部を指すのである。

又若き人とはイエス・キリストに在る新しくして若き兄弟等を謂ふのであつて、其の間に

男女の區別はない、何故なればキリストの中に在る者として承認されたる者の間には男女の區別はないからである。(ガラテヤ書三章廿八節)。「若き人」とは強健にして精力に滿ち、主への奉仕に熱心なる活動を示す者を謂ふのであつて、此の場合年齢は問題とならぬ。亦「老いたる者」とは老耄衰弱して意識朦朧となり、己がなさざるべからざる事に對して無關心なる者を表象す。異象を見る者は此の「若き者」即ち主への奉仕に活動する者のみに限られてゐる。異象とは神の御目的を明かに諒解するを意味するのであつて、斯く神の御目的を諒解し、主に對する熱心に動かさるゝ者は喜び勇んで神に奉仕す、「默示(異象)なければ民は放肆にす」(箴言廿九章十八節)。事實クリスチャンは神の言を諒解し、喜び勇んで強く、若々しくなる爲に之に養はれなければならぬ。(アモス書八章十一―十三節)。

殿の状態に入れられ、神が其の民に顯示さるゝ眞理の光に照らさるゝ者は主に在りて益々強くなり、神に對する歡喜の奉仕を持続するのである。神が其の聖名の證者として用ひらるゝは即ち斯かる人々である。之等の者こそ即ち神が其の聖名を讃頌せしむる爲に此の世の人々の間から取られたる所のそれである。

此の預言の成就する時を示して斯く記さる、「また天と地に徴證を顯はさん、即ち血あり、火あり、煙の柱あるべし。エホバの大なる恐るべき日の來らん前に日は暗く、月は血に變ら

ん」(ヨエル書二章卅、卅一節。使徒行傳二章十九、廿一節)。
 實證は示して、此の預言は一九一八年に主イエスが其の殿に臨まれし後に成就した事を告
 げてゐる。此の時以後主は天界に於ける徴證と異象を其の民に示されたのであつて、今は即
 ち悪魔の組織制度に對する更によき諒解と、神の國の誕生に關する更に明かなる顯示を與へ
 られたる事を意味してゐる。
 それと共にサタン(天界より放逐されたる事と、地上に於ける最後の大戰に對する準備進
 行の事實をも示された。「血と火」とは死と破壊とを表象す。過去十數年に亘り地上には多數
 の死者と莫大なる財産的損害があつた。「煙」は破壊の進行中なる事を表象す。所謂「キリス
 ト教會制度」と其の文明は今や急速度を以て崩壊しつつある。教會制度の指導者たちは神の
 福音の光を「暗く」なし、人間が完全に創造されたる事實を否認し、その墮落せる事と、イエ
 スの血によつて人間が贖はれると云ふ事實とを否定し、公然と悪魔の組織制度に合同して、
 地上に於ける神の國であると僞稱する國際聯盟の偽物制度を擁護してゐるのである。彼等の
 なしつゝある事は神に對する信仰を破壊するものである。聖書中に使用されある「月」とは神
 の律法を表象するので即ち之は神の聖意を意味するのである。之は人間に對して死の象徴と
 なつた、故に「月は血に變つた」のである。

之等の事實は特に過去數年の間に成就したのであつて、之は皆神の御目的の異象を悟る者
 に明かに示された。預言者は示して、之等の事は「エホベの大なる恐るべき日の來らん前
 に」發生すると告げてゐる。之即ちイエスによつて示されし處の最後の大艱難を意味す。
 (「マタイ傳廿四章廿一節」。預言は示して、之等の事實の發生すると同時に、神は其の聖名を呼
 ぶ全部の人々の上に其の靈を注ぎ給ひ、又之等の人々は神の聖名に對する證言をなすと云ふ
 事を教へてゐる。各種の實證は此の預言が今成就の途上にある事を立證してゐる。此の事も
 亦神の聖名を崇むる民として執られたる者が何者であるかを識別せしむるのである。

エリヤとエリシャ

神は他の預言的模圖を作つて、之によりキリスト・イエスの眞の追隨者が爲すべき仕事
 と、發生する事件とを豫示して置かれた。預言者エリヤは此の預言的仕事を開始し出した。
 エリヤに代つて膏そゝがれたるエリシャはエリヤが始めた仕事を完成した。エリヤの仕事は
 既に示せる如く基礎的眞理を眞のクリスチャンに復興する事にあつた。(列王記略上十九章十
 六節)。神がエリヤを取り去らるゝ時が到來した。「エリヤ其の外套をとりて之を巻き、水を打
 ちけるに此方と彼方に分れたれば、二人は乾ける土の上を涉れり。涉りける時エリヤ、エリ
 シャに言ひけるは、我が取られて汝を離るゝ前に汝我が汝に爲すべき事を求めよ。エリシャ

云ひけるは、汝の靈の二つの分の我に居らん事を願ふ。エリヤ云ひけるは、汝難き事を求む。汝若し我が取られて汝を離るゝを見れば此の事汝に成らん。然らずば此の事汝にならじ」

(列王記略下二章八―十節)。

エリヤにしてもエリシヤにしても共に、神の受膏者等が主イエスの再臨後地上に於てエホバの聖業を實行する事を預言してゐるのである。エリヤをして其の仕事になさしめたるは即ち神の靈であつた。而してエリシヤはエリヤの受けし神の靈の二倍を與へられん事を願つた。之は即ちエリシヤ期間に於ける教會の仕事に従ふ者に與へらるゝ神の靈の如何なるかを預言するものである。エリシヤが二倍の靈を受け得る唯一の條件は即ち、エリヤが取り去られたる事實を見る事にあつた。之ぞエリヤとエリシヤの二人によつて表象されてゐる教會の爲すべき仕事と、期間の間に明かなる區別をなし得る者のみが神より二倍の靈を受ける事を明示してゐるのである。

エリヤの經驗は基礎的真理の復興の仕事と預言すると共に、エホバと其の御目的に關する證言を爲すの仕事とを豫表してゐた。エリヤは己が受けし使命を果したが、之は教會の爲すべき仕事の一區劃が終つた事を豫表したのである。然し證言をなすの仕事は未だ完成してゐなかつた。エリシヤの經驗は神の受膏者が爲すべき仕事を豫表してゐるのであつて、其の仕事

は神より二倍の靈を受けてエホバの聖名に對する證言に熱心を示さなければならぬ事を表象してゐるのである。而して此の事實は聖靈の注がれる事に就てのヨエルの預言に全く一致してゐる。

其の仕事に區別の立つ時の至るまでエリヤとエリシヤの仕事は共働したが、此の區別の時至るに及びて、神の受膏者が此の地上に於てなすべき「エリヤ期間の仕事」は終結を告げたのである。「彼等進み乍ら語れる時、火の車と火の馬現はれて二人を隔てたり。エリヤは大風に乗じて天に昇れり。エリシヤ見て、我が父、我が父、イスラエルの兵車よ、その騎兵よと叫びしが再び彼を見ざりき。こゝに於てエリシヤ其の衣をとらへて之を二片に裂き、エリヤの身より落ちたる其の外套を取り上げ、歸りてヨルダンの岸に立つ」(列王記略下二章十一―十三節)。此の故に二人の此の預言者は神の受膏者の同じ級の者を表象してゐるのであつて、彼等の分離した事は、神の聖名に於て行はるゝ或る特殊の仕事の終結すると共に、他の或る特殊の仕事の開始さるゝ事を意味してゐるのである。

此の預言の成就せるを示す實證として如何なるものありや。一八七八年より一九一八年迄の間、地上にある神の受膏者はエホバの代表者なるキリスト・イエスの指揮下に於て真理の探求者等の前に神の真理の福音を傳達するの事に従事した。此の仕事の効果としては即

ち、神の聖意の研究と教導の爲に眞の献身者を集合し、互ひに授け慰め合つて、最も聖き信仰を築き上げる點にあつた。

此の預言の中に示された「火の馬と火の戦車」とは一九一八年頃になつて顯示された破壊的、好戦的大組織制度を善く表象し、又大風は世界大戦に關聯して人々の上に臨んだ大なる艱難を表象したのである。此の世の「キリスト教國」に住む神の證者等が武斷制度や教職者等より嫌忌され、迫害されたのは即ち一九一八年（大正七年）の年であつた。其の時神の受膏者達が神エホバの聖名の爲に詩言をなしたりとの理由によつて、彼等の上に甚大なる艱難と迫害が臨んだのである。一九一八年の春、地上に於ける神の受膏者の仕事は全く停止された。エリヤが大風によつて取り去らるゝ事によつて預言された事實は其の時に成就した。此の故に一九一八年の年に神の受膏者なる民の上に臨んだ大艱難は、エリヤによつて豫表された教會のなすべき特殊の仕事の終結した事を明示してゐるのである。

我等はエリヤが眞の天即ち神エホバの御座所に取り上げられたのではないと云ふ事を知悉してゐる、何故なればエリヤが取られた時より遙か後に於てイエスが「人の子の他には天に昇りし者なし」（改譯ヨハネ傳三章十三節）と明かに示してゐられるからである。此の預言は即ち、エリヤの歩みし道によつて豫表された所の教會の「仕事」が完成した事が天の神に報

告されたる事を意味してゐるのである。

此の大艱難より一年以上の期間を通じて地上に在る神の受膏者等は無活動の状態にあつた。然る後之等の忠信者は彼等の爲さざるべからざる重大なる仕事のあるを自覺してその實行に着手したのである。神は一九一九年（大正八年）以後其の民に二倍の靈即ち力を與へて、彼等を己が證者として遣はされた。而して此の時以後、彼等は神の聖名に於て仕事に精勵し、その證言を全地に傳へ、未曾有の熱誠を現はし示したのである。之ぞ即ち神の受膏者たる者は神の證者として、今日此の時、地上に證言をなさざるべからざるを立證する更に進んでの證據である。

エホバの證者

キリスト・イエスは神の偉大なる證者である、（ヨハネ傳十八章卅七節）。「證者」とは證言をなす者を謂ふ。此の故に神の證者としてエホバの聖名の爲に證言をなす者は、キリスト・イエスと全く一致し、キリスト・イエスが首位たる神の組織制度の成員でなければならぬ。殿の状態に入れられ、シオンの中に築き上げられたる者は、エホバの證者たるべき者として膏をそゝがれ、その權威を受けたる者である。神の預言者は示す、「その殿にあるすべての者呼ばはりて榮光なるかなと云ふ」（詩篇廿九篇九節）。彼等が神の榮光を語りつゝある此の事實は

即ち彼等が神エホバの證者である事の證據である。此の預言者の言に見るも、自らキリストの追隨者であると稱しつゝ神エホバの聖名に對する證言をなすを怠り、又は拒絕する者は即ち彼等が殿級の者に非ざる事が明かである。シオンに於て一の位置を受け持つ者は即ち殿級の者であつて、神は此のシオンより光を放ち給ふのである、(詩篇五十篇二節)。神は其の聖名を崇むる民を地上人類の間より取り給ふたが、之等の者に就て斯く示し給ふ、「すべて我が名をもて稱へらるゝ者を來らせよ。我彼等を我が榮光の爲に創造せり。我さきに之を造り、且つ成し終れり」(イザヤ書四十三章七節)。

神は己が聖旨を實行せしむる器として新被造物を創造された、而して此の新被造物の仕事の一部は斯くの如く尙ほ其の地上に在る間に彼等によつて行はれるのである。其の人が天國の榮光に參與するか否かは、一に其の人が尙ほ此の地上に在る間に於て爲すべき仕事を忠實になすか否かによつて決定されるのである。

「キリスト國」の民衆は惡魔がその組織制度、特にその中の宗教分子を通じて行使する惡感化に煩ひされて眞理から盲目となつてゐる。神が其の聖名の爲に證言を行かしめらるゝ豫定の時が遂に到來した。神は其の預言者を通じて斯く示し給ふ、「國々は皆相集ひ、諸々の民は集まるべし。彼等のうち誰かいやさきに成るべき事を告げ、又これを我等に聞かするを得ん

や。その證人を出して己の是なることをあらはすべし。彼等聞きて此は眞實なりと云はん」

(イザヤ書四十三章九節)。重大問題と云ふのは即ち「誰が全能の神か」と云ふ點である。教職者は宗教に關してサタンの代辯者たる役目を勤める。彼等は自ら權威を以て語ると稱す。何等は神の御言に絶對逆行したる事を平然と語り告げ、人間と其の組織制度の努力によつて地上に平和を齎らすべく、地上は人間の住所として美と榮に滿つるに至るべく、此の仕事は教職者と其の仲間によつて完成されるのであると教ふ。神は今彼等の眞偽如何を試み給ふ。故に斯く宜ふ、「彼等のうち誰かいやさきに成るべき事を告げ、之を我等に聞かする事を得んや。その(惡魔の組織制度の)證人を出だして己の是なるをあらはすべし、(彼等の主張する處を實行にて示せ)。彼等聞きて此は眞實なりと云はん」

然る後に神エホバは其の「僕」級を形成する受膏者に向つて直接に語り給ふ、「エホバ宜はく、汝等は我が證人、我が探みし僕なり。然ば汝等知りて我を信じ、我が主なるを悟り得べし。我より前に造られし神なく、我より後にもある事なからん。唯我のみ、我はエホバなり。我の外に救ふ者あることなし。我は前に告げ、また救を施し、また此の事を聞かせたり。汝等の中には他神なかりき。汝等は我が證人なり。我は神なり。これエホバ宣へるなり」(イザヤ書四十三章十一、十二節)。之即ち神の受膏者なる者は各地に證言して、エホバが唯

一の眞の神に在す事、此の事實を全被造物の前、神に示し、神の御豫定の時の到來せる事、而して神は其の全能の御力を顯示して之を立證し給ふ事を普く人々に宣明しなければならぬ事を確實に示してゐるのである。

受膏者は此の任務に服するに際して、エホバが唯一の眞の全能なる神に在す事を指示し、サタンは神に敵する者の元兇にして眞の神エホバを模造したる偽神なる事、サタンは見ゆる部分と見えざる部分とによつて形成さるゝ一の強大なる組織制度を有して、エホバの聖名を誹謗して人々を神エホバより離反させる爲に此の悪しき組織制度を自ら運用しつゝある事、サタンは地上諸國の主権者を悪魔の宗教の迷信下に引き摺り込み、一般商人をも此の悪組織制度の一部とならしめたる事、神エホバは今此の悪魔の組織制度を破却して地上全人類に平和、幸福、繁榮を齎らし給ふ事、此の方法以外に人類がその切望する所を實現する道が他に絶無なる事を特に宣明しなければならぬ。此の證言は復讐の意味を以て傳へられるに非ずして神エホバに對する愛の献身を以てなさるべきである。而して人々の利益となる義しき道を人々に示さんが爲に此の證言はなさるべきである。

反 對

神エホバの聖名に對してなされる斯かる證言に對して、サタンが其の全力を盡して反對し

對抗するは當然事である。イエスは預言して、サタンは其の組織制度を通じて眞理に大反對をなし、眞理の證言者として立つ者に迫害を加ふべく、又神の證言者たるべき者として此の世より選り取られたる者は此の世より嫌忌され、迫害されて多くの苦難に遭はんと告げて置かれた。それと共にイエスは又己が追隨者を鼓舞して、イエス御自身が此の世よりの反對と迫害に苦しまれし事、而して此の世に勝たれし事を弟子等に告げて、その僕たる者も之と等しかるべしと示された、(ヨハネ傳十五章十八―廿一節。十六章卅三節)。

然る後にイエスは又一の預言を語り、天界に二つの大なる異象の顯はれる事と、サタンが天界より地上へ放逐される事の行はれる期間に就て特に示し置かれた、(黙示録十二章一―十二節)。而してサタンの組織制度が地上に於ける神の組織制度に屬する者を迫害する事を預言して亦斯う示された、「龍は女を怒りてその裔の残れる者、即ち神の誠命を守り、イエスの證言を有てる者に戦闘を挑まんとして出で行けり」(改譯黙示録十二章十七節)。大預言者イエスの此の御言は、神の證言者たる者は誰なるか、地上に於て最後の證言をなす者は誰なるかと云ふ事を識別するを得しむ。イエスは示して「龍」即ち悪魔の組織制度は「裔」の「遺殘者」即ちシオンの子等に挑戦すべしと預言された。「遺殘者」とは最後に地上に立つてゐるキリストの追隨者の忠信なる集團であつて、キリストの「足」級の成員であり、神に全く献身し、喜び

勇んでその聖意を行ふ者である。何故にサタンは之等の者を激怒するか。何故なればエホバの大預言者キリストは示して彼等は「神の誠命を守り、イエスの證言を有てる者」と告げて置かれるからである。

イエス・キリストの證言

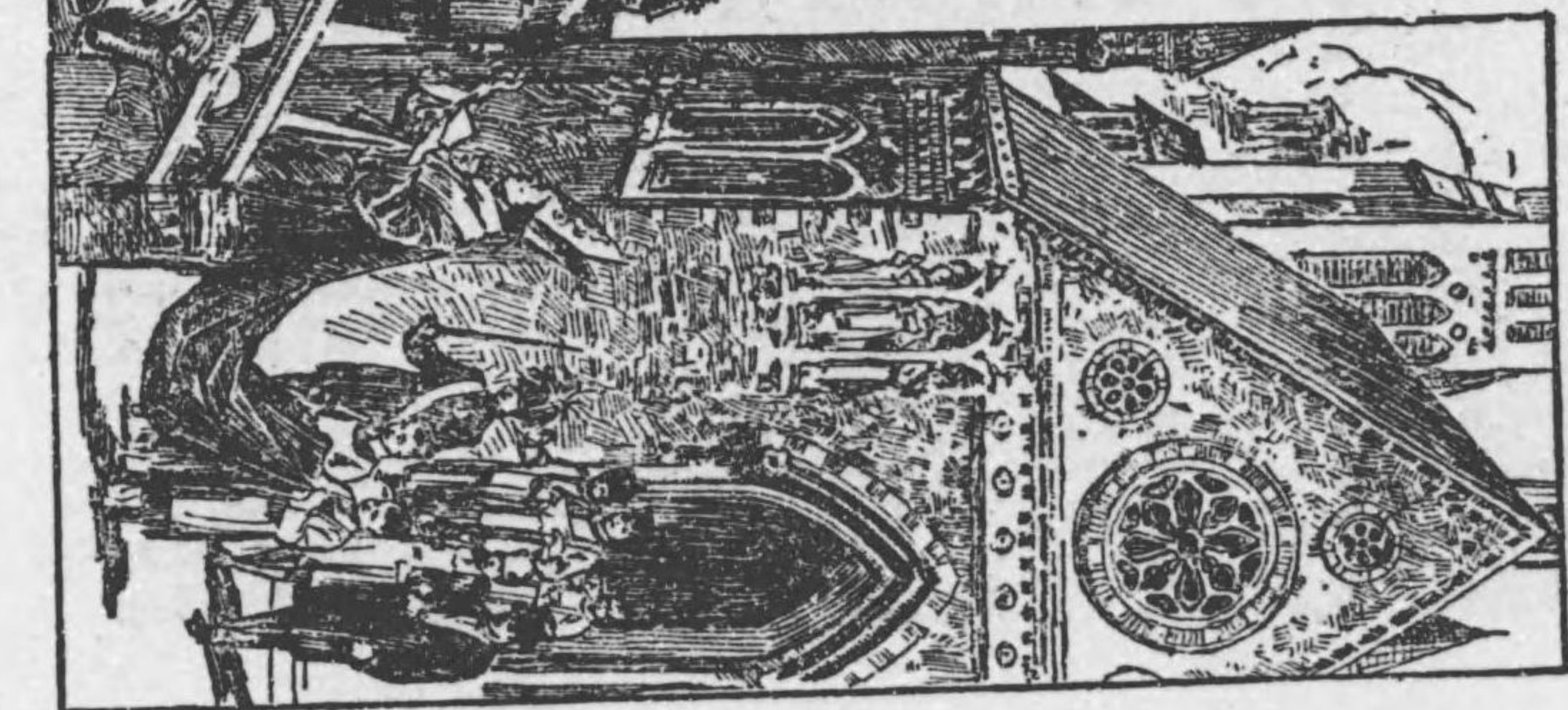
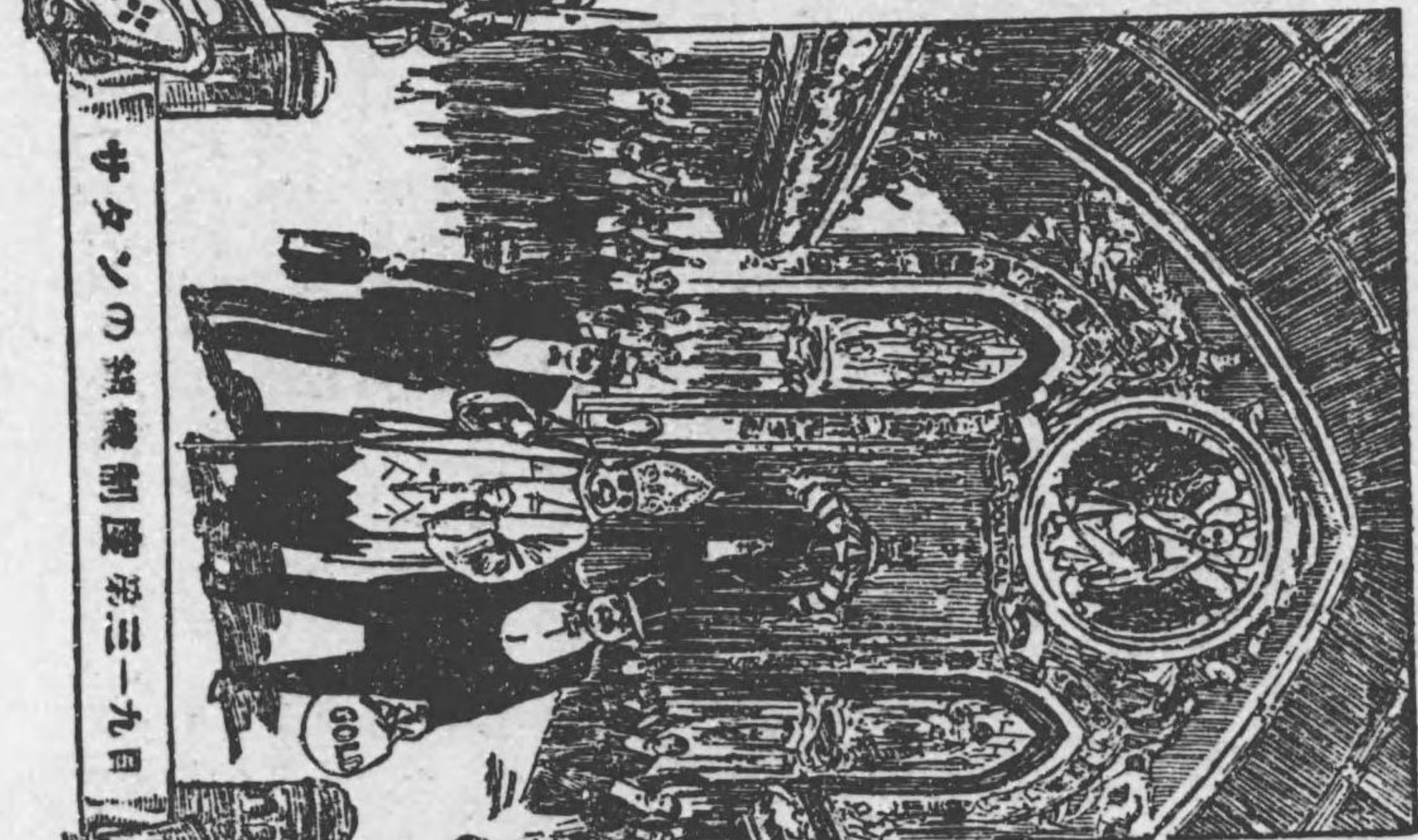
「イエス・キリストの證言を有つ」とは何を意味するか。即ち遺残者は彼等がキリストに在つて神エホバの子とされてゐると云ふ聖靈の證を有してゐる事(ロマ書八章十六、十七節)、及び彼等は義の外服の中に包まれて各自が救の衣を與へられ、彼等が主の承認を受けて神の組織制度の成員となつてゐる事を識別し得る事を意味してゐるは事實である。然し此の場合イエス・キリストの御言は更にそれ以上の事を意味してゐる。之は即ち神がイエスに委ねられたる證言の仕事之等シオンの「遺残者」にも委ねられてゐる事を意味してゐる。神エホバはイエス・キリストを己が大預言者となして彼に全権能を授けられた。エホバの聖名に對する證言を全地に行かすむべき責務はキリスト・イエスの肩の上に置かれた。イエスは其の殿に來て「遺残者」を承認し、彼等をシオンの中に入れられた時に「其の所有」の全部、即ち地上に於ける神の國の利害の全部を之等の者の手に委ねられた。之即ちイエスはエホバの聖名に對して證言をなすの大特權と責務とを遺残者の手の中に委ねられた事を意味するのであ

る。此の故に彼等は神エホバがイエス・キリストの手に中に委ねられし「イエスの證言」を爲すのである、之等の「所有」を主イエスより預けられたる以上、彼等は此の證言をなさなければならぬ。遺残者を形成する此の一團がエホバの證言者として地上諸國の主權者と共に民衆に證言を示し、彼等に向つてエホバが全能の神に在す事、エホバは其の直ちに爲さんとする事を聖言の中に示して置かれる事を證言すべきはエホバが彼等に與へられたる神命である。「遺残者」はエホバの神命を勇敢に守りて、エホバに對する彼等の愛が完全なる事を立證するのである、(ヨハネ第一書四章十七、十八節)。彼等が喜び勇んで神エホバの聖旨を行ひ、イエス・キリストの證言をなさざる限り神の御命令を守る事は不可能である、(ヨハネ第一書五章三節)。故にエホバは彼等に向つて示し給ふ「汝等は我が證人なり」と。
サタンは彼の「龍」即ち地上に於て萬のものを呑み食はんとする彼の組織制度を通じて其の激怒を顯はした。彼は己が子等即ち所謂「キリスト教會制度」の教職者を憤怒せしめて暴徒を煽動せしめ、神に忠信なる證者達を迫害するのである。此の實證は最近米國ニユー・ジヤージー州南アンボイ市に發生した。彼サタンは牧師、神學者の教職者をして同じくサタンの組織制度に屬する政治家を用ひしめ、神に忠信なる證者等が民衆を戸別訪問して、神が民衆を現下の壓制下より救ひ出して彼等に望む所の祝福を與へられんとする旨を民衆に證言した

との理由によつて、神の證者達を捕へて投獄したのである。之等の事件は最近米國ニュー・ジャージー州のベルゲンフキールドやイングルウツド、又同じく米國カネクチカツト、ジョーヤ、南カロリナ、ペンシルバニヤ其の他の諸州に頻出してゐるのである。

之等神に忠信なる證者は至る處に活動して、聖書を説明せる書物冊子を一般民衆の手に配附する方法によつて福音の宣明をなしてゐる。而して彼等は之を週の日曜たると他の週日たるとを論ぜずになすのである。彼等は彼命は服して其の聖意をなすを喜び、民衆を愛して人々に神の祝福を語り告ぐる事を喜ぶが故に此の事をなす。神とキリストの代表者を偽り装ふ偽善なる教職者は之等忠信者が日曜取締法令を犯して仕事を爲すとの理由によつて之を捕縛投獄せしめるのである。彼等教職者は米國憲法が國民に信教の自由を承認してゐるに拘らず斯かる悪行爲を敢へてなすのである。之等の實證こそ即ち上記主イエスの預言の成就しつゝあるを確實に立證してゐるのである。

神の善き事を證言しつゝある之等エホバの證者は、地上の人命財産に對して何等かの危害を加へつゝありや。斷じて然らず、然らば何故に教職者と彼等の仲間とは之等の證者を嫌忌し迫害するのか、何故なれば彼等教職者は此の惡組織制度の父なるサタン即ち惡魔の指揮下に行動してゐるからである。サタンは之等證者の忠信と其の證言とを嫌忌して此の迫害を之等



サタンの組織制度第三一九目

の人々の上に加ふ。之等エホバの證者のみが、サタンが今此の地上に有する實際の敵である。サタンは他の全部の者を盲ましめ、恐怖を以て彼等を沈黙せしめて了つた。神の證者に迫害を加ふる者はサタンの「婦」即ちバビロンの裔であつて、彼等はシオンの「裔」を嫌忌して之を迫害するのであるが、之は神の預言し置かれし通りである。

遺残者は敵の迫害を恐怖して、神エホバの聖名に對する證言の仕事を中止するのであらうか。敵を恐れて證者たるの仕事を中止せる者は遺残者として、又神の受膏者としての立場を自ら放棄したるものである。遺残者を形成するシオンの眞の成員には恐怖が絶無である。彼等が眞理を傳へて歩む其の道にサタンの組織制度の激怒を招く事は確實である。然し神は彼等に力を與へる爲に其の預言者を通じて斯く示し置かる、「我は海をふるはせ、波を鳴りどよめかする汝の神エホバなり。其の名を萬軍のエホバと云ふ。我わが言を汝の口に置き、我が手の蔭にて汝を掩へり。斯くて我天を植ゑ、地の基を据ゑ、シオンに向ひて汝は我が民なり」と云はん（イザヤ書五十一章十五、十六節）。

エホバの「手」はその力を表象す。遺残者はシオンに屬す。彼等は神の證者である。エホバは彼等を掩ひ護りて彼等に示し給ふ、「汝等は我が民なり」と。之等忠信なる證者等は其の愛を神エホバの上に確立す。故に神エホバは遺残者に向つて示し給ふ「汝は曩に云へり、エホ

ペは我が避難所なりと。汝は至上者を其の住所となしたれば災害汝に至らず、苦難汝の幕屋に近づかじ。彼その愛を我に注げるが故に我これを助けん。彼我が名を知るが故に我これを高き所に置かん」(詩篇九十一篇九、十、十四節)。

主の歡喜

イエスは其の殿に来て遺残者を承認されし時に彼等に向つて斯う告げられた、「汝は僅かなる物に忠なりき、我汝に多くの物を掌らせん。汝の主人の歡喜に入れ」(改譯マタイ傳廿五章廿一節)と。「主人の歡喜」とは何を意味するか。之を正當に諒解する時にイエスの追隨者は全き信頼と歡喜とを有する事が出来る。主イエスが昇天されし時に、神エホバはイエスに命じて神が豫定の時至りてサタンを天界より放逐して彼を主イエスの足臺となさしめらるゝ迄は無活動の状態待ち受け居よと告げられた、(詩篇百十篇一節)。之は長い期間であつて其の全期間を通じてイエスは、サタンが父なる神エホバの聖名の上に斷えず誹謗を到來せしめつゝある事實を目撃してゐられた。神エホバの偉大なる聖名を擁護すべき任務はイエス・キリストの肩の上に置かれた。而して神は主イエスが此の聖名擁護の仕事を開始さるゝ時に就て預言者をして續いて斯う預言せしめて置かれた、「エホバは汝の力の杖(イエス・キリストに與へられたる全權能)をシオン(神の組織制度)よりつき出さしめ給はん。汝は諸々の仇の中に

王となるべし」(詩篇百十篇二節)。それに續いて天界に戦争起り、主イエスはサタンを天界より放逐して了はれたのである。

イエスが神エホバの聖名を擁護する仕事を始められたる時こそ彼にとつて偉大なる歡喜であつた。主イエスは父なる神エホバの聖名を擁護する最後の仕事に向つて進んでゐられる。之ぞ彼にとつては一大歡喜である。而して主イエスは此の歡喜の中に入るべく遺残者級の被承認者を招待されるのである。預言者は示して、此の時遺残者は喜び勇んで此の聖業に参加し、彼等はシオンの中に生れて若き者の露を有ち、主イエスに在りて強く勇ましく喜んで證言の仕事に參與すると告げてゐる、(詩篇百十篇三節)。之ぞ即ち今、地上に在る男女の少數が何故に歡喜して戸別訪問をなし、エホバの聖名に對する證言をなしつゝあるかを説明する唯一の理由である。遺残者は今、主イエスの歡喜に入れられたのである。

編 壘 と 柱

エホバは其の預言者をして、己が證者によつて一の特殊の證言を全地に行かしむべき時に就ての預言を示さしめ置かれた。而して其の時期を示して特に「其の日」と告げて置かれるが之は一九一四年(大正三年)より開始されたる一期間であつて、此の事實は主イエスが一九一八年(大正七年)に其の殿に臨まれたる後に於て始めて遺残者即ち神の證者の前に顯示され

た。今日（一九三〇年）も引き続き此の「其の日」なる期間内に抱合されてゐるのである。神の預言者は斯く記す、「其の日、埃及の地の中にエホバを祭る一の祭壇あり、其の境にエホバを祭る一の柱あらん。これ埃及の地にて萬軍のエホバの徴となり、證となるなり。彼等は暴虐者の故によりてエホバに叫び求むべければ、エホバは救ふ者、護る者を遣はしてこれを助け給はん」（イザヤ書十九、廿節）。

過去或る期間、聖書研究者は此の預言は埃及の「大三角塔」に適用されるものと眞面目に考へてゐた。然し主イエスが其の殿に臨まれて、神の御言の上に電光の照射の加はつた後、殿級の者は此の預言が埃及國內に在る石材の堆積なる一建築物とは絶對に無關係なる事を諒解した。此の預言が「埃及にかゝる重負の預言」の一句を以て開始されてゐる事實に留意しなければならぬ。之はエホバより發せられたる預言であつて、埃及によつて表象されたるサタンの組織制度と、之に對する神の受膏者の立場とに關して述べられたる所のものである。埃及がサタンの組織制度を表象する事の實證としてエホバは他の預言者をして斯く記述せしめて置かれる。「主エホバ斯く言ひ給ふ、埃及の王パロよ、視よ、我は汝の敵となる。汝その河に臥す所の龍（鱗……は誤譯。即ち悪魔と其の惡しき組織制度）よ、汝云ふ、河（地上人類）は我の所有なり。我自己の爲にこれを造れりと」（エゼキエル書廿九章三節）。斯くの如くエホバ

は其の預言者を通じて御自身が悪魔の組織制度に敵對すべき旨を預言し置き給ふ。故に斯く明記さる、「我等（神の受膏者）は神に屬き、舉世は惡しき者（サタン即ち悪魔）に服するを我等は知る」（ヨハネ第一書五章十九節）。

イエスが十字架に釘けられ給ひしは即ち此の埃及（この世即ち悪魔の組織制度を表象す）であつた、（黙示録十一章八節）。其の場所が何を表象するかを明かにして後に神は更に進んで、其の預言者を通じて此の預言の成就すべき時を示して置かれる。神の大祭司にしてエホバの組織制度の首位者なるキリスト。イエスは一九一四年（大正三年）に悪魔とその組織制度に對する行動を開始して、サタンを天界より放逐して了はれた。イエス・キリストは惡しき者なるサタンと其の組織制度が全く滅亡するまで此の行動を持續されるのである。預言者の言は其の時期を指示して斯く告ぐ、「エホバは早き雲に乘りて埃及に來り給ふ。埃及の諸々の偶像はその御前に慄ひ戰き、埃及人の心は其のうちに消え行かん」（イザヤ書十九、一節）。此の仕事に於てキリスト。イエスは神エホバの偉大なる代表者である。預言者は示して、神エホバは己が組織制度の最高に在して悪魔の組織制度を撃ち給ふと告げてゐる。

國際聯盟は一九一九年（大正八年）教會聯盟によつて承認され、其の後サタンの組織制度を合成する見ゆる三要案によつて完全に支持されるに至つた。此の時以後イエスの預言は成就

し始めたのである、即ち曰く、「地にては諸國の人悲み……人々危懼れつゝ世界に來らんとする事を待ち憐むべし」(ヘルカ傳廿一章廿五、廿六節)。歐米諸國を始め全地諸國が内憂外患の重荷に堪え切れずして今、必死苦惱の状態にあるは一般既知の事實である。故に預言者は今日此の時を示して「其の日」と特に指定し、其の時に於て特殊の證言が此の世即ち埃及を以て表象する、サタンの組織制度にあまねく行き渡らんと告げてゐるのである。

預言者は更に云ふ「其の日埃及の地の中にエホバを祭る一の祭壇あり、其の境にエホバを祭る一の柱あらん」と。此の預言が實際の埃及國內にある石造の祭壇や柱に適用する事の出來ないのは當然である、何故なれば或る物體が一の土地の中央にあつて同時に其の「境」にある事は不可能である。神の民の「遺殘者」即ちエホバの證者はエホバに對する一の祭壇となり、一の柱となる、而して彼等は此の世の眞ん中にあつて而かも此の世に屬しないのである、彼等はそれと共に此の世の最も境にある、何故なれば彼等は神の世即ち國の境に立つてゐるからである。此の故に此の預言に在る「祭壇」と「柱」とは即ち遺殘者を指すのである。

此の預言中にある「祭壇」とは「犠牲の祭物を獻ぐる場所、若くは屠る所」と云ふを意味する原字より翻譯されてゐる。主の受膏者は基督の首位者なるイエス・キリストと共に「祭物の契約」中に入れられてゐる。之等の者に就て「我等は終日汝の爲に死に付さ

れ、屠られんとする羊の如くせらる」(ロー書八章卅六節)。預言者は更に云ふ「祭物をもて我と契約を立てし我が聖徒を我が所に集めよ」(詩篇五十篇五節)と。獻身者の全部は「レビの裔」の名稱を以て呼ばる。主イエスは其の殿に臨まれし時に、之等の者は潔められて、「義をもてエホバに祭物を獻ぐる」と者とされた、(マテ福音三章三節)。此の「義をもて獻ぐる祭物」とは即ちエホバの聖名に對する證言をなす事によつて、神を讚美する事である、(ヘブル書十三章十五節)。之等の諸聖句は一致して、神の遺殘者が此の世(埃及)の眞ん中に在つて神エホバの聖名に對する證言をなす事によつて祭物を獻ぐる祭壇となる事を立證してゐる。

此の預言中にある「其の境に一の柱あらん」も亦同じ級の者に適用さる。「柱」とは證言をなす爲に立てられる記念碑である。大預言者キリスト・イエスはその殿に臨まれる時に忠信なる者として承認さるゝ者に就て斯く示し給ふ、「勝を得る者をば我神の殿の内の柱となさん。此處より再び出づることなし」(黙示録三章十二節)。其の者を神の殿の中の柱とされる目的は即ち神に對する證言者たらしむるが爲である、何故なれば斯く示し置かる「その殿に在るすべての者呼ばりて榮光なるかなと云ふ」(詩篇廿九篇九節)と。キリスト・イエスの「足」を形成する忠信なる遺殘者はエホバの「僕」の一部として神の證者となる。イエスが此の世に住んでゐる此の世に屬してゐられなかつた如く、遺殘者も亦此の世に住んでゐる然かも此の

世には屬さないのである、(ヨハネ傳十七章十四節)。此の遺残者即ち柱は惡魔の世と神の國の間なる境界線の各處に立つてエホバの聖名に對する證言をなす。忠信者は境界線に立つて神の國に最も接近してゐるのである。遺残者は「祭壇」として神エホバの聖名に讚美の祭物を獻げ、「柱」として神の聖名に對して證者となるのである。

神の預言者は更に云ふ、「これ埃及の地にて萬軍のエホバの徴となり、證となるなり。彼等は暴虐者の故によりてエホバに叫び求むべければ、エホバは救ふ者、護る者を遣はしてこれを助け給はん」(イザヤ書十九章廿節)。此の世の人々は今、支配階級者特にその見えざる主權者なるサタン即ち惡魔の手によつて甚大なる暴壓を加へられて苦惱してゐる。暴壓下にある一般民衆の號叫は神エホバの御許に達した、而して神は其の御約束に従つて頓て神の大預言者にして大祭司、王なる救ひ主キリスト・イエスを遣はして暴壓に苦惱する者を解放して彼等を救ひ出さるゝのである。此の直前に當つて此の世(埃及)の中にある遺残者はエホバの聖名に對して證言をなさなければならぬ。イエスの證言は之等の者の手に委ねられてある。彼等は神の證者として選ばれ、證言を爲すべく命ぜられてゐる。而して彼等は神の恵みによつて神命を守り、此の證言をなすのである。

神は彼等に示して、其の聖名に對する證言をなし、敵なるサタンと其の組織制度に對して

爲されんとする神の御目的、而して一般民衆を解放して彼等を助け、祝福せんとする御目的に就ての證言をなすべきやう命じられてゐる。此の故に地上にありて神の聖旨を爲すべく己自身を神に獻げ、忠信と眞實とを保持して最後に神の承認を受けんと願ふ者は必ず神命を守りて、今日此の時神の證者たるの任務に精勵しなければならぬのである。此の理由に基いて、今地上には忠信者ありて印刷物によりて眞理の福音を日々人々の手に傳達し、一般民衆をして神エホバと其の御目的に就て學び知らしめんと努めてゐるのである。此の仕事は或る宗教に此の世を教化する爲でもなく、又敢て論議や争鬭を起すを目的とする爲にも非ずして唯全地諸國の主權者と其の民衆に神の通牒を交附せんが爲であつて、即ち神エホバの命じ給ふ所によつて行動してゐるのである。イエス誕生の夜、天使によつて歌はれた處のかの萬民に關する大なる歡喜到來の預言の成就する豫定の時は遂に到來したのである、(ルカ傳二章九、十節)。

何時までか

エホバの預言者は示す、「視よ、我とエホバが我に賜ひたる子等とはイスラエルのうちの豫兆なり、奇しき標なり。こはシオンに在す萬軍のエホバの與へ給ふ所なり」(イザヤ書八章十八節)。「萬軍のエホバ」の名稱は常に戦ひを準備し、戦ふべく出でられるエホバに適用される。シオンが築き上げられる迄は誰もシオンの中に居ない。故に此の預言は示して、イザヤ

と其の子等は標即ち徴證として立ち、後日エホバがシオンの祭壇を築きて其の敵に對して戰鬪を準備さるゝ時に此の世に在りて神の忠信なる證者として立つ級の者を豫表してゐた事を教へてゐる。故に此の預言は主イエスが其の殿に臨まれたる一九一八年(大正七年)以後の時を指示してゐるのである。イザヤは異象を示されて、主が殿の中にある寶座に坐して聖き天使達と共に居給ふ事を見た。此の時は即ち主イエスが聖き天使と共に其の殿に臨みて審判を開始さるゝ時を指定してゐる。(マラキ書三章一―三節。マタイ傳廿五章卅一節)。イザヤは此の異象に就て斯く記す、「互ひに呼び云ひけるは、聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、萬軍のエホバ、其の榮光は全地に滿つ。此の時我云へり、禍ひなるかな、我は滅びなん。我は汚れたる唇の民の中に住みて、穢れたる唇の者なるに我が眼は萬軍のエホバにまします王を見まつればなり」(イザヤ書六三―五節)。

靈的イスラエルの一模型としてのイザヤは自ら「汚れたる唇を有する人」と告げたが、之即ち證言を爲すべき神の民の上に怠慢の或る期間があつた事を示してゐるのである。預言者エリヤの歩みし道によつて預言されたる教會の仕事は一九一八年(大正七年)に終結し、翌一九一九年以後エリヤ期間の仕事が開始された。此の兩期の間、地上にありし神の民は證言をなす仕事に活動をなさなかつた。之即ち世界大戰の影響より來れる熱火の艱難の爲であ

つた。一九一九年以後、教會は證言をなすの仕事に熱活動を開始したが、之ぞ預言者イザヤの語りし如く「汚れたる唇の状態」より回復した事を示してゐるのであつて、其の時に如何なるべきかに就てイザヤは續いて云ふ、「此處にかのセラピムのひとり鉗を以て壇の上より取りたる熱炭を手に携へて我に飛び來り、我が口に觸れて云ひけるは、視よ、此の火汝の唇に觸れたれば既に汝の惡は除かれ、汝の罪は潔められたりと」(イザヤ書六六、七節)。

此の中のセラピムとは神の使者なるキリストであつて、又壇の上より火を携へ來りて預言者の唇の上に觸れたる事は神が其の民の唇に觸れて彼等を潔め、彼等をして其の聖き御名に對する證言をなさしめらるる事を預言してゐるのである。火は潔める事を表象するのであつて、イザヤは火によつて罪と惡が取り除かれたと示してゐる。一九一九年の後期に於て神の民は己が無活動の状態にある事と、神が彼等をして尙ほ何事かを爲さしめらるべきを自覺したが、之は同じく此の預言中に記されてゐるのであつて、イザヤは之に就て斯く記す、「我またエホバの聲を聞く、曰く、我誰を遣はさん。誰か我等の爲に行くべきかと。其の時我云ひけるは、我此處にあり、我を遣はし給へ」(イザヤ書六八、八節)と。

斯く預言者は示して、神の民が喜び進んで證言をなす機會を掴む事を告げてゐる。一九一九年、米國オハヨー州シスター・ポイントに參集したるクリスチャンの大會議に於て、參列

者の全部は證言の爲の活動を開始すべき時の到來せるを自覺した。而して其の活動は開始されたのである。預言者は示して、此の證言をなす事は此の世を教化するに非ずして、神の御目的に關する通牒を一般の人々の手に交附するを目的としてゐる事と告げてゐる。此の故に神は預言者を通じて斯く示し置き給ふ、「エホバ言ひ給はく、行きて此の民に斯くの如く告げよ。汝等聞きて聞けよ、然ど曉らざるべし。見て見よ、然ど知らざるべし。汝この民の心を鈍くし、其の耳をものうくし、其の眼を覆へ。恐らく彼等其の眼にて見、其の耳にて聞き、其の心にてさとり、翻りて醫さるゝ事あらん」(イザヤ書六章九、十節)。

其の時に預言者イザヤは問ふた、「何時まで」此の證言はなさるべきかと。斯く彼は示して、主イエスが其の殿に臨まれて、エホバの受膏者が證言の仕事を始め後、「何時まで」此の證言の仕事は繼續されるかと云ふ事を預言してゐる。其の時主は自ら之に對する答を與へ、それを記述せしめて置かれた、「邑は荒れすたれて住む者なく、家に人なく、邦悉く荒地となり、人々エホバに遠方まで移され、廢りたるところ國の中に多くならん時まで如此あるべし」(イザヤ書六章十一、十二節)。

神は斯く預言者を通じて示し、此の證言の仕事は「邑(惡魔の組織制度)は荒れすたれて、人々が惡しき組織制度より遠方に移し去られる迄續くと教へてゐられる。證言の仕事は其の

時より開始されたが、所謂「キリスト教會制度」の中に大變動起り、其の中の多數は教會制度が神エホバを代表せずして實はサタンの組織制度に過ぎない事を認め知つたのである。

シオンに築き上げられて神の殿に入れられたる受膏者達は、彼等が神の仕事に熱心でなかつた故に神が彼等を「怒つて」られる事を知つた。後彼等が熱心に神命を守つた時に神エホバは彼等の上に慰めを與へられた、而して之は預言者イザヤの言によつても明かに立證されてゐる、「其の日、汝云はん、エホバよ、我汝に感謝すべし、汝曩に我を怒り給ひしかど其の怒は止みて我を慰め給へり。視よ、神は我が救なり。我依り頼みて恐るゝ所なし。主エホバは我が力、我が歌なり。エホバは亦我が救となり給へりと」(イザヤ書十二、二節)。

水は神の眞理を表象す。神の受膏者なる忠信者は神命に服し、眞理の泉より飲みて歡喜す。神はその御言の瞭かなる解明を彼等に與へて斯く示し給ふ、「此の故に汝等歡喜をもて救の井より水を汲むべし」(イザヤ書十二、三節)。神命を守つて神の偉大なる御目的を他の人々に傳達する仕事に喜んで従事しつゝある者は神より眞理の明快なる解示を與へられるのである。井より水を汲むとは即ち彼等が神の預言を研究し、其の成就の事實に注意する事によつて眞理を探り求める事を意味してゐる。

此の預言中には「其の日」なる語が特に示されてゐる。「其の日」は今日我等の眼前に到來し

た。之に就て神は預言者をして記さしめ、眞に神を愛し、喜んで神命に服する者に適用さるべき御命令を示し置かれた。此の御言に曰く、「其の日、汝等云はん、エホバに感謝せよ。其の御名を呼べ、其の御行爲を諸々の民の中に傳へよ。其の御名の崇むべきことを語り告げよ。エホバを讃め歌へ。其の御行爲は高く優れたればなり。之を全地に傳へよ。シオンに住む者よ、聲を擧げて呼ばはれ。イスラエルの聖者は汝の中にて大なればなり」(イザヤ書十二

章四一六節)。

上記預言と其の成就とは共に示して神エホバの爲の大證者がイエス・キリストなる事を明かに立證してゐる。主イエスは其の殿に臨まれし時に「僕」等と會計し、忠信なる者として承認を與へたる者に向つて、其の時より後サタンの組織制度が崩壊する時まで地上に於ける證言の仕事の特權と責務を委ねられた。而して此の神命を受けたる者はエホバが唯一の眞の全能なる神に在す事を宣明するのであつて、主の受膏者として承認を受けたる者は地上に於て此の證言を爲す者を形成する事となつた。此の證言の今日此の時地上に行はれる事が神の聖意なる以上、此の仕事に對する全部の反對は絶對無力である。地上諸國の主權者とその民衆に向つてエホバが神に在す事と、其の御國建設の時至れるを宣明する此の證言の仕事に參與する者の幸福は實に大なるかな。

クリスチヤンの此の一團が何故に斯く熱心に神エホバと其の御目的とに就ての證言をなし得るかと云ふ事を諒解するは、多數の人々にとつて困難なる事である。人々は之等の證言者が人々を教化して人々を何かの組織制度中に引き込まんとしてゐるのではないと云ふ事を漸く諒解し始めた。同時に之等の者は金錢を目的にして此の仕事をしてゐるのでない事も知り始めた。然らば何故に此の仕事はなされなければならぬか。而して此の仕事の齎らす其の結果は如何。

第八章 民衆の兩分

エホバは其の預言者を通じて示し、御自身が全能の神であると云ふ事を何故に此の世の人々の前に證言せしめられるかと云ふ點に就て其の理由を告げて置かれた。惡魔と彼の代理者たちは人々を邪導して、エホバが御自身の神なる事の證言をなさしめられるのはこれ利己的であつて、神の弱點であると誤信せしめやうとした。而して彼等の言ふ所は、神は自身を讃頌崇拜せしめんとするゝが故に利己的であり、又全被造物から見捨てられんとするを恐れてゐるゝが故に之が弱點であると主張す。斯かる結論は絶対に誤つてゐるのであつて、全く惡しき事である。神は決して利己的、我利的ではない、何故なれば「神は愛なり」であるからである。即ち神は絶対無私の完全なる表現である。エホバは如何なる事も我利的に行動し給は

す、常に被造物の利益となる爲に行動し給ふのである。エホバが絶対無私に在して完全なる愛の所有者に在す事は、人間に生命を得しむる爲に其の最も愛する獨子を與へて、之を人類の爲の贖價たらしめられたる事實に見るも瞭かである。此の偉大なる愛の御行爲に就て使徒パウロは告げて、エホバが人類の爲に與へ給ひし愛の賜物は量り知る事能はざるものであると教へてゐる。「其の言ひ盡されぬ神の賜物に因りて我神に感謝するなり」(コリント後書九章十五節)。之即ち證言がエホバの我利的意志によつて行はれると云ふ邪論を全く排棄するものである。如何なる權威もエホバの御許しなくば行使する事は出來ない、何故なればエホバは天地の創造主に在して、權能の全部は其の御手の中に在るからである。此の故にエホバには何物かを取り去られる事を恐れたり、自ら排棄するゝを恐れらるゝが如き事は絶無である。事實の全部は立證して、エホバは其の聖名擁護の爲と、被造物の利益となる爲に萬事を行動するゝ事を明示してゐる。

過去數千年間に亘り、サタンは自らを以て神エホバと相等しき大能者なる事を全被造物の前に立證せんと企てた。此の理由に基いてサタンは、人類に示されある神の御目的を偽造し、贗造し、彼一流の欺瞞方法によつて人々の多數を神エホバより離反せしむるに成功した。エホバはサタンが自らを高くするに干渉されなかつた。然し若し何れかの時にエホバが

之を差し止められなければ、人類の大多数は永久に滅ぶる事となる。サタンは人間に生命を與ふる事は絶対に出来ない。被造物の全部に生命を與ふる者はその創造者なる神エホバのみである。然し神は彼等被造物に生命の無理押し付けはされない。神は人類に對する恵みの賜物として生命を備へ置き、然る後に人々を導いて神の御目的に關する知識を彼等に與へ、而して彼等をして其の賜物を受くる機会を自ら取るか取らぬかを決定せしめ給ふのである。生命は我等の主イエス・キリストを通じて賜はる神よりの賜物である、(ロマ書六章廿三節)。

人は其の賜物の何なるやと、その授與者の誰なるかを知る事なくして「賜物」を受くる事は絶対に不可能である。此の故に人は永久の生命を受けんと欲するならば、先づ神を知り、神が其の恵みの賜物の授與者に在す事を知らなければならぬ。サタンの悪しき道を差し止めて、人間が何等の妨害なしに生命の賜物を受くべき一機会を持ち得る神の御豫定の時が到來した。神はサタンと彼の悪しき業を破却せんとすの御目的を發表し、其の結果として喜んで服従する者には祝福されたる状態下に於て永久の生命を與へんと示された。其の悪者一掃の時の來る以前に神は先づ全地上に一の啓發運動を行かして、神が人類の爲に善き事を行はんとし給ふ事を人々に宣明されるのである。神は此の仕事は何等の通牒も豫告もなしにはなされない。神は先づ人々に其の御目的を告げ知らして置いて後に御自身の最高權威者なる事を人

々の前に立證するものである。故に此の證言の仕事の目的の要領を摘記すると斯うなる、即ち盲目状態にある人々の眼を開いて光を與へ、「俘囚人」をして彼等の爲に解放の時至れるを悟らしめ、全人類をして幸福状態に於ける永久の生命を得るに必要なる唯一の眞の道を知らしむる事、此の事を爲すには人々に向つて何が神の組織制度を形成し、又何がサタンの組織制度を形成するかと云ふ事と、何故に此の兩者は絶対に相反目するかと云ふ事を知らさなければならぬ。

神は數千年の大昔に於て其の預言者を通じて示し、此の一大啓發運動が全地に行はれる時の必ず到來すべき事と、此の仕事はエホバの心喜び給ふ「僕」によつて行はれる事とを明かに告げて置かれた。「我が扶くる我が僕、我が心喜ぶ我が撰人を視よ、我わが靈を彼に與へたり。彼は異邦人に道を示すべし」(イザヤ書四十二章一七節)。

此の預言に見るも之の成就さるる其の時に、地上には其の眼が開かれなければならぬ盲目者のある事と、牢獄に監禁されてる俘囚人があつて彼等に解放の機会が與られなければならぬ事が瞭かである。預言は必ず成就しなければならぬ、何故なれば之は神の靈導を受けたる預言者によつて記録されてあるからである。研究者は此の預言成就の事實を探り求め、而して今が其の成就の途上にあるを發見するならば、彼等は俘囚人とは誰であつて、盲目者と

は誰であるかと云ふ事を悟り知る事が出来る筈である。

俘囚人

或る人は「牢獄」とは墓であり、「俘囚人」とは死者であると説明した。斯かる解釋は絶対に誤つてゐる。聖句に見ると俘囚人は歎きつゝ神に救ひを叫び求め、彼等の叫びの神に聞かれん事を願つてゐる。死者は苦みもしなければ又叫びもしない。死者は絶対に無意識であつて何事も知らず、豫定の時至りて神が彼等を死より目覚めしめられる迄は墓即ち死の状態に於て待つてゐる。(傳道書九章五、十節。詩篇百五十五篇十七節)。牢獄とは人々が其の自由を束縛されて監禁を受けてゐる場所である。俘囚人とは鐵窓裡に監禁され、又は恐怖の爲に其の束縛を受けて己が自由を行使し得ざる人々を云ふ。「人を恐るれば畏におちいる」(箴言廿九章廿五節)。恐怖觀念の擲となつてゐる者は、實際に其の身體の自由を束縛されてゐる者と同様である。

以下聖書の示す實證は、眞言者イザヤによつて示された此の「牢獄」とは宗教的組織制度即ち特に所謂「キリスト教會制度」と稱する處のそれを意味してゐる事を明かに立證してゐるのである。カトリックとプロテスタントの諸派の教會制度は何れもキリスト教の名を稱し、「家」によつて表徴されてゐるが、彼等の執れる歩みの事實は示して彼等は偽物制度である事

を明白に立證してゐる。之等の「家」即ち諸制度の集會は皆單なる儀禮と形式に過ぎない。儀禮者が偶像の前に低頭し、又は單なる形式的禮拜をなすの行爲は神の言の示す所と絶対に逆行するものである。彼等は單に口唇を以て神に近づけども、其の心は神より遙かに遠ざかつてゐるのである。彼等は人間の名を崇め、神に尊榮を歸することなくして單なる形式に終始す、之即ち神エホバの聖名の上に誹謗を來らすものである。神は靈と眞理とを以て神を拜する者のみを喜び給ふ。(ヨハネ傳四章廿三、廿四節)。形式的行爲は神エホバの御前に至き汚れるである。

イスラエルの民は偶像禮拜と形式主義に墮して了つた。而して彼等の歩みし道は靈的イスラエルが神より離れて偶像崇拜と形式主義に墮する事を預言してゐるものである。神は偶像を作るを嚴禁して斯く其の民に示し給ふた「汝等己の爲に偶像を作り、木像を彫刻むべからず。柱の像を建つべからず、また汝等の地に石像を立て、之を拜むべからず。其は我は汝等の神エホバなればなり」(レビ記廿六章一節)。

所謂「キリスト教會制度」の中に尊重されてゐる形式主義は聖書の示す處に於て偶像崇拜と同一である。(イザヤ書四十四章九節。廿九章十三節。テモテ後書三章一―五節)。此の理由に基いて、斯かる形式主義者は惡魔の組織制度なるバビロンに屬するのである、何故なれば其の目

的はエホバの聖名を崇むるに非ずして、却て神の聖名を汚漬する一組織制度を立て、之によつて人々を神エホバより離反せしむるからである。此の故に一般のキリスト教會制度は皆悉く牢獄である。

其の典獄はサタン自身である、何故なれば彼は欺瞞を用ひてクリスチャンの名を稱する之等の制度を己が藥籠中のものとなして了つたからである。之等諸宗派のキリスト教會制度の中に「羊の群」を護ると稱する牧者即ち牧師、別名「斥候」がある。之等の教職者は自ら羊の群の牧者であると稱してゐる。そして彼等教職者の各自は己が衣食住を「羊の群」の膏血に仰いでゐる。彼等教職者の歩む道その物は彼等が神とキリスト及び其の御國を愛せざる事を明白に立證してゐる、何故なれば彼等は悪魔の製作なる國際聯盟を援助支持してゐるからであるのみならず、彼等教職者は此の世の政治に參與し、神の御目的と其の御國に就て人々に語り告ぐるよりも遙か以上に此の世の出來事に興味を有してゐる。彼等は神の言の證言を聞くを拒絶す、故に彼等は神エホバが今日此の時に爲し給ひつゝある事に對して盲目状態に在るのである。彼等教職者は皆に神の國に關する證言を聞くを拒絶するのみならず、己が支配下に在る人々の其れを聽く事を極力妨害するのである。彼等教職者はイエスの當時のパリサイ人の「複寫」である。イエスは彼等パリサイ人に向つて告げ給ふ、「汝等禍ひなるかな、教法

師よ、知識の鑰を奪ひて自ら入らず、且つ入らんとする者をも阻めり」(ルカ傳十一章五十二節。マタイ傳廿三章十三節)。

猶太人の間には律法の教師やパリサイ人、政治家や商業家の有力者が共に立つてゐた。その如く今日にても政治権者や商業権者は所謂神學博士や牧師を援助支持してゐる。彼等教職者と「群の長たち」は皆に眞理に盲目にして又之を聽くを拒絶するのみならず、彼等の有する権能の全部を盡してその教會の會員が眞理の證言を聽く事を阻止すべく盛んに妨害するのである。彼等はイエスの示されし如く「盲者の手引き」であつて彼等も、又彼等に導かるゝ者も皆共に溝に落つるのである、(マタイ傳十五章十四節)。神は「羊の群」を見守るところの「斥候」であるとする自稱する之等牧師の行動を預言して斯く示して置かれる、「斥候は皆替者にして知る所なし。皆啞なる犬にして吠ゆる事能はず。皆夢見る者、臥し居る者、眠る事を好む者なり。此の犬は貪る事甚しくして飽く事を知らず。彼等は悟る事を得ざる牧者にして皆己が道に向ひ行き、何れに居る者も各々己の利を思ふ」(イザヤ書五十六章十、十一節)。

各處にある牢獄を守る「獄卒」共は即ち之等の教職者である。教會と呼ぶ各宗各派の制度中には神を愛して、之を知り、其の命令に服従せん事を願つてゐる人々もあるであらう。然し之等教職者や「群の長たち」の爲に集會に於て聖書を論ずるを許されず、之を知る事能はざる

ために失望落膽す。之等諸教會制度中に熱心に聖書を研究してゐるものは極めて少數である。牧師や神學者は聖書に就て語らない。事實現代的牧師等は聖書が神の言であると云ふ事を否認してゐる。聖書を説明し、聖書に基いて神の御目的を説述したる書物や印刷物が彼等教職者の目に入る時に彼等教職者は之等の書物冊子を譏誣誹謗し、其の教會の會員の斯かるものを讀む事を一切嚴禁するのである。彼等教職者は己等のみが聖書を解明し得る能力の唯一所有者であると主張す。其の結果として斯かる教會制度に屬してゐる人々は皆暗闇に封じ込められてゐて、神の言に關する眞の教に全く盲目である。

教會の會員は彼等の牧師即ち教職者が其の語る處の「説教」の題材を此の世の政治や所謂科學、社會問題のみに集中して、神の言の糧を彼等に與へず、人々の信仰を神と其の救済の御目的に確立する事を決して行ない事を熟知してゐる。而して若し會員の或る者が眞理を聽く爲に他に行かんとするならば牧師等は極力之に反對し、教會を脱するは神の前に罪惡であつて、之れ社會を破壊する者であり、永劫の苛責苦惱を受くべしと主張す。斯くして善良なる多くの人々は恐怖の爲に其の自由を束縛され、教會と呼ぶ制度即ち「牢獄」の中に監禁されてゐるのである。彼等は預言者の示す如く神を迷信的に恐怖し、「人の誠命によりて教へられ」てゐるに過ぎないのである。(イザヤ書廿九章十三節)。

神は其の預言者を通じて示し、教職者即ち牧師等が「群」を養はずして己等自身を養ふ時の必ず到来する事と、之等惡しき牧師等の神より排棄さるべきを預言して置かれた。即ち斯く記されてゐる「人の子よ、汝イスラエルの牧者の事を預言せよ。預言して彼等牧者に言ふべし。主エホバ斯く言ふ、己が牧ふところのイスラエルの牧者は禍ひなるかな、牧者は群を牧ふべき者ならずや。汝等は脂を食ひ、毛を握ひ、肥えたる羊を屠り、その群をば牧はざるなり。汝等は其の弱き羊を強くせず、その病める羊を醫やさず、その傷ける羊をつゝます、散らされたる羊を曳き歸らず、失せたる羊を尋ねず、手荒に厳しく之を治む。此故に牧者よ、汝等エホバの言を聞け。主エホバ斯く言ふ、視よ、我牧者等を罰し、我が羊を彼等の手に討問め、彼等をして我が群を牧ふことを止めしめて、再び己が牧ふ事なからしめ、又我が羊を彼等の口より救ひとりて彼等の食とならざらしむべし。主エホバ斯く言ひ給ふ、我自ら我が群を養はして之を護らん」(エゼキヤ書卅四章二一四、九一十一節。ヘテロ後書二章一三節)。

各派教會制度に屬してゐる善意ある人々は教會制度内では其の牧師や「群の長たち」によつて何等の眞理が語られてゐない事を悟り知つてゐる。其の集會は單なる衣裝共進會と、神の言に絶對無關係なる人間智所産の言説のみである。此の故に各派教會制度の中には己が現狀に懺らずして甚しく苦惱しつゝある處の心の貧しき人々の多數がある。神は其の預言者を通

じて此の状態を豫め告げ置き、之等の善意ある人々の口をして斯く叫ばしめ置き給ふ、「我等の救の神よ、聖名の榮光の爲に我等を援け、聖名の爲に我等を救ひ、我等の罪を除き給へ」(詩篇七十九篇九節)。彼等は神エホバの聖名が其の教會の中で少しも崇められてゐない事と、其の教會外の人々即ち彼等の謂ふ「不信者」等が公然と牧師や神學者の教職者を嫌忌排斥し、之等教職者が神を代表すると自稱して實は然らざる所の偽善者であることを批難攻撃してゐる事實を熟知してゐる。

其の時預言者は之等善意ある人々を代表して斯く言ふ「如何なれば異邦人(教會外の不信者)は云ふ、彼等の神は何處にありや」と。彼等は己が現状を悲歎して叫ぶ。預言者は更に云ふ、「願はくは汝の御前に俘囚人の嘆息の達かん事を。汝の大なる能力により死に定められし者を護りて存へしめ給へ。主よ、我等の隣人の汝を誇りたる誹謗を七倍増して其の懐に報ひ復し給へ。さらば我等汝の民、汝の牧場の羊は永遠に汝に感謝し、その頌辭を世々あらはさん」(詩篇七十九篇十一、十三節)。

此の預言は示して、之等の「俘囚人」が生きてゐる事と、彼等は「死に定められたる者なる事」を告げてゐるが、之即ち彼等が何人であるかを明かに識別せしむるものである。神の聖旨を爲すべく自らを獻けて、イエスの名によりて受け容れられ、イエスと共に祭物の契約に入

られたる者は皆人間としては死ななければならぬのであつて。彼等が生くるとすれば、靈者として死より復活せしめられるのみである。故に彼等は此の契約の中にある事によつて「死に定められたる者」である。自ら進んで此の世の宗教制度から脱出し、神命に服従する者(コリント後書十六章十六、十八節)は又死ななければならぬのであつて、彼等は最早俘囚人として教會制度なる牢獄中に監禁されてゐないのである。彼等は神の言に養はれて強くなり、牢獄より脱してシオンの中に入れられたのである。之等の者の多數は會つて一度はバビロン即ち惡魔の組織制度の中の「俘囚人」であつたのが、その中より脱出する事によつて歡喜する者となつたのである。(詩篇百廿六篇一、三節)。然し獻身者にして尙ほ教會制度の中に居止まり、恐怖の爲に己が自由を束縛されてゐる者は未だ俘囚人であつて、彼等は己が救ひを神に叫び求む。神の大預言者なるイエス・キリストは此の級に屬する者は即ち「大なる群」である事を示し、彼等は艱難の時を経て己が衣を羔羊の血で洗ひ清めて神の承認を受ける者であり、「神彼等の涙を其の目より拭ひ給ふ」とある人々に該當する旨を告げて置かれた。彼等は天の王室に屬するには非ずして、「寶座の前」に奉仕する級の者である。(黙示録七章十一、十七節。セカリヤ書十四章二節)。

事實は示して、今日カトリックとプロテスタント諸派教會制度の中には熱心に眞理を求め

つゝある人々があるに拘らず「獄卒」の役を勤むる牧師や神學者等は總らゆる手段を盡して之等心貧しき人々が眞理に接近するを妨害邪魔してゐるのである。此の大苦惱裡に在つて俘囚人は斯く祈る。「願はくは我が右の手に御目を注ぎて見給へ。一人だに我を知る者なし。我に避所なく、又我が靈魂を顧る人なし。エホバよ、我汝を呼ばふ。我言へらく、汝は我が避所、有生の地にて我が得べき分なりと。願はくは我が避所に聖念を止め給へ。我は甚く卑くせられたればなり。我を迫むる者より援け出し給へ。彼等は我に勝りて強ければなり。願はくは我が靈魂を牢獄より出し、我に聖名を感謝せしめ給へ。汝豊かに我を待ひ給ふべければ義しき者我を環らん」(詩篇百四十二篇四—七節)。

神は其の預言者を通じて、之等俘囚人の叫びを聞き容れて彼等を援け救ひ出す時の必ず到來する事と、其の救済の時はシオンが築かれたる後なるべきを預言して置かれた。之即ち「殿」に屬するクリスチヤンによつて全地に證言を行かしむる目的の一部となつてゐる。エホバはシオンを築き、榮光をもて顯はれ給へり。エホバは乏しき者の祈を顧み、彼等の祈をかりしめ給はざりき。來らんとする後の世の爲に此の事を録さん。新しく造られたる民はヤハを讀め稱ふべし。エホバは其の聖所の高き所より視下し、天より地を視給へり。こは俘囚人の歎きを聞き、死に定まれる者を解き放ち……」(詩篇百二篇十六—廿節)。

神は其の適宜の時にラチオを活用せしめ、人々が其の家に居て、「獄卒」共即ち牧師等の妨害を受くる事なくして人々に眞理の證言を聴かしむるの方法を執られた。此の事を知つた歐米諸國の教職者等は資本家等と合同してラチオを支配し、眞理が空中を通じて放送される事を妨害せんと努む。神は又聖書の眞理を説明したる書物、冊子、印刷物の多數を準備して置き忠信なる證者をして各戸を歴訪せしめ、人々の手に之等のものを配附して讀ましむるの方法を執られた。斯くして俘囚人は其の求むる「糧」を得るのである。預言者は示して、其の時に神は牢獄の扉を開きて、心直く眞理を求めつゝあるそれ等俘囚人に眞理を聴きてエホバを知るの機會を與へ給ふ事を告げてゐる。「エホバを讃め頌へよ……こは天地と海と其の中なるあらゆる物を創造り、永遠に眞實を守り、虐げらるゝ者の爲に審判を行ひ、餓ゑたる者に食物を與へ給ふ神なり。エホバは俘囚れたる人を解き放ち給ふ。エホバは盲者の目を開き、エホバは屈むる者を直く立たせ、エホバは義しき者を愛しみ給ふ」(詩篇百四十六篇一—八節)。

此の故に事實は示して、各派教會制度の中にある献身者は神と其の御言を知らん事を熱望し、餓ゑと苦難の中に在つて援けを叫び求めつゝあるに拘らず、教職者即ち獄卒どもは彼等に何の助けをも與へない事を立證してゐる。「主エホバ斯く言ひ給ふ、視よ、我牧者等を罰し、我が羊を彼等の手に討問め、彼等をして我が群を牧ふ事を止めしめて、再び己を牧ふ事

なからしめ、又我が羊を彼等の口より救ひとりて彼等の食とならざらしむべし」(エゼキエ

書卅四章十節)。

然る後に神は其の預言者を通じて示し、神が如何なる方法で之等俘囚人を悪牧者等の手より取り離ち、彼等に眞理の知識を與へ給ふかを告げて置かれる。神は殿級に屬する忠信者即ち御自身の證者として任命せし「僕」級の成員に向つて斯く示し置き給ふ、「我は汝等を正義の爲に召した。我は汝等の手を執りて汝等を扶け、汝等に權力を與へん。我は汝等を遣はして盲者の眼を開き、俘囚人となつてゐる者等を其の監禁状態より解放し、又牢獄の外の暗闇の中に坐す者等に光を與へしめん。汝等は行きて俘囚人に斯く告げよ、牢獄より脱出せよ。又暗闇に坐する者に向つて言へ、出で来れ。彼等は其の道に於て食を與へられ、彼等は高き處に其の牧場を得るであらう」(イザヤ書四十二章五―七節、四十九章九節)。

之ぞ即ち殿級に屬する忠信者が何故に神の眞理の證言を全地に傳達するかと云ふ事を示す一證であつて、此の眞理宣明の仕事は今や着々として進行中にて此の預言は確實に成就の途上にあるのである。此の故に忠信なる男女の一團は聖書の眞理を解明したる書物冊子を携へて各戸を歴訪し、人々の手に之等の書物冊子を實費で配附しつゝあるのである。彼等は此の方法によつて福音を宣明す、何故なれば之が神の命じ給ふ處の方法であるからである。ラヂ

オを通じ、又書物冊子や其の他の方法で此の眞理の福音を宣明する結果として人々の間に分類を到來せしむ。即ち神に奉仕せんとする善意ある正直なる人々は偽善者等の間より脱出し來る。此の證言を行かしむる目的は人々を何かの制度に引き込まんとする爲に非ずして、唯彼等の目を開いて、神エホバの側に彼等を立たしめんが爲である。此の證言を俘囚人に傳達すべきやう神が命じ給ふた以上、神の證者たる者は此の使命を奉じて其の任務に服しなればならぬ。然らざる限り彼等は神に喜ばれる事はないのである。

民

衆

此の世には善意を有する多數の人々があつて、彼等は直接サタンの組織制度には屬せずとは雖も此の壓制的なる組織制度の支配下にある。彼等は教會制度なる「牢獄」には囚はれずして其の外部に居る。彼等は教會制度の偽善を見て之等より離れ遠ざかる。然し彼等も又サタンの爲に眞理には盲目とされてゐる、(イザヤ書四十二章七節、ヨリント後書四章三、四節)。之等の者の眼を開きて、眞理を學びて之を諒解せしめ、彼等をして神エホバの側に立ち、サタンと其の組織制度に敵對するの機會を有せしむるは之神の聖旨である。エホバはその預言者を通じて自ら此の方法を準備せんと告げて置かれた。又同じく預言者を通じて、神は其の愛子キリスト・イエスとの間に一の契約を設け、他の者等を此の契約の中に入れて、其の契約の

條件に忠實なる者を承認して之をその「僕」級の成員とされる旨を示し置かれた、(イザヤ書五十五章一―三節、四十二節一―六節)。

此の證言の仕事を爲すために神が準備されたと云ふ事は即ち之が民衆の爲の利益となる事が明瞭である。エホバはその預言者を通じて斯く示し給ふ、「視よ、われ彼を立て、諸々の民の證とし、又諸々の民の君となし、命令する者となせり」(イザヤ書五十五章四節)。預言者の此の言は先づイエス・キリストに適用される、何故なればイエスは眞理に對する證言をなさん爲に此の地上に來たと告げられたからである。而して此の預言は殿級に在り、シオンに在りてキリストの中に在る者全部の者に適用されるのである。此の故に基督の成員中此の最後の際に於て地上に立つ者はエホバの證者として任命されたる事が瞭かであつて、彼等の上に置かれたる責務は極めて明白である。之等の者は大證者なるキリスト・イエスの下にあつて「諸々の民の證となし、又諸々の民の君となし、命令する者」とされるのである。

故に遺殘者は大證者キリストの「足」を形成し、シオンの中に在り、殿の中に在りて未だ尙ほ此の地上に立ち、神の榮ある王國の境界線に立つてゐるのである。之等の者は神の斥候と呼ばれ、エルサレム、即ち地上にある神の民の組織制度を代表する處のエルサレムの石垣の上に置かれてゐるのであつて、預言者は彼等に就て斯く示す、「エルサレムよ、我汝の石垣の

上に斥候を置きて終日、終夜絶えず黙す事なからしむ。汝等エホバに記念し給はん事を求むる者よ、自ら息むなかれ」(イザヤ書六十二章六節)。

遺殘者は自らが御國の光榮に入るまで絶えず證言をしなければならぬ。其の入口は「門」によつて表線さる。其の證者たる遺殘者に屬する者に向つてエホバは斯く示し給ふ、「門より進み行け、進み行け。民の路を備へ、土を盛り、土を盛りて大路を設けよ。石を取り除け、諸々の民に旗を擧げて示せ」(イザヤ書六十二章十節)。

忠信なる證者等は其の顔を正しく天國に向けて人々に義しき道を指し示す。之等の忠信なる證者は「民の路を備ふる爲に人々の盲目なると壓抑されてゐる事と、神が彼等を今の重荷の下より解放し給ふ事を人々に告げて永久の生命の道を彼等に示すのである。之は別に彼等教職者が語る如く此の世を教化する爲に非ずして、唯神命に服して人々に眞理の道を傳達する一種の啓發運動である。

之等の忠信なる證者は「大路を設け」る、即ち人類が永久の生命を受くるべく神に復歸し來る爲にエホバが一の廣くして明かなる大路を設け置き給ふ事實を人々に指示するのである。又其の仕事の一部として「石を取り除く」事がある。敵なるサタンは其の代理者特に牧師や神學者の教職者等を用ひて多くの「踏きの石」を人々の歩む道に置いた。之等の「踏きの石」の中に

は、神が此の世の惡に對して責任を有し給ふとか、神は己が欲するまゝに可愛い小兒を其の親の手許より死によつて奪ひ取つて了はれるとか、神は地上人類に病氣や苦惱の總てを與へ給ふとか、教會の會員以外の者は死すると共に直ちに地獄にやられて其處で硫黃の熱ゆる絶えざる劫火の中に永久の苛責苦惱を受ける等の囂言偽説がある。

人々の歩む道に横はる更に大なる曠きの石は同じく教職者によつて語られてゐるのであつて、それは即ち、「今の惡しき世」は地上に於ける神の國であつて、神は現在諸國の惡しき支配者の支配下に行はれる多くの暴壓行爲に對して自ら責任を有し給ふとなす點である。之に就て人々は眞理を知らされなければならぬ。即ちサタンは「此の世の神」であつて、今日の所謂「キリスト國」は神の聖名を汚漬するものであり、エホバの愛子イエス・キリストを偽り代表する處の邪惡制度である事を告げ知らされなければならぬ。而して人々はエホバが唯一の眞の全能者に在して、其の道は義しき愛の道なる事を知らされなければならぬ。

神の證者たちは「旗を擧げて示せ」と命ぜらる。旗とは信號若くは旗印の事であつて、即ち人々をして信頼せしめ、その何れに歸服するかを判別せしむるものである。一般民衆の爲に擧げらるゝ旗印は人類の救済と神の義の政府に關するエホバの旗印である。サタンは人類にとつて眞の敵なる事と、エホバは人類にとつて永久に眞の友に在す事實が人々に告げ知らさ

れなければならぬ。此の事は善意ある人々をして神エホバの側に立ち、其の旗印の下に立つ事を得るの機會を得しむる爲になされるのである。

「旗を擧げて示せ」との神命に服して、エホバに己が全部を獻げたるクリスチヤンの一團は一九二八年（昭和三年）八月五日米國ミシガン州デトロイトに會合し、地上全人類に對する宣言を滿場一致で決議した、其の宣言に曰く、

宣 言

サタンに敵對し、エホバに服従す。

本國際大會に列席せる聖書研究者は宣言してサタンの惡制度に反對し、エホバに忠信なる己が態度を表明すると共に更に進んで特に左記眞理の宣明を爲す。

第一 地上の人類は政府制度の形式下に編成され、肉眼に見えざる支配者の下に統率されて、此の世を形成す。

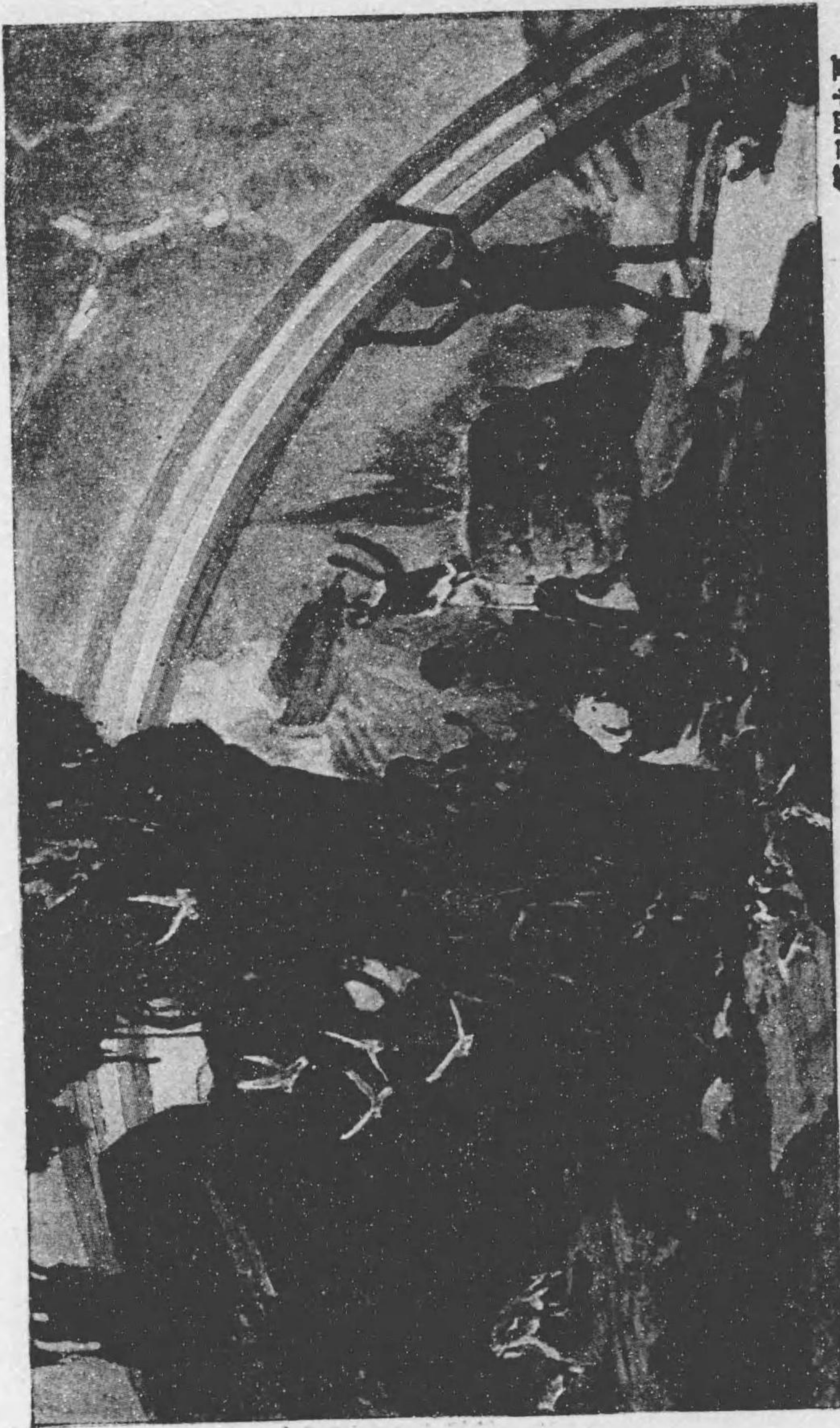
第二 エホバは唯一眞の全能の神に在して正當なる全權威の唯一根原に在す。エホバは永

遠の王、義と智、愛と力の神に在して全被造物に對する眞の女なる祝福者に在す。

第三 エホバは其の子ルシフアを任じて地上人間の監督者たらしめ給ひしに、彼ルシフアは不忠信者となり、エホバに反逆して人間を義しき道より墮落せしめたり。此の叛逆以後彼ルシフアは龍、老蛇、サタン及び悪魔の四名稱をもつて呼ばるゝに至り、地上人類の間に殘虐なる争闘、惡辣なる殺人、極惡の諸犯罪其他諸種の破壞的行爲を滿たしむるに至れり。今日に至るまでエホバはサタンが其の力を人間の上に行使するを差し止めず、之により全人類をして惡行爲の齎らす有害なる結果を自覺せしむるの方法を執り給へり。此の故に過去數十世紀の長きに亘りてサタンは此の世を支配する處の肉眼に見えざる支配者たりし者にして、絶えず神エホバの聖名を汚濁し、地上人類に甚大なる害毒を興へたるなり。

第四 エホバはその御豫定の時至るに及びてサタンを制縛すると共に、地上に正義の政府を設立し、全人類に對し、幸福の狀態に於て永久の生命を獲得するの好機會を與ふべしとの御約束をなし給へり。此の理由に基きてエホバは其の愛子イエスに膏を灌ぎて、全人類に對する贖ひ主たらしめ、全地の肉眼に見えざる支配者となし給へり。

第五 エホバの豫定の時は遂に到來して、全被造物の中にエホバの聖言を潔め、その諸々の



頁九四三第

畫るす念記を「約」の遺水「の」神

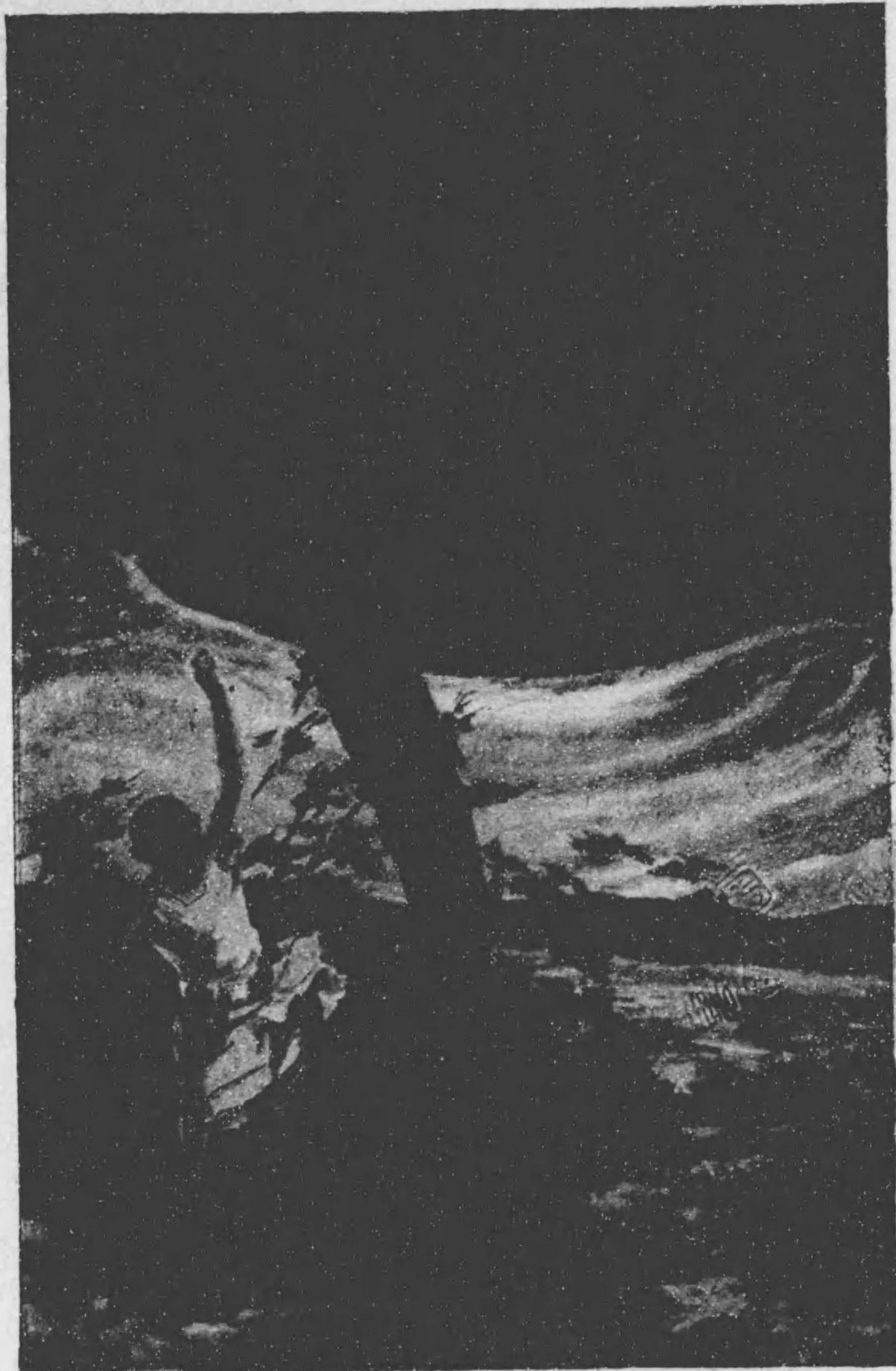
紅の秘書

神に献身せりと稱しつゝある人々の中には、眞理を宣明するに際してサタンの組織制度の事や、殊にサタンの代理者である教職者の事に就て何も言つてはいけなと盛んに主張する

第七 此の故に正義を愛する者の全部がエホバの味方に馳せ参するの豫定の時は到来せり。彼等正義の愛好者はエホバに服従し、純心を以てエホバに奉仕し、エホバが彼等の爲に備へ置かるゝ無限の祝福に與かる事を得んとするなり。

第六 サタンは全地人類の上に有する己が支配の權を快く神エホバに返還する事をせず、此の故に萬軍のエホバは其代理執行者たるキリスト・イエスと共に、サタンと彼の悪しき全軍に挑戦して其軍を進め給ふ、爾後我等の喊聲は「エホバの劍とその受膏者」なるべし。ハルマゲドンの大戦は間もなく開始され、其の結果はサタンの制縛と彼の悪制度の崩壊全滅に終るべし。而してエホバは地上の新しき支配者なるキリストを通じて、全地に正愛を樹立し、全人類を惡より解放して彼等の上に永久の祝福を齎らさるべし。

御約束を成就なし給ふ時に達したり。キリスト・イエスはエホバの代理執行者たる高き寶座を占められ、全地に向ひて、誰が神なるか、地上全人類の支配者は誰なるかを問ひ給ふ時は遂ひに到れり。



エリヤとエリシヤの離別
神の證者の仕事の一轉換するを預示す

者がある。之等の人々の主張は、サタンの組織制度と教職者に就て語る事は人々を贖かすめ、真理の宣明に妨害となると云ふに在る。斯かる主張は無論サタンの方には嘉納されるにても、唯神エホバは其の御言の中に於て明かに排棄し置き給ふ。神の組織制度に就て告げらるる事なくば人々はそれを知る事が不可能である。若し神の證者が之を一般民衆に語り告ぐる事をなさずば誰が此の仕事を行ふべきか。若し神の證者が一般民衆に向つて大敵サタンの正體と、民衆を壓迫する彼の悪しき組織制度に關する事實に就て語り告ぐる事をなさずば民衆は如何にして之を知り得べきか。若し教職者が神の義しき組織制度に屬せずして此の世の政治家や資本家を援助支持してゐるとするならば、彼等は當然サタンの側に在つて、其の歩む道は一般民衆を神エホバと其の義しき政府より離反せしむる爲に働きつゝある事を明白に立證するものである。斯くして教職者は一般民衆の思考と歸順とを神エホバより盗みつゝある者である。

盜む者は盜賊である。一般民衆の思考と歸順を神エホバより盗み取る者は他人の金錢を盗むにも勝つて遙かに大なる罪惡である。資本家は民衆の金錢を盗む。而して彼等教職者は人々の歸順を神エホバより盗み取るが故に彼等は他の何者にも勝つて極惡者である。彼等教職者は一般民衆を欺き教へて、エホバは人間を完全に創造されなかつたと告げ、人間が罪の爲

に墮落したのは嘘説だとか、惡魔は人間の墮落に絶對無關係であつたとか、人間は進化の動物なるが故に自力を以て己を完全なる状態に向上せしめる事が出来るとか、イエスの血は人間の生存權を購ふ爲には流されなかつたとか、神とキリストと聖靈とは同一の者であるとかの冒瀆不遜なる嘘説妄談を露面もなく述べ立てると共に、更に以上に勝る嘘偽を傳へて、此の世の諸國の結合になる國際聯盟を以て「神の國の地上に於ける政治的顯現である」と聲明し、以て神エホバに對して甚大なる侮辱を加へてゐる彼等教職者の惡逆行爲は之實に山賊のそれよりも遙かに大なるものである。

若しクリスチャンたる者が自ら神に献身せりと稱しつゝ、之等教職者が信仰を盗み、民衆の歸順心を神より盗み、民衆を神より離反せしめて惡魔の側に惹き附けつゝある事實を見乍ら尙ほ聲を擧げて民衆に警告するを怠るならば、彼は己自身を此の犯罪の中に参加せしむる譯である。斯かる者は神より來る教示を嫌忌して、それよりも寧ろ教職者や其の仲間の歡心を得んと欲する者である。而して彼等は此の世に於て有する名譽、位置、職業を之によつて失ふ事を恐るゝ者であつて、斯かる者は未だ全く神に歸服せざる者である。

神は其の預言者を通じて今日此の時、自らキリストの追隨者なりと稱しつゝ尙ほ教職者と彼等の仲間の前に自らを「溫健」ならんとする者の出現すべき事を豫め示して置かれた。斯

かる者に關して神は宣ふ、「汝は教を惡み、我が言をその後に乗つる者なるに、何の關係ありて我が律法を述べ、我が契約を口にとりしや。汝は盜人を見れば之を可とし、姦淫を行ふ者の伴侶となれり」(詩篇五十篇十六—十八節)。

如何なる者も妥協的態度を持しつゝ神の承認を得て神に忠信なる事は絶對不可能である。彼が若し神の承認を得んと欲するならば己が全部を以てエホバに歸服しなければならぬ。彼が自ら妥協的態度を持しつゝサタンと其の組織制度及び特に教職者に阿諛するは彼の自由なりとするも、斯く此の世の友となるの道を歩む彼は明かに自らを神の敵となす者である。(ヤコブ書四章四節)。若し彼が人間を恐れ、其の物質的財産の損失を恐れて斯くの如き妥協的の道を探るとするならば、彼は神が其の預言者を通じて示し置き給ひし此の御言に留意すべきである。「汝等は唯萬軍のエホバを聖として之を畏み、之を恐るべし」(イザヤ書八章十三節)。

エホバの眞理は民衆を分類する處のものである。エホバは聲明して、全能の神とサタンの組織制度との間の大なる戦ひの日の來る以前に於て先づ人々をして己が立場を自ら選び取るの機會を彼等に與へんと示し置かれた。神は今善意を有する人々に向つて彼等に謙遜と從順の態度を持して義を追ひ求めよと示し給ふ。彼等は之を爲すによつて頓て全地に臨む所の恐るべき大艱難の日に於て神より避難所を與へられる事となつてゐる。(セバニヤ書二章二、三節)。

今、ラチオを通じ、又書物冊子の印刷物や其の他の方法を通じて神の眞理が宣明さるゝ事によつて、民衆の大多數は「キリスト教會制度」と名乗る惡魔の邪惡制度より脱出し、丁度沈没せんとする難破船より鼠群が大擧脱出するやうに避難しつゝあるのである。斯くする事によつて彼等は自らをエホバの側に立て、神に依り頼む事となる。而して彼等は來るべき大艱難時に於て神の援けを得る事と、地上に來る復興の祝福に與る事に對する希望を抱き得るやうになるのであつて、若し彼等が神の言に服従するならば彼等は永久に生きて決して死ななく

なるのである。

神の民を分類するの事は預言の中に示されてある。エリヤは其の外套を取つて水を打つたが水は兩分した、(列王記略下二章八節)。エリヤの外套は眞理の音信を表象してゐるのであつて、それを以て水を打つたと云ふ事は即ち一八七八年より一九一八年(大正七年)迄の期間に於ける教會の仕事を表してゐる。此の期間を通じて多數の人々が各派の教會制度より脱出して來て、キリスト・イエスの眞の追隨者となつた。然る後にエリヤはエリヤから落ちたる其の外套を拾ひ上げて水を打つた時に水は兩分した、(列王記略下二章十四節)。之即ち一九一八年以後に開始さるる教會の證言の仕事が預言してゐるのであつて、其の結果は神の聖旨に基いて民衆が兩分さるゝ事となつた。民を兩分すると云ふ事は即ち、一般民衆が自らを

偽善の邪惡宗教制度に附せしむるか、若くはエホバを以て己が神となすかを自分で選定するの機會を與へらるゝ事の意味す。

エホバの證者によつてなざるゝ證言は別に政治家や資本家、又は宗教家の上に個人的攻撃を加ふるに非ざる事に留意せよ。之等の人々の多くが高き理想と良心を有してゐるは事實であるが、それと同時に不正直にして偽善なる者も彼等の間に多數あるを拒む事は出来ぬ。然し彼等が如何なる状態にあるに拘らず、此の眞理の證言は何れにしても彼等に與へられなければならぬ。眞理を知つてそれに服従する事は全部の人に對して最も必要なる事である。神が此の證言を一般民衆に與へらるゝ御目的は彼等に眞理を知らしめんが爲である。

若し民衆がサタンによつて盲まされ、欺かれてゐるとするならば、彼等の間に居る正直なる人々は皆己等が如何にして欺かれたるかといふ事と、それに對する救済方法を知らんと願ひ求むる筈である。此の事に就て神の言は完全な彼等を教へるのである。個人的改行を加へる事によつて何等の善き結果は齎らさぬ。然し人間の歩み來りし道の如何なるものなりしかを曝露する事によつて多くの善き結果を齎らす事が出来る。若し眞理が明示して、人間は偽物の偽善的宗教を行ふ事によつて神エホバより離反せしめられてゐる事を告げてゐるならば、民衆は一刻も早く此の事實を告げ知らされた方がよいのである。神は惡魔が人間を欺く

事を豫知し、其の預言者をして之を預言せしめて置かれたが、今サタンの正體を曝露して神の眞理を民衆に知らしめらるゝ豫定の時が到來したのである。

イエス・キリストは神の教會の首位者にして、イエスの御跡を追隨し始めた者は即ち正しき道を歩みつゝある者である。過去永らくの間に亘つてサタンは彼一流の狡猾なる方法を以て教會制度の教師等を良に捕へて了つた。サタンは彼等の心の中に誤信を與へて、彼等の任務は此の世を教化するにあるとなし、それを爲すためには教會は政治家や商業家と聯合するの必要ありとて其の信する所の如何を論ぜず政治家や商業家を教會の内に引き入れさせたのである。彼等教職者は此の世の政治運動を教會の仕事の一部に加へて、然かも尙ほ教會を以て神の制度なりと自稱してゐるが、イエスは斯かる行爲の絶對に誤れるを告げて置かれた、(ヨハネ傳十八章六節。マコ傳四章四節)。政治権者や商業権者は續々と各派教會制度の中に引き入れられた。之等の諸教會制度は惡魔の宗教より多くの誤謬を教會内に取り入れた。然るにも拘らず、之等の諸制度は尙ほクリスチャンの名を使用してゐるが、其の實はサタンの宗教を行つてゐるのである。

神は惡魔の組織制度を破却せんとの御目的を聲明されたと共に、其の通牒を敵側に交附せん事を命じ給ふた。神は其の御言の中に明示して、此の世の政治権者や商業権者は己等が、

神を邪傳する偽善の邪惡宗教制度の中に引き入れられてると云ふ事實を自覺して、自らサ
 タンの宗教なる偽物キリスト教會制度より脱出し來るべき旨を預告して置かれた。此の故に
 神は此の證言が交附されて、諸國政府と其の民衆が己等の眞の立場と、其の進み行くべき正
 しき道を發見し得るやうになされるのである。今此の證言を全地に傳達しつゝある者は皆眞
 に民衆の友である、何故なれば彼等は心より民衆の福祉を願つてゐるからである。此の證言
 が進展しつゝある一方エホバはサタンの組織制度を破却して、民衆に祝福を齎らすべき義の
 政府を地上に樹立すべく其の御目的を嚴肅に進行せしめてゐられるのである。

第九章 「行伍を立つる時」

エホバは其の敵に對する戦備を整へ給ふ。此の大戦を回避するは不可能となつた。神は其
 の預言者を通じて「怒の杯」を萬國に手渡すべしと示し置かる。若し「キリスト教會制度」の
 教師たちが神の言に服従して人々に其の眞理を告げ知らしたならば「キリスト國」に對する神
 の戦は避け得られたる筈である。然し今は其の時既に過し矣、(エレミヤ記廿三章廿一、廿二
 節)。神は其の怒の酒盃を諸國の民に手渡さるべき旨を預言的に聲明して置かれた、「イスラエ
 ルの神エホバかく我に言ひ給へり、我が手より此の怒の杯をうけて我が汝を遣はす所の國
 々の民に飲ましめよ、彼等は飲みてよろめき狂はん。こは我彼等の中に劍を遣はすによりて
 なり。北のすべての王等その彼と此とにおいて或ひは遠き者、或ひは近き者、凡て地の面に

ある世の國々の王等はこの杯を飲まん。セシヤク王は之等の後に飲むべし」(エレミヤ記廿五章十五-廿六節)。

「杯」はエホバが地上の支配者に飲ましむる爲に制定されたる宣告を表象す。「セシヤク」はバビロン制度即ち悪魔の組織制度に與へられたる一の名稱であるが故に此の預言は特に所謂「キリスト國」即ち「キリスト教會制度」の上に適用さるべきである。無論之は悪魔の宗教の全部に適用さるべきは當然なるも、然し神エホバに關してより善く知るの機會を與へられたる者がより多くの責任を有すべきは勿論である。神は其の大戦準備を進むる間に此の通牒を諸國に交附されるのである。(マタイ傳廿四章十四節)。

神エホバは其の預言者を通じて、「異邦人の時」の終結と此の世の終結と共にキリスト統治の開始さるゝを豫告し、此の時に世界大戦が起り、それに引き續いて饑饉、疫病、地震、革命、諸國の苦惱、ユダヤ人の故郷パレスチナ復歸及び「キリスト國」を中心とする世界的聯盟の實現が成就すべき事を示して置かれた。此の大預言成就の事實は一九一四年(大正三年)より開始を見た。此の一九一四年より一九一八年迄の間にエホバの偉大なる代理執行者なるキリスト・イエスはサタンを天界から放逐したのである。

續いて爾後、サタンの組織制度撃滅に對する最後の大战の準備が開始される順序となつ

た。地上諸國を支配する惡組織制度の全部は地の正當なる王キリスト・イエスの御前に撃滅さるべきであつて、此の王は今や全地の諸國の間に義を樹立されるのである。サタンが今、其の全力を地上に傾注してゐる事は大預言者キリストの示し給ふ如くである、即ち「惡魔已が時の幾時も無きを知り」て最後の大战に對する準備を整へつゝあるのである、(黙示録十二章十二節。十六章十四節)。此の大战が何時發生するかに就ては未だ人間に示されてゐない。然し此の戦備が行はれてゐる事實に見て其の爆發が最も近き將來にあるは確實である。

預言者ナホムはアツスリヤの首都ニネベに關する異象を示されて後其の預言の劈頭に於て斯く言つた、「ニネベに關する重き預言」と。其の「重き」とは「重負」と同一であつて「敗滅の宣告」を意味す。續いて彼の預言は神エホバが敵に復讐する爲に「行伍を立つる時」を有せられる事と、それと共にサタンも其の戦備を整ふる事とを併せ示してゐる。アツスリヤは讀者の熟知する如く政治的特色を中心にして見たる惡魔の組織制度を表象してゐるのであつて、之は又商業及び宗教の二要素によつて支持されてゐる。ナホムの預言がアツスリヤの首都ニネベを對照としてなされてゐる事は即ち「行伍を立つる時」が、此の世の組織制度が政權者を中心として威力を振ひ、其と共に之等政權者が大資本家と宗教家から強力なる支持を受ける時に於ける特殊の期間を指示してゐる事が諒かである。

今日我等の眼前に見る状態は此の預言の示す處と奇しき一致を見る。即ち今日に於ては地上の政治的支配権者は相互間に平和協約を制定し、國際的聯盟を組織して彼等の努力により「民主主義」によつて世界を安定すと聲明し、此の世を住み易き世となさんと主張してゐる。此の時に於て政權者は「平和」を叫ぶ商業權者によつて支持されつゝ尙ほ莫大巨額の金錢を費して戦備を整へてゐる。彼等の主張する處は「戦争を回避し得る唯一の方法は互ひに戦備を充實するに在り」と云ふのである。即ち之を換言すると兩者間の争鬪を回避し得る唯一の方法は彼等が携帶し得る全能力に於ける武器を所有せしむるに限ると云ふ譯である。平和運動と軍備充實の兩方面に於て教職者や宗教的指導者は何れも異常なる支持を與へてゐる。之等宗教家は戦争回避問題に於ける最高顧問の地位に置かれてゐる。今日世界の政權者は何れも最高權威をローマ・カトリック教會の首位者なる法王に歸し、此の爲に巨額の金を法王に提供してゐるが此の大費用の出所に就て大資本家が密接なる關係を有してゐる事は無論である。總ての事實は政權者等がその鞍上に在り、大資本家と宗教家とその戦車の中に在つて何れも偉大なる最後絶頂に向つて驀進しつゝあるを明示してゐる。そして總ての事實はナホムの預言が今其の成就の途上に在るを確實に立證してゐる。そして總ての事實はナホムの異象が諒解される時が既に到來したのであつて、神に己が全部を歸依したる者は

皆之を諒解する事が出来る、何故なれば此の預言の成就は今我等の眼前に進展を見つゝあるからである。ナホムと云ふ名は「慰むる者」を意味す、而して彼の預言は神の民に對して甚大なる慰めとなる。受膏者たちは神エホバが怒る事の遅くして絶大なる權力を保有し給ふ事を告げ知らされてゐる。此のエホバは悪しき者を決して免し給はず、それと共に大患難時に於て御自身獨特の方法を以て萬事に善處し、又エホバに信頼する者を常に御心に留めて保護し給ふのである、(ナホム書一章一七節)。

續いて神は其の民に告げて、惡しき者の最後と、大患難の二度と重ねて起らざる旨を示し給ふ、(ナホム書一章八、九節)。次に神の預言者ナホムは告げて、假令サタンの惡組織制度の諸要素が荆棘の如くに結び絡みて己が野望と智能に燃え誇り、泥酔するとも神は彼等を葉の如くに撃滅して了ふの準備を有し給ふ事を示す。神は其の民に告げて、其の時に彼等の苦しみの中の終結する旨を示し給ふ、「今、我かれが汝に負はせし鞭を碎き、汝の綱目を切り離すべし」。神は更に其の民に力附けの言を與へて惡魔の組織制度が撃滅さるゝ事を告げて後に又其の最後に就て斯く示し給ふ、「我汝の墓を備へん、汝輕ければなり」(ナホム書一章十一、十四節)。

神は其の民をユダの名を以て呼び給ふ、何故なればユダとは「讚頌」と云ふ事を意味し、エ

ホバの民は己が神を常に讃頌するからである。之に關聯して其の民を勇氣付け、彼等を慰むる神の御言は更に續いて云ふ、「ユダよ、汝の節筵を行ひ、汝の誓願を果せ。邪曲なる者重ねて汝の中を通らざるべし。彼は全く絶たる」(ナホム書一章十五節)。斯く潔められたる「遺殘者」級の忠信者等は「義をもて献物をエホバに献ぐ」る者となり、彼等の口唇には神に對する讃頌満ち、其の全身はエホバに歸するのである。(マラキ書三章一―三節。ヘブル書十三章十五節)。彼等は己等が「祭物の契約」の中に入れられたるを感謝し、歡喜して己が責務を果すのである。(詩篇五十五篇五、十四節。廿四篇四節。ロマ書十二章一節)。之ぞ即ち聖書は幾千年の昔に記述されあるも「末の日」に於て神に全く服従し、その忠信を立證する者の利益となり、力附けとなる爲に主として記されある事を明確に立證する更に有力なる他の一實證である。

然る後に預言者ナホムは、エホバが敵サタンと其の強力なる城塞を包圍するの準備を進め給ふ事を告ぐ。神が預言者を通じて戦備を整へ給ふの日を告げ知らされた事は其の日が即ち神の戦ひ給ふ時である事を確實に立證してゐるのである。我等の眼前の事實は此の預言の成就實現するを明示し、此の大戦の甚だ近き將來にあるを確實に語り告げてゐるのである。シオンに在つて神の預言の成就を注視しつゝある受膏者に向つて神の預言者は示す「撃破者攻めのほりて汝の前に至る」と。之ぞ即ちエホバの偉大なる代理執行者なるキリスト・イエス

がサタンを天界より驅逐して後に包圍攻撃の準備を進展される事を意味してゐる。

他の預言者エレミヤは神エホバの偉大なる代理執行者キリスト・イエスが神の「鎚」とされ、「戦の器具」とされてベピロンの名を以て呼ばれてゐる敵サタンの組織制度を打ち砕く事を述べてゐる。(エレミヤ書五十一章廿一―廿四節)。同時に亦之に就て預言者イザヤも國際聯盟の運命を預言して、「腰に帯せよ、汝等碎かるべし。汝等互ひに計れ、遂に徒勞しくならん」(イザヤ書八章九、十節)と示してゐる。

預言者ナホムは敵を攻撃する神の準備に就て受膏者達に向ひ更に示して云ふ「汝城を守り、路を窺ひ、腰を強くし汝の力を大に強くせよ、エホバはヤコブ(神の民)の榮を舊に復して……」(ナホム書二章一、二節)と。エホバは其の時の最も切迫せるを告げ、受膏者たちに特殊の恩恵を示して、力強く攻撃準備に参加せん事を示し給ふ。今日に至るまで「掠奪者(敵)これを掠め」て神の受膏者を掠奪し、神の民を空虚にして「葡萄蔓を壞な」つた。然し今より後永遠に神の保護は彼等の上に在りて日夜共に神の御手の下に置かれるのである。(ナホム書二章二節。イザヤ書廿七章二、三節。詩篇百廿五篇一―三節)。

然る後にナホムは示す、「その勇士は楯を紅にし、其の軍兵は紅に身を甲ふ。其の行伍を立つる時には戦車の鐵灼燥きて火の如し。鎗また閃めき震ふ」(ナホム書二章三節)。此の

聖句とそれに續く聖句中の「戦車」は今日迄には現代の高速交通機關を表象するものとして解されてゐた。此の預言は高速交通機關の状態を形容してゐるは事實なるも、然かも其の中にはそれ以上の深奥なる意義を含んでゐるのである。此の深奥なる意義は主が其の殿に來てシオンを築き、神の電光によつて此の預言が照射される迄は悟り知る事は出来なかつたのである。今日迄此の預言の上に與へられてゐた解釋の是非を批判する替りに、神の民たる者は神が其の御豫定の時至るに及びて更に大なる光輝を此の預言の上に加へられた事を悟り見て喜ぶべきである。

今、エホバの電光に依て照射されたる此の預言は、全能の神が大戦備を整へ給ふ有様を明示するのである。ニネベの都即ち悪魔の組織制度を包圍攻撃し給ふ者は即ちエホバである。エホバは御自身に屬する勇士等に楯を備へ給ふ。然る後に神は敵に示して攻撃に對する準備を爲せよと告げ給ふ、何故なればエホバは今敵を撃滅し給ふからである。即ち示し給ふ「汝水を汲みて圍まるゝ時の用に備へよ……其處にて火汝を焼き、劍汝を斬らん。其汝を滅ぼす事は吸蝗の如くなるべし。汝吸蝗の如く數多からば多かれ。汝群蝗の如く數多からば多かれ」(ナホム書三章十四、十五節)。

エホバの全軍を指揮して神の御前に立つ「勇士」は偉大なるキリスト・イエスである。其の

「軍兵」は神軍の成員として己が全部を獻げ盡したる忠信の受膏者たちである。神は其の大元帥キリスト・イエスに向つて示し給ふ「英雄よ、汝その劍、その榮、其の威を腰に帶ぶべし。汝は眞理と柔和と正義との爲に威をたくましくし、勝を得て乗り進め。汝の右の手汝に畏るべき事を教へん」(詩篇四十五篇三、四節)。

シオンの全成員に關してエホバは告げ給ふ、「我既に聖め別ちたる者に命じ、我が丈夫(勇士たち)ほこりに勇める者を呼びて我が怒をもらさしむ」(イザヤ書十三章三節。同時にセカヤ書十章五節を見よ)。

楯とは敵の攻撃を撥ね反すものである。エホバはシオンの成員にとつての楯である。「汝の救の楯を我に與へ給へり」(詩篇十八篇廿五節)。エホバは其の戰に於て己が代表者キリスト・イエスを支へ給ふ「右の手」である、(詩篇百十篇五節)。完全に神の武裝をなす忠信者に對して使徒パウロは「信仰の楯をもて敵の火箭を防げ」と勸む、(エペソ書六章十六節)。キリストの紅の血潮に在りて、神の恵によりて入れられし「祭物の契約」を固く守る受膏者等の信仰は「紅の楯」によつて巧妙に表象されてゐるのである。

之に就て預言者イザヤに依て更に他の模圖が示されてゐる。即ち大能のキリスト・イエスは戰爭より歸還した、然る時に彼に向つて問はる、「汝の服飾は何故に赤きや」と。其の時キ

リストは答へて其の衣は敵の血にて紅くなれりと示し給ふ、(イザヤ書六十三章一―三節)。預言者ナホムは云ふ、「その軍兵は紅に身を甲ふ」と。之ぞ即ち彼等の衣が紅であつて、彼等が其の救ひ主にして贖ひ主なるキリスト・イエスの血潮に絶対の信仰を有し、喜んで主の御跡を追隨しつゝある事を明示してゐるのである。所謂「キリスト教會制度」はイエスの血に何等の信仰を有してゐない、何故なれば彼等はイエスの血を以て救ひの唯一の道なる事を否定してゐるからである。唯主の側に雄々しく立つ勇士のみの衣が紅である。之等の者には主がシオンを築かれし時に救の衣が賜つてゐるのである、(イザヤ書六十一章十節)。

神の預言者ダビデも亦之等の忠信なる追隨者を呼んで「其の日」神の命に喜び勇んで服従する者たちと示してゐる、(詩篇百十篇三節)。之等シオンに在る者は主より特別の恩恵を受けるのであつて、彼等に就て斯く記さる、「我等は神によりて勇ましく働かん」(詩篇百八篇十三節。百十八篇十六節)。之等の預言が共に「其の日」即ち神の「行伍を立つる時」に該當してゐる事は注意すべきである。

「其の行伍を立つる時には戦車の鐵灼燐めきて火の如し」と。「戦車」とは神の軍隊の分隊を謂ふ、(エゼキエル書一章四―廿六節)。此の點に就てはドタンに於けるエリシヤの經驗が最も密接なる關係を有す。エリシヤを捕へんとて敵の王は「馬と戦車及び大軍を遣はせり。彼等

即ち夜の中に来りてその邑を取り圍む」。エリシヤの僕は敵の大軍に恐怖戰慄したがエリシヤは平然としてゐた。エリシヤは神エホバに頼る信仰の楯を固く執つてゐた。而して神は彼等に向つてエリシヤを保護する爲に火の戦車と火の馬が全山に滿つる事を示された、(列王記略下六章十二―十七節)。此の記録は今日此の時に於ける神の民の利益の爲にのこし置かれたのである。今、我等は「其の日」に在り、神は其の戦備を整へ給ひ、又惡魔の組織制度は其の全力を盡してエリシヤに依て豫表されたる仕事を爲さんとす「遺残者」級の受膏者を撃滅せんとて押し寄るのである。然るに神は火の戦車を以て受膏者を包み彼等を保護し給ふ、「神の戦車は萬に萬を重ね千々に千々を加ふ。主その中に在ませり。聖所に在すが如く、シナイの山に在し、が如し」(詩篇六十八篇十七節)。

今日、全地には主への奉仕に精勵する神の組織制度の「遺残者」級の軍隊散在す。之等は神の軍隊の分隊であつて、神の戦車を以て表象さる。そして之等の分隊は今其の殿に臨在する。主キリストを通じて通るエホバの電光に照射されて灼燐き輝く。即ち堅固なる「鐵灼燐きて火の如く」なるのである。神の戦車即ち組織制度の各分隊はエホバの家の爲に火の如き熱心に燃え、エホバの電光に照らされ、又昇天する「義の日」の光に輝く。此の「義の日」こそ即ちエホバの全軍を指揮するキリスト・イエスである。

之ぞ即ち其の「行伍を立つる時」である、何故なれば神エホバが其の偉大なる御仕事を完成さるゝ時であるからである、(詩篇百十八篇廿四節)。預言者ナホムに依つて「行伍」として用ひられたるヘブル語原字は *קָוֵן* である。此の字が此の預言中に使用される方法に就ては特に留意すべきものがある。此の字は「準備し、完成し、樹立する」と云ふを意味す。「義者の途は旭光の如し、愈々光輝を増して晝の正午(Noon)に至る」(箴言四章十八節)。即ちエホバが「行伍を立て給ふ日」とは「晝の正午」に達する前提であり、其の開始である。更に此のヘブル原字が使用されてある所は以下の諸聖句である、「エホバの家は諸々の山の嶺に立ち(Kan)……」(ミカ書四章一節)。「神はこの都を永遠まで固くし(Kan) 給はん」(詩篇四十八篇八節)。「至上者 自らシオンを立て(Kan) 給はん」(詩篇八十七篇五節)。

以上の事實に見るに此の「その行伍を立つる時」とはエホバの戦車(神の組織制度の各分隊)が「晝の正午」の光輝を受け始める時を指示するのであつて、此の時彼等は神の殿の首位者として臨在さるゝ「シオンの首石」を通じてエホバの電光の照射を受けるのである。之ぞ即ち神が其の殿級成員の前に於て「石」を立てゝ置き給ふ時であり、「晝の正午」の光輝が其の「石」の上の照り輝く時である、(ゼカリヤ書三章九節)。

エホバが其の敵に對する戦備を常に充分に備へて置かれる事は無論である。故に此の「行

伍を立つる時」とはエホバが其の組織制度に屬する己が民に電光を照射して、愈々切迫する大衝突に對する準備をなさしめ、彼等をして己が持場を守らしむるに必要な保護と教導とを加へられる事を主として意味してゐるのである。神は「遺残者」級を遣はしてエホバの聖名を宣揚せしめ、此の世に向つて神の刑罰の日の接近しつゝあるを告げしめ給ふのであつて、此の時に精勵する忠信者は神の電光によつて照射されるのである。神は彼等に對する楯となりて之を保護し、其の組織制度中に秩序を正して適當なる場所にそれゝ配置し給ふ。「鎗もた閃きふるふ」とは何を意味するか。神に献身せる忠信者は鎗をもつて表象さる。此の鎗は一致して敵を攻撃する武器であると共に鎗自身も「震ひ」を受けるのである。

一九一八年に主が其の殿に來られた時以後「神の家」に對する審判が開始された。其の時以來献身者の間に大震動あり、神の示し給ふ道を従順に歩む者は祝福を受けて其の聖言を諒解するを許されるが、一方自稱献身者は何れも美事に「震ひ落された」のである。之ぞ使徒パウロの示す處と完全に一致するのであつて、即ちサタンの組織制度が全滅して、地上に神の國が全き建設を見る直前に於て此の預言は成就するのである、(ヘブル書十二章廿七、廿八節)。神の受膏者は磨かれたる鎗である。磨かれたる鎗は日光に輝き、電光に閃めく。神の僕級に關して預言者イザヤは斯く記す、「エホバ……は我を磨きすましたる矢となし給へり」(イザ

ヤ書四十九章二節。

主が殿に來まして審判が開始されると共に敵身者の間に大震動が発生した。此の時承認を受けたる者等は磨きすましたる鎗の活動を開始するが如くに、證言に對する活動を始めて甚大なる熱心を顯はし示し、爾來愈々精勵を増し加へて今日に及んでゐるのである。之は又更に進んで「其の大なる恐るべき日」の爲に神が彼等を保護し給ふ事を示してゐる。而してエホバは其の大戦の前に當つて其等忠信者を敵なるサタンと地上の人々に遣はし、エホバが敵の組織制度を包圍攻撃して之を滅却し給ふの通牒を彼等に交附せしめ給ふのである。預言者ハバクは此の大戦と其の準備の有様とを叙し、其の時に神の用ひ給ふ武器を「汝の鎗の電光の如き閃爍」(ハバク書三章十一節)と呼んでゐる。全地上には今、エクレジヤの名稱を以て呼ばれてゐる人々の集團が散在してゐて、彼等は己を主に献身してゐる故に神の組織制度を形成してゐるのである。之等の集團は神の組織制度の分隊と稱すべきであつて、彼等は矢の如くに磨きて光らされ、王キリストの奉仕に活動するの準備をなす。今、全地に接しつゝある此の戦は單なる人間の戦ではない。之ぞ「全能の神の大なる日の戦」(黙示録十六章十四節)である。神は之を決して秘密に附し置かれし事なく、又今後も秘密の中に此の戦備を整へ給ふのではない。神は其の證者を差遣して此の事實を宣明せし

め、敵の元兇サタンと彼の組織制度に向つてエホバの聖旨の何なるやを告げ知らせ給ふのである。サタンは彼自身の存在を失はんとする大患難に直面してゐる事を知つてゐる。最近サタンは天界に於てキリスト・イエスと戦つて敗れ、天界より地上に追ひ降ろされた。悪魔は今「己が時の幾許もなきを知り大なる怒を懷きて」戦備を急ぎつゝあるのである。(黙示録十二章十二節)。

敵の準備

サタンは今彼一流の方法を以て戦備を整へ、大騒ぎを演ずると共に人々をして彼の目的に盲目無知ならしめてゐる。神の大預言者なるキリスト・イエスはヨハネをして斯く預言せしめられた「我また龍の口と獸の口及び偽の預言者の口より蛙に似たる三の汚れたる靈の出づるを見たり。之は悪魔の靈なり。異なるわざを行ひて全地の諸王に就り、彼等をして全能の神の大なる日の戦に集らしむ」(黙示録十六章十三、十四節)。

此處にある三の汚れたる靈は蛙に似てゐると示されてゐる。本來蛙は誇り、傲然と濟まし込みて、亦盛んに喧騒を逞くす。或る種の蛙の如きは全く驚くべき音響を發するのである。悪魔は今、全世界を恐れ慄ましむ、何故なれば彼の「蛙」が其の喧騒を逞くしてゐるかである。此の「龍」はサタンの全組織制度を表象し、一方「獸」は悪魔の組織制度の見ゆる方

の部分を表象す。而して「偽の預言者」とは特に欺瞞的の諸宗教制度を表象してゐるのである。サタンの組織制度を形成する之等の諸要素は傲慢であり、其の今爲しつゝある事、又今後爲さんとする事に就て盛んに喧騒を逞くするのである。

彼等は傲然と云ふ「地球は我等の所有に屬す。我等は地上の全部を住みよき所に化するのであつて、我等が之を爲し終る時に人々は必ず之を喜ぶに相違ない」と。之ぞ隙かに悪魔の心理状態を物語るものである、彼は云ふ「河(諸民)は我の所有なり、我自己の爲に之を造れり」(エゼキエル書廿九章三節)と。悪魔の組織制度の見ゆる方の部分は平和協約を結んで誇りに云ふ「我等は戦争を除き去つた。戦争は之で絶滅するから人々は永遠に安心せよ」と。

巴里不戦協約が制定されて米國上院の批准を受けんとする時に該協約の主唱者は米國に於て傲然と調歩横行して自家宣傳をなし、その道化芝居は活動寫眞にまで造られて全國に映寫された。之と同時に一方武斷派は國家の立法機關なる上下兩院を鞭達して不戦協約の批准をなさしむると共に、亦更に多くの軍艦建造案を可決せしめたのである。政權者の鞭は今、其の權力を握つて己が目的を貫徹する爲に高く鳴る「蹄の音あり、輪の轟く音あり、馬は躍り跳ね、車は轆り行く」(ナホム書三章二節)。

米國上院が殆ど満場一致で巴里不戦協約を批准したる僅か數日後に、此の立法機關は海軍

力の大擴張を聲明し、軍艦新造のみの爲に二億七千五百萬弗の豫算を計上したのである。

一九二九年二月十三日の新聞電報は「大統領は今日十五隻の新式軍艦建造案を裁可した」と傳へたが、其の裁可署名數分後に於て直ちに建造計畫の實行に着手されたのである。不戦協約成立と共に教職者や宗教的指導者等は政治家や資本家の功績を賞讃して民衆に告げた、「之で最早戦争は絶滅した。何故ならば我等は戦争を排斥して了つたからである。然し之と共に我等はモット軍艦を建造して萬一に備へて置かなければならぬ」と。

此の言行不一致の矛盾を理解する事は一般民衆にとつて非常に困難である。今所謂「キリスト國」の諸國は大仕掛けの軍備擴張を急いでゐる。政權者は其の鞍上に在つて軍備擴張を合法的ならしむる準備をなし、財界の巨人等はそのれに對する費用の出所を備へ、教職者は彼等一流の神聖振つた煙幕を用ひて政權者と金權者を擁護支持し、民衆をして事實に無知ならしむ。全く預言の如くに蛙に似たる三者は喧騒を逞くして驚くべき音響を發す、而して之等三者の中に最も神聖を裝つてゐるのは「偽の預言者」なる宗教制度である。

斯くして軍備擴張は進行し、サタンは己が代理人なる地上の支配權者をして會合せしめ、神と其の受膏者に敵對して云はしむ「我等その械をこぼち、其の繩を捨てん」而して地上を我等の自由にせんと。此の時「天に坐する者(エホバ)笑ひ給はん、主彼等を嘲り給ふべし」

(詩篇二篇二、四節)。
 借て今、對戰爭準備に關するナホムの預言に還つて見るに、その預言は以上默示録中の預言と全き一致符合を示してゐる。エホバはナホムを通じて斯く示し給ふ、「戰車は街衢に狂ひ奔り、大路に推し合ふ。其の形状火炬の如く、其の疾く馳する事電光の如し」(ナホム書二章四節)。

此の第四節にある戰車と第三節の戰車と同一のものではない。第三節の戰車は城(悪魔の組織制度)の外側にありてサタンの組織制度を包圍攻撃すべく「行伍を立て」ゝる。亦第四節の戰車はサタン側の武力的諸機關を表象してゐる。第四節の「狂ひ奔り」の字はヘブル語原字の *halal* より翻譯されてあるのであつて之は「自賞自讃して誇る」を意味し、又「己の愚を露はす」を意味してゐる。(Young氏註)。斯くの如くサタンの組織制度の「戰車」が街路に「狂ひ奔る」と云ふ事は即ち虚しき傲慢さを以て擴張されつゝある軍備を意味するのである。而して其の當局者は何れも高慢に満ち、蛙の如く膨れ上つて轟々と喧騒してゐる。彼等は己が偉大さを人々の前に自讃し、街頭に練り歩いて人々の頭に己等を印象せしめんとす。何故に新聞雜誌や映畫に軍備問題が喧しく騒ぎ立てられるのであるか。何故に諸國に陸海軍々備が宣傳されるのか。何故に各映畫館では軍備擴張の當局者なる政治家や軍人、武人等の功蹟が紹介賞

識されるのか。之等は即ちサタンの代理者が街頭に現はれて自ら愚を露出してゐるのである。何故に歐米諸國では軍備問題に於て、美術館に於て、新聞雜誌に於て、活動寫眞に於て宗教的色彩が特に卓出してゐるのであるか。之ぞサタンの常套手段であつて、彼は宗教的要素を以て常に民衆を毒し之を無知盲目ならしめてゐるのである。之等欺瞞者は云ふ、「我等は自己クリスチャンである。我等はキリスト國を代表してゐる」と。然し注意すべきは彼等は自己のみを賞讃して、神やキリストを決して賞讃しない事である。彼等は己が榮譽と權威の獲得に狂奔して自らの愚を主の御前に露出し、斯くて敵側の準備も進展す。
 「彼等は狂ひ奔る」。彼等は人々の前に傲然と自稱して民主主義を以て此の世を安定すと云ふ。彼等は外交手段によつて互ひの不和を回避し、其の真相を人々の眼から隠匿す。之ぞサタンの常套手段である。

然る後に預言者ナホムは續く、「其の形状火炬の如く……」と。第四節の此の「火炬」の字は他の場所で屢々「燈火」と翻譯されてあつて、之はサタンの組織制度の部隊若くはその最も有力者等が一般民衆の前に彼等を教導する燈火の如くに現はれ、諸國政府に自由と進歩を與ふる光明の指示者の如くに現はれてゐるを意味す。即ち教職者等は其の講壇やラヂオを通じて民衆を瞞着し、自由と平和の大光明は今既に來りて政治家や資本金家、宗教家は一致協力して

人々に歡喜の光明を與ふるのであると力説す。實に之等教職者こそ民衆を欺瞞する偽預言者である。神は斯かる偽物の出現するを豫告して斯く示し給ふ「かの輩は偽の使徒、また詭譎を行ふ者にしてキリストの使徒の貌に變じたる者なり。これ奇しき事に非ず、サタンも自ら光明の使者の貌に變ずるなり。是の故に彼(サタン)の役者(教職者)たとひ義の使者の貌に變ずるとも大なる事に非ず、彼等の終は必ず爲す處に應ふべし」(コリント後書十一章十三―十五節)。

然る後に預言者ナホムは云ふ「其の疾く馳する事電光の如し」と。彼等の準備も頗る迅速である、何故なればサタンは己が時の少い事を知つてゐるからである、(黙示録十二章十二節)。而して支配者等は何れも困惑し苦惱す、何故なれば彼等は大患難の切迫しつゝあるを看取してゐるからである、(ルカ傳廿一章廿六節)。

預言者ナホムは續く「彼その將士を憶ひ出す、彼等は其の途にて躓き仆れ、その石垣に走せ行き、大楯を備ふ」(ナホム書二章五節)。此の「將士」と譯されてある字は他の所で「群の長たち」(エレミヤ記廿五章卅四―卅六節)と譯され、亦「名ある王等」(詩篇百卅六篇十八節)と譯されてゐる。即ちサタンの宗教制度に屬する有力者たちを意味してゐるのである。サタンは之等の有力者を心頼みにし彼等を「憶ふ」のである。サタンは之等の有力者を數へ、かの喧騒



イエス・キリストの復活

する「蛙」と共に己が武力の中堅となす。之等の人々はサタンの世に属する者であるが故にサタンは彼等を愛護す、(ヨハネ傳十五章十九節)。

彼等はサタンの目的を實行するが故にサタンの愛顧を受け、彼の「將士」と呼ばれ、「名ある者」と呼ばれ、亦「長たち」と呼ばれるのである。之ぞサタンが人々を神エホバより離反せんとする常套手段である。サタンは民衆の前に己が組織制度の英雄勇士等を飾り立て、置く。宗教制度に於て、政治的大集會に於て資本家の會合に於て之等の有力者たちは人々の賞讃を博すべき模範として、英雄として民衆の前に飾り立てられてゐるのである。大新聞雜誌は何れもサタンの組織制度の代辯者に過ぎず、之等は何れも筆を揃へて大武人の勇敢なるを賞し、大資本家の徳と権力とを讃し、宗教的指導者等の偉大なるを頌ふるのである。之ぞ全く相互賞讃を以て成る社會であつて、新聞雜誌、ラヂオ、活動寫眞、美術館の全部は人間の名を榮化するに使用され、斯くして人々の心を神エホバより離反せしむるに努力してゐるのである。

サタンは其の大戦に對する準備の爲に己が「將士」や「群の長たち」を召集す。そして教職者や「長等」は僞善的にクリスチャンの名を僞稱して彼等の主公なるサタンの召命に應じて急ぎ召集す。之ぞ神の預言者ナホムの明示する通りであつて、而して彼等は急ぎ來る時に「其の

途にて預き付れ……」と記さる。彼等は神が預言し置き給ひし如く神に依て膏注がれたる王なる「石」キリストに預くのである。彼等はサタンの世即ち組織制度を擁護支持する爲に急ぎ参集する時に「預き付れ」るのであつて、之は大預言者イエスの預言し置き給ひし通りである。(マタイ傳廿一章四十二節)。「多くの人々これによりて騒ぎ且つ仆れ、壊れ、網せられ、また捕へらるべし」(イザヤ書八章十四、十五節)。彼等は神の受膏者を攻撃せんとするの準備の爲に急ぎ來りて預き付る。「我の敵、我の仇なる惡しき者襲ひ來りて我が肉を食はんとせしが騒ぎ且つ仆れたり」(詩篇廿七篇二節)。

預言者ナホムは云ふ、「その石垣に奔せ行き……」と。教職者と其の群の長等はエホバの眞理を人々に宣明する爲に熱心に努めつゝある神の受膏者を迫害し懲罰せんとて何等かの方法を探し求む。彼等はサタンの組織制度の城塞なる人々の許に走り行きて己が嫌忌する「遺殘者」級を撃滅するの途を求む。然し此の陰謀を企てつゝある間を通じて己を防禦する爲に教職者や長等は自らを決して外部に露はさない。彼等教職者と長等は忠實に神エホバを代表する受膏者等と公然と論議をなす事を極力回避するの手段を常に執る、何故なれば若しそれをなす場合には忽ち彼等の正體が暴露され、彼等の背徳不信なる二心の醜狀が一般の人々の前に露出されるを恐れるからである。彼等は「バビロン(惡魔の組織制度の宗教的特色)の勇者」

であつて、大言壯語を放つて横行しつゝ一方潜行的に陰險なる陰謀を以て政權者をして忠信なる證者を迫害苦惱せしめんと努む、而して之は最後の大戰の爆發の時迄繼續して行はれるのである。(エレミヤ記五十一章卅節)。

サタンは頓て間もなく神と戦はなければならぬ事を知つて其の戦備を急ぐ。而して彼の手段方法は例の如くに陰險である。彼は大言壯語を以て人間の功蹟を稱揚し、諸國間に甚大なる恐怖を惹起せしめ己が民を急ぎ召集して大戰の日に備へんとするのである。彼サタンは己が組織制度に屬する人々を暗愚の裡に封じ置く。サタンは神の受膏者なる「遺殘者」級を極力憎惡嫌忌し、己が宗教制度の教職者と群の長等を使喚して彼等を撃滅せしめんとす。無論サタンは來らんとする大戰に於て此の惡むべき「疫病」なる神の受膏者等を全滅し得べしと信するにしても、先づそれ迄に彼等を迫害して苦しめんとするのである。

若し神の保護が其の受膏者の上に無くばサタンは完全に彼等を撃滅する事が出来るのである。預言者ナホムはサタンの戦備と彼の同僚の爲す準備に就て語つた後に斯く云ふ「大楯を備ふ」と。

エホバはヨナを遣してアツスリヤの都ニネベに對する刑罰の通牒を交附せしめられた。此の都の刑罰の預言はヨナが大魚の腹中から救ひ出された時にニネベの人々に示された。此の都の

滅亡は神の「行伍を立つる時」まで延期された。ヨナの救出によつて豫示された如くイエス・キリストは死より甦らされた、(マタイ傳十二章四十節) が、之ぞ全地に對する證言となるのであつて、殊に主の再臨とキリストの「體」に屬する忠信なる成員の復活は特に強き證言となるのである。此の期間中にキリストの追隨者たるべく或る程度迄の改心者があつた。今や此の證言の仕事は正に完成を見んとしてゐる。神の「行伍を立つる時」は正に終らんとしてゐる。サタンの組織制度に對する戰闘開始と其の擊滅の時は正に接迫した。古代バビロン城の城門が門かれて敵軍が侵入して之を陥落した如くに預言者ナホムは言ふ「河々の門啓け、宮消え失せん」と、斯くてサタンの組織制度は崩壊するのである、(ナホム書二章六節)。

大戦の日は正に來り、諸國審判の時は既に接迫してゐる。主は審判の爲に其の聖き殿に在す一萬民よ、聽け。地と其の中の者よ、耳を傾けよ。主エホバ汝らに對ひて證を立て給はん。即ち主その聖き殿より之を立て給ふべし(ミカ書一章二節)。

此の通牒は先づ此の世の諸國に交附されなければならぬ、何故なればエホバは決して舊の暗きで行動し給はぬからである。エホバは預言者ヨエルを通じて示し給ふ「諸々の國に宣べ傳へよ、戰爭の準備を爲し、勇士を勵まし、軍人を悉く近寄り來らしめよ。汝等の劍を劍に打ち變へ、汝等の鎌を鎗に打ちかへよ。弱き者も我は強しと云へ。國々の民よ、起ちて上り、

ヨシヤバテの谷(エホバが審判を行ひ給ふ時と所)に至れ。彼處に我座を占めて四圍の國々の民を悉く審判かん(ヨエル書三章九、十、十二節)。

サタンは戦はんが爲に其の大軍を「審判の谷」に遣はす。軍族と軍歌と軍樂を以てサタンの將士は進軍す。其の戰車には諸帝王あり、侯伯あり、大統領あり、知事あり、總督あり、大小政治家あり、司法官あり、議員あり、其他此の世の政治關係者の全部あり。亦更に壯嚴なる多くの軍樂と軍旗を擁して此の世の財界巨人等は華々しき装ひを以て來る。大小資本家等は勢揃ひして進軍し來る。更に亦多くの旗印と軍樂、花車の賑はしさを以て宗教界の偉人等が進軍し來る。其の行列中には法王あり、樞機官あり、大司教あり、大僧正あり、監督あり、司祭あり、ラビあり、神學博士あり、牧師あり、傳道師あり、法主あり、貫主あり、管長あり、僧侶あり、其他教職者僧侶の全軍ありて何れも己を他に判別せしむる衣を纏ひ、有力なる教會員や壇家に侍かれ、彼等の手より獻金や賽錢を受けて民衆の脂に肥え太る。驕慢と倨傲、冷酷、打算的にして峻烈、重々しき威嚴はサタンの組織制度の見ゆる部分の支配階級に屬する總ての入りに兼ね兼はり、彼等は此の特色を持って己が持ち場々々を固めてゐる。自尊自大は彼等の面貌を覆ひ、自尊自謙は彼等の口唇に滿つ。

進め！進め！！進め！！而して彼等は來る。彼等の行列中には大新聞雜誌の經營者あり、其の

預 官

國名	現役	備成隊員	不備成隊員	合計
アルメニア	12,000	—	131,600	143,600
オーストリア	20,000	—	1,001,614	1,021,614
ベルギー	21,000	—	311,100	332,100
ブルガリア	20,000	—	240,000	260,000

全紙面を費して此の世の強大なる組織制度を賞讃す。彼等は所謂輿論を捏造して此の世の支配権者を擁護支持す。更に多くの軍隊と旗印を以て戦車と軍馬は来る。之等は支配権者にはあらずと雖も支配権者に愛用される有力なる器である。

鐘鼓は轟き、ラツパは鳴る。彼等の鐘鼓とラツパの響は何時迄続くか。全地の諸國は來らねばならぬ、彼等に飲ましむる爲にエホバが與へ給ふ怒の盃を飲む迄は彼等は來らねばならぬ、而して之を飲む事を拒絶し得るものは一人としてないのである、(エレミヤ記廿五章廿八節)。

今全地に於て軍備充實に狂奔しつゝある諸國は六十の多きを算ふ。残忍なる殺戮の犠牲たるべく武装されて悪魔の組織制度擁護の武器とされてゐる氣の毒な青年の數に就て一九二八年九月廿四日米國陸軍省發次の調査報告に見る。

時るつ立を依行 (333)

チニツユ・ス	120,000	1,222,000	2,222,000	3,444,000
ロムキヤ	2,122	120,000	222,000	344,122
アムイラダ	12,000	22,000	112,000	146,000
エツソニヤ	20,000	222,000	222,000	444,000
フ井ンランド	222,000	20,010,000	222,000	2,222,010
フランス	100,000	—	222,000	322,000
ドイツ	222,000	222,000	222,000	666,000
英 國	222,000	222,000	222,000	666,000
ギリシヤ	22,000	—	1,222,102	1,244,102
ハンガリー	22,000	12,000	222,000	356,000
愛蘭自由州	22,000	22,000	222,000	366,000
イタリヤ	222,000	222,000	222,000	666,000
ラトヴィヤ	12,000	1,100,000	222,000	1,324,000
エストニア	12,000	100,000	222,000	334,000
リスフニヤ	22,000	120,000	102,000	244,000
オランダ	22,000	222,000	222,000	666,000

行	預	共	共	共
メキシコ		1,100,000	1,111,018	1,100,000
ニューファウンドランド		—	—	50,000
ニカラガ	1,100	—	50,000	50,000
パラグアイ	11,000	—	50,000	50,000
ペルー	11,000	—	50,000	110,000
サルバドル	50,000	—	—	110,000
ドミニコ	11,000	—	—	100,000
北米合衆國	111,000	—	—	1,100,000
ウレグエー	2,000	—	—	100,000
ペネズエラ	2,000	—	—	50,000
ポルトリ	1,000	—	—	50,000
ウーランド	—	—	—	50,000

上記報告によると其の数は全地諸國に於て一億二千四百十九萬二千四百四十人の大多數に上ると云ふ。之等多數の青年は何れも劍と銃、ナイフ、背囊、彈丸、砲車、タンク、爆彈其他殺戮用の諸器具を以て嚴重に武装されてゐるのである。

此の外各國には大海軍ありて戦艦、水雷、潜水艦の大威力を有し、又大空軍ありて人間の頭上に恐るべき破壊殺戮を逞くせん。更に加ふるに大都市を數時間に全滅さす毒瓦斯あり。之等の全軍は勢揃ひして「審判の谷」に進軍しつゝあるのである。而して彼等の多數は其の進軍の理由を知らざる状態に封じ込められてゐる。此の組織制度に屬せざる多數の人々が尙ほ此の外にあるにしても彼等は間接と直接とを問はず何れも又此の惡組織制度によつて感化され、其の影響を受けてゐるのである。それ等の人々の中には軍用自動車運轉手あり、病院の男女看護人あり、糧食供給者あり、運搬人あり、醫師等がある。更に其處には此の武力制度の手に己が衣食の供給を仰ぐ多數の人々あり。之等目に見ゆる組織制度の最上、極めて少數者を除く他は見る事能はざる處に此の世を支配する大能の神なる惡魔ありて、彼は惡しき天使の軍に依つて守護支持されてゐるのである。

此の組織されたる大権力の實在を示されつゝ尙ほクリスチャンと稱する者の中には惡魔の組織制度の實在説を排棄嘲笑す。然らば彼等に問はん、「以上の組織制度は果して何者に屬する者なりや」と。神エホバが斯かる組織制度を要し給はざるは無論である。假令若し彼等が主たる神の名を用ひて來るともそれは只偽善的に神の聖名を欺用しつゝある丈けであつて、事實彼等はサタン即ち惡魔の名に屬すべきものである。

神の組織制度の見ゆる部分には眞に少數の微弱者で之を判別するにも困難な程である。彼等は神の旗印の下に率ひられて谷の向ふ側にある。彼等は何等殺戮の武器を手にはせず、唯ラツパを吹いて神エホバの聖名を讃頌宣揚するのみである。サタンの組織制度の見ゆる部分に屬する者は之等微弱なるラツパ吹奏者を見て輕蔑嘲笑す。之等の微弱なる小軍は今日サタン側にとつては唯一の見ゆる敵であつて、彼等はサタンの組織制度の如何なる部分にも妥協する事を絶対に拒絶す。彼等は極力エホバの聖名を宣揚して其の奇しき御業を讃頌す。サタンは己が配下の教職者に命じて此のラツパ吹奏者の小軍を撃滅せしめんとす、何故なれば彼等のラツパ吹奏とエホバ讃頌の歌によつて悪魔の宗教制度が非常に妨害されるからである。此の小軍は絶対に無害である。若し牧師や神學者等の教役者が躍起となつて反對し、政治家や資本家を煽動せざるならば、政治家達は此の小軍を罪に陥れる罪名を發見せず、又資本家等も己が業務多忙で此の小軍に關はり合つてゐる暇がない苦である。然し政治家と資本家の兩者は彼等の相棒なる宗教家の要求に對して熱心とならざるを得ない、何故なれば彼等の主人公サタン即ち悪魔が此の小軍を激怒して之を撃滅せんとしてゐるからである、(黙示録十二章十七節)。神は此の小軍に向つて示し給ふ、「汝のラツパを絶えず吹き続けて夜も晝も休むな。決して恐るゝ勿れ、汝は斷じて禍害に遭はざるべし。我はわが言を汝の口の中に置きて汝を護

らん。我エホバが神なる事を人々に告げ知らせよ」(イザヤ書六十二章六節。五十一章十六節。詩

篇九十一篇十節)。

神の組織制度の見えざる部分の武力に就ては判明しない、何故なればそれが顯示されてゐないからである。然し我等は、イエスが其の必要に應じて十二軍の天軍を呼ぶ事が出来ること告げられし御言を記憶す。此の故に神の組織制度の一部として天使の強大なる軍の在るを悟り知る事が出来る。イエス・キリストはエホバの全軍を統率する大指導者であり、大元帥である、而して此のキリストの上位即ち全部の最高至上位に神エホバ在し給ふ。神の組織制度の全軍の強大なる事は之に見ても察知する事が出来る。決定されなければならぬ重大問題は、「誰が全能の神か」と云ふ點である。之を決定すべき日は今正に迫つてゐる、而して此の知識の或るものを興へられて、神の御言に信仰を有する者は預言者の示せる言によつて其の結果を早く知る事が出来るのである。

第十章 戦 争

エホバは戦闘を開始し給ふ、何故なれば之はエホバ御自身の戦ひであるからである。之は集合せる諸國に對する神の聖怒の顯現である、(イザヤ書卅四章一、二節)。預言の示す處によるとエホバの偉大なる代理執行者イエス・キリストは白馬に乗りて「彼は義を以て審判と戦争をなせり」(黙示録第十九章十一節)とある。「白馬」は今正に開始されんとする義の戦争を表象す。彼の頭上に在る多くの冕は彼が全權能を帯びてゐる事を表象す。其處は審判の大なる谷である。集合せる諸國は戦備を整へて全能の神の審判を待つ。其處は屠殺の谷である、何故なれば其處でサタン組織制度が全滅するからである。エホバは其の預言者を通じて、敵の組織制度に就て斯く示し置かる、「バビロンよ、我汝を捕る爲に良を

置けり。汝は擄へらるれども知らず、汝エホバに敵せしにより尋ねられて獲へらるゝなり。エホバ庫を開きて其の怒りの武器を出し給ふ。これ主なる萬軍のエホバ、カルデア人の地に事をなさんとし給へばなり」(エレミヤ記五十五章廿四、廿五節)。「彼等の怒の燃ゆる時にわれ鑿を設けて彼等を酔はせ、彼等をして喜ばしめ、長き眠りに入りて目を覺ますことなからしめんとエホバ言ひ給ふ。我屠る羔羊の如く、又牡羊と牡山羊の如くに彼等を降らしめん。セシヤクは如何にして取られしや」(エレミヤ記五十一章卅九、四十一節)。

エホバは己が預言者の全部の眞實なるを立證されたが、此の立證方法は神の立て給ひし三種の方則によつた、即ち(第一)その預言者等がエホバの名によつて語る事、(第二)彼等はエホバに忠誠を持って語り、人々をエホバの方へ引きつけて其の聖名を崇めしむる事、(第三)其の預言者等の言ふ處は或る程度まで成就實現すると共に他の部分の成就する事も確實なるべき事の三種である。全能の神とサタン及び彼の組織制度との間に行はるゝ大戦即ち全地諸國の捲し込まれる大戦に關する預言の部分は今正に成就を見んとしてゐる。以上三種の方則によつて立證されたる之等の預言は眞實のものであつて、頓て其の成就實現を見るのである。

エホバは怒りの杯を溢れしめて之を諸國の民に飲ましめ給ふ、と預言者は告ぐ。之ぞ死の

飲物であつて諸國は之を飲ひ、又倒れて再び起たされ。視よ、われ我が名を以て稱へらるゝこの邑にすら禍害を降すなり。汝等いかで罰を免がるゝことを得んや。汝等は罰を免がれじ。そはわれ剣をよびて地に住めるすべての者を攻むべければなり、と萬軍のエホバ言ひ給ふ「(エシキヤ記廿五章廿七、廿九節)。然らば神は何故に斯かる禍害を全地の諸國諸民の上に降し給ふのか。エホバは其の理由を示し給ふ。

少數者が大なる富を得たりとて神は之が爲に大戦を到來せしめ給ふや。決して然らず。物質的の富そのものは別に神の罰を招くものに非ず。ソロモンも富んでゐた、(歴代志略下一章十二節)。シヤバチも又甚だ富んでゐた、(歴代志略下十七章五節)。ヒゼキヤも亦「富と貴きとを極め」てゐた、(歴代志略下章廿七節)。之等の者が富めりとの理由によつて神は別に彼等の何人をも罰しられなかつた。

然らば政治的權者が完全に民衆を支配しなかつたからとの理由の爲に此の大戦が到來せんとするのであるか。決して然らず。或る人々は支配者の位置に在ると雖も全人類が既に不完全なる者なる以上、彼等の何人も民衆を完全に支配する事の出來ざるは當然である。政治家の中には正直に己が最善を盡して善き政治を行はんと努力した者も多數ある。又政治に參與

する富者の中には己が富を善き事の爲に用ひた者も多數にある。

然らば何故に此の次ぎの大戦は地上諸國諸民の上に臨まんとするのか。何故なれば人々が神エホバを離れて悪魔を崇拜する者となり、エホバの聖名が僞善者に悪用されたる結果として當然其の上に誹謗を到來せしめ、其の爲に多數の人々を神より離反せしめて、自らを害するの道に向はしめ、斯くて人々を悪魔と滅亡の道に進み入らしめたからである。而して此の状態に人々を邪導したる責任者は抑々何者なるか。

サタンは最初バビロンの國家制度を組織して悪魔の宗教を設立し、其の民衆をしてサタン自身を崇拜せしめて、神エホバの聖名を誹謗汚濁せしめた。然る後に彼サタンは世界強國なる埃及を組織し、商業と武力を正面に押し立て、悪魔の宗教を國民に信奉せしめ、之によつて神エホバの上に誹謗を來らしめた。其の後彼は又アツスリヤを組織し、政治家を正面に押し立て、商業權者に之を支持せしめ、悪魔の宗教を使用して人々を神エホバより離反せしめた。爾後興つた世界強國の全部に彼は悪魔の宗教を滿たし、譏詐と欺瞞とを用ひてエホバの聖名を誹謗し、斯くして其の民衆をエホバより離反せしめたのである。

キリスト教會が最初に組織されたる當時に於ては之は純潔なるものであつたが、漸次成長するに従ひ、サタンは此の世の商業權者と政治權者を集めて之を組織し、之の上に名目のみ

のキリスト教名義を採用して、キリスト教として知られたる組織制度を腐敗墮落せしめてそれを悪魔の宗教としたのである。然し之は別にサタンが眞のクリスチャンを腐敗せしめたと云ふ譯ではなくして、唯教會と呼ぶ制度を腐敗して之を己が組織制度の一部たらしめて其の上に「クリスチャン」の名稱を與へたのである。此の故にバビロンは悪魔の組織制度であつて「地の淫婦等の母」であり、地上諸國の主權者と大資本家は皆此の大淫婦と姦淫を行ふに至つた。此の理由により政治、商業、宗教の三支配者を以て合成されてゐる此の世の諸強國は神エホバの聖名の上に侮辱と誹謗を到來せしめたのである。偉大なる富を吸収した商業的巨人と、光榮と權力を把握した大政治家及び主權者等はサタンの惡しき宗教制度の中に受け容れられて、悪魔の網の中に捕へとれ、バビロンの一部とされた。

神は初めの三大世界強國の名と歴史とを記録せしめて末の日に立つ者をして之等の諸國が如何にして悪魔を代表してゐるか云ふ事實を示された。埃及は商業と武力とを中心にした悪魔の組織制度の一であり、アツスリヤは政治權者を中心となしたる悪魔の組織制度の一名稱であり、又バビロンは宗教を中心としたる悪魔の組織制度の一名稱であつた。之等の諸強國は合して悪魔の組織制度を形成し、其の諸惡の特質は國際聯盟や國際裁判所及び幾多の平和條約等の中に抱合され、斯くして敵なるサタンの兇惡は之等のものゝ中にて其の頂點に達した。

したのである。地上の諸民諸國の多數は此の悪魔の組織制度の中に引き摺り込まれ、喜んで其れを支持してゐる。商業權者と政治權者の何れもは其の爲せし事に對してエホバの御前に各人が責任を有たなければならぬは無論であるが、其の中でエホバの御前に於て特に重い責任を有し、又最も峻厳なる刑罰を受ける者は宗教的指導者なる牧師、神學者等の教職者と其の「群の長たち」である。

エホバは其の御言の中に明示して、埃及やアツスリヤの民衆は救はれて回復さるべしと告げて置かれる、(イザヤ書十九章廿三節)。然しバビロンは荒廢して最早再び起きる事斷じてあらざるべしとは聖書の固く示す所である。悪魔によつて形造られ、彼の代理者なる教職者によつて運用さるゝ宗教は神エホバを誹謗し、一般の民衆を自ら滅亡の道に進ましむる目的の爲に成立してゐるのである。此の點に於て恕すべき所は絶無にして、バビロンの上に臨む最後の審判に於ては決して情狀を酌量されざる事となつてゐる。神は其の預言者を通じて、何故に最後の大戰を全世界の上に臨ましめられるかに就ての三理由を示して置かれる、

「視よ、エホバは地を空しからしめ、荒れ廢れしめ、之を覆して其の民を散らし給ふ。民(第一に)律法に反き、(第二に)法を犯し、(第三に)永遠の契約を破りたるが故に地は其の下に汚されたり」(イザヤ書廿四章一、五節)。

エホバの律法は行為の元則であつて、人間の福利の爲に制定されたものである。エホバは偉大なる生命の授與者に在す。而して如何なる人もエホバを知らず、又之に服従することなくして永遠の生命を得る事は出来ぬ。故に人間の利益となる爲に神は此の律法を制定された。(第二二)「汝我が面の前に我の外何物をも神とすべからず」(出埃及記廿三章三節)。(第二二)「汝自己の爲に何の偶像をも彫むべからず。又上は天に在る者、下は地に在る者、並びに地の下の水の中にある者の何の形状をも作るべからず」(第四節)。(第二三)「之を拜むべからず、之に事ふべからず」(第五節)。

地上に在る諸國諸民は何れも以上の明文に相反したる諸宗教を行つてゐるが、就中最も偽善的にして兇惡なる違犯者は所謂「キリスト教會制度」の上に建てられてある所謂「キリスト國」である。何故なれば此の宗教は神エホバと其の子イエス・キリストの聖名を詐稱して行はれる惡むべき偽善の邪宗教であるからである。偽善はエホバの御前に憎まる。國際聯盟を形成する諸國の多數は所謂「キリスト國」に屬するものであつて、クリスチャンと偽稱してゐるが、彼等は冒濫不遜にも國際聯盟を以て地上に於ける神の國の顯現であると偽稱してゐる。惡魔の宗教はかの「殘暴惡むべき者」である。カトリックとプロテスタント各派とは共に手を携へて「聖所に立ち」、地上に於て神を代表すると自稱してゐる。カトリック教會の首位者な

る羅馬法王は自らを以てキリストと其の天國に對する特殊代表者なりとし、現在に於ける此の世の惡しき諸國が即ちキリストの王國であると詐稱してゐる。カトリックとプロテスタント各派は共にキリストの名を詐稱して「キリスト國」と名乗り、一致聯合して國際聯盟を採用し、之を援助支持して此の制度は神の國の地上に於ける政治的顯現であると稱してゐるが、之ぞ明かに以上神の律法の明文を破つてゐるものである。(マタイ傳廿四章十五節)。

更に理由の「法を犯し」とあるが、此の法とは「誠命」を意味す。此の「法」の字が單數の ordinance となつてゐる事は注意すべきであつて、之は即ち誠命の首位を指してゐるのである。神の誠命の首位は何であるかとの質問に答へてイエスは斯く示された。「汝心を盡し、精神を盡し、意を盡して主なる汝の神を愛すべし。之第一にして大なる誠命なり」(マタイ傳廿二章卅七、卅八節)。

此の世の宗教制度の全部は此の大なる誠命を變更して了つた。所謂「キリスト教會制度」に於て特に然りである。彼等は此の大なる誠命を變へて一人の人間の前に頭を下げてゐるのである。即ちカトリック教會の法王の如き其の好適例の一である。その外彼等は此の大なる誠命を棄て、其の教會制度内の事物や人物を崇拜せしめてゐる。心直き人々よ、汝等は所謂「キリスト教會制度」の宗教的指導者等が全く己を神エホバに歸服してゐるか否かの事實に就

て自ら判断して見られよ。若し彼等指導者等が全く神エホバに服従してゐないとするならば之即ち彼等が此の大なる誠命を變へてゐる證據である。若し彼等が眞に神を愛し、全く神に歸服してゐるならば彼等は當然此の誠命を守り、神エホバが其の愛子イエス・キリストの血及び御國を通じて人類を贖ひ出さるゝ御目的と、此の御國が此の地上に建設さるゝ時に、神の律法に服従する人々には永久の生命を受くるに必要なる好機會が必ず與へられる事を一般民衆に語り告ぐべきである。

彼等教職者は此の事を爲す替りに、却て聖書を排棄して、人類の創造と其の墮落及びイエス・キリストの血による贖ひの眞理を否定するのである。彼等教職者は惡魔の教理なる「三位一體」の邪説を人々に教へて、イエスと「聖靈の神」なる者と神エホバは同一、同等、同格なるものとなし、以て神エホバと主イエスに對する正當なる愛を示すに全く失敗してゐる。彼等教職者は此の世の政治騒ぎに公然と參與し、僞善的態度をもつて人々に告げ、現在此の世の諸強國はキリストの支配下に屬するが故に人々に平和と幸福と健康を與へて此の地上を必ず住みよき場所となすべしと教へてゐるのである。斯く彼等教職者はキリストの名を詐稱したる一邪惡宗教を行つて、人々を神エホバより離反せしめ、民衆をして神を愛せしむる代りに却て嫌惡せしむる事に努力しつゝあるのである。彼等教職者は人々に告げて、エホバは、

其の教會制度の會員となつて其の制度の中に忠實に止つてゐる者以外の全部の者を永久に苦め惱ます爲に地獄の盡きざる火を備へて置く所の惡鬼羅刹であるかの如きに教へてゐる。若し彼等教職者が眞に神を愛するならば斯かる嘘説を以て愛と義に在す神の聖名を汚濁せざる筈である。

大戦の臨む第三の理由として「永遠の契約を破り」と示されてゐる。エデンの悲劇以後聖書中に現はれてゐる最初の契約はノアとの間に結ばれたる所のそれである。ノアが方舟より出て來た時に神はノアに向つて彼の生命を支ふる爲に必要なるものを與へんと約し、食糧とする爲には他の生物の生命を取るも差し支へなしと示されたが、但し生きてゐる儘、即ち血のままには之を食ふべからずと誡められた。其の時エホバはノアとの間に永遠の契約を立てられたのである。而して其の契約中には人命の貴重なる事が特に力説されてゐた。神はノアに向て示された、「汝等の生命の血を流すをば我必ず對さん。獸これを爲すも、人これを爲すも我討さん。凡そ人の兄弟、人の生命を取らば我討すべし。凡そ人の血を流す者は人其の血を流さん。そは神の像の如くに人を造りたればなり」(創世記九章五、六節)。

之ぞ即ち預言者によつて示されたる處の「永遠の契約」である、何故なれば神が自らさう命名されたからである。同時に神は約束して、地上の全生物を滅ぼす大洪水は最早二度とあら

ざる旨を示された。然し此の永遠の契約の重要な部分には即ち人命の貴重なるを示す處にある。神は天に虹を顯はして此の契約を記念する後となし給ふ。又斯く示された「虹雲の中にあらん。我これを見て神と地にあるすべて肉なる諸々の生物との間なる永遠の契約を記念せん」(創世記九章十六節)。

此の契約の條件は單に洪水によつて世が滅ぼされると云ふ問題のみに盡きてゐるのではない。若し神が洪水を以て全地の人類を滅ぼす事を罷めらるゝにしても、神には他の方法によつて之を爲す事が極めて容易である。此の契約に關する聖書の全部の明示する處は即ち、神が其の權能を授けられし者以外の者が他の人命を取る事は絶対に不可なるを教ふるにある。此の律法に對する理由は即ち其の生命である。エホバは偉大なる生命の授與者に在す。故に何人も他の人命を奪ふ事は許されないのである。人間は他に生命を與ふる事は出来ぬ、故に自己が與ふる事能はざる生命を他より奪ふ事の不可なるは當然である。神はイスラエル人に律法を與へられた時に、生命の貴重なるを特に力説して彼等に斯く示された、「汝殺す勿れ」と。生命を與ふる者は神エホバに在すが故に、之を取り去る權能の唯一所有者も又神エホバに在す、(ローマ一章廿一節)。而して神は此の權能を他の者に委任する事を得給ふ。其の一實例として神はイスラエル人に對して、其の敵を撃滅するの權能を許された。亦エホバは

此の刑罰執行の全權能を愛子イエス・キリストに委任されたが、イエスは今正に來らんとする大戦即ち大艱難時に於て此の權能を行使さるゝのである。

地上諸國は皆此の永遠の契約を破つた。彼等の多数は之を無意識でなしたかも知れぬ、然し此の契約を破つたと云ふ事實を拒絶する事は不可能である。神の律法を知ると自ら稱する者が人々に向つて神の律法と眞理を告げ知らす事は彼等の有する責務である。牧師や神學者が戰爭を聖化し、人々をして他を殺害するはクリスタヤンとしての彼等の義務であると信ぜしめた事は一般既知の事實である。人々よ、彼等教職者が戰爭を是なるものとして此の行動を執れる事に何等恕すべき點ありや否やを宜しく自ら判別せよ。

一九一四年(大正三年)より一九一八年(大正七年)迄の世界大戦に際し、獨逸と其の同盟諸國の教職者の多数は人間殺戮の軍隊を祝賀し、其の敵となる人間の一人をも多くキリストの名によつて殺害し來れと慫慂したのである。一方又英國と其の聯合諸國の教職者たちも熱心に己が味方を援助支持し、其の後方と戦線との何處を問はずして人々に「説教」し、青年たちが敵なる曰と等しき人間の一人をも多くキリストの名によつて殺害し來るは之れクリスタヤンとして神より受けたる嚴肅なる責務であり、特權であると主張力説したのである。神エホバの側に立ち、互ひに殺すなかれと人々に教へたと自ら證明し得る教職者は今日地上に皆無

である。民衆は之に對する生ける證人であつて、地上諸國、特に「キリスト國」と名乗る諸國が永遠の契約を破つた事實を明白に立證し得るものであるが、之ぞ即ち神が義の審判として全地上諸國の上に最後の大戰を到來せしめらるゝ確實なる一理由である。「凡そ人の血を流す者は人其の血を流さん」人々を煽動して彼等を戦線に遣り、人間殺戮の悪行爲を懲愆したる教職者も、又殺戮の實行爲に當りたる者も其の罪科に於ては同一である。此の理由に基いて神は全地諸國、特に「キリスト國」を名乗る諸國の上に刑罰を執行するものであつて、「人なるキリスト・イエス」は此の神の刑罰を執行する代理執行者たるべしと告げ示されてゐる。

神エホバは此の刑罰執行の爲に諸國を集合せしめんと約束された、(セマニヤ書三章八節。エル書三章十一・十四節)。前の章で示したる此の大集合の行はれる審判の谷には傲慢、不遜、僞善、横柄なる教職者も立つ。之等の紳士諸君は自分等を他の人々より離れて識別せしむる爲に奇妙なる獨特の服装をしてゐる。神は集合せる諸國諸民に對して其の大戦開始の目的と理由とを預言者によつて示して置かれる。神は宗教的指導者と共に「群の長たち」に向つて斯う云はれる、「汝等は敬虔の外貌は裝ふてゐるが實はその徳を捨てゝゐる。汝等は其の口唇を以て神に接近してゐるが、其の心は遙かに神より離れ遠ざかつてゐる。故に汝等は僞善者である」と。(テモテ使徒三章五節。イザヤ書廿九章十三節。マタイ傳廿三章十三・卅二節)。

而して後、イエスは之等の者に向ひ特に示して斯う云はれた、「蛇、蝮の類よ、汝等いかで地獄(ゲヘナ)……第二の死即ち永久の滅亡を意味す)の刑罰を免がれんや……それは義なるアベルの血より、殿と祭の壇の間に汝等が殺し、ペラキヤの子ザカリヤの血に至るまで地に流したる義人の血は凡て汝等に報ひ來らんが爲なり」(マタイ傳廿三章卅二・卅六節)。神エホバは地上の商業權者と政治權者に向つて彼等が永遠の契約を犯して爲せる流血の悪行爲の事實を示して後、教職者即ち宗教的指導者に向つて特に斯く告げられた、「また汝の裾に辜なき貧しき者の生命の血あり。我盜者の穿ちたる所にて之を見ずして、凡て之等の上にこれを見る」(エレミヤ記二章卅四節)。

此處にある「辜なき者の生命の血」とは即ち神エホバを忠實に代表せる事によつて殺されたる多くの者の生命を含んでゐる。「我この婦(メビロン)の聖徒の血に酔ひ、イエスの證を作し者どもの血に酔ひたるを見たり。我この婦を見て大に驚き異めり」(黙示録十七章六節)。「預言者、聖徒及び地に在りて殺されたる者の血は此の邑に見えたり」(黙示録十八章廿四節)。審判の谷に集合せる惡魔の組織制度の全部に向つてエホバは埃及の名稱を用ひて斯く最後の宣告を與へ給ふ、「主エホバ斯く言ひ給ふ。埃及の王パロよ、視よ、われ汝の敵となる。汝その河に臥す處の龍(……は麒麟)よ、汝云ふ、河は我の所有なり。我自己の爲にこれを造れ

りと。……汝及び汝の隣に附ける諸々の魚を汝の河より曳き出し、汝と汝の河の諸々の魚を荒野に投げ捨てん……我汝を地の獣と天空の鳥の餌に與へん……是の故に我れ汝と汝の河々を罰し……盡く荒して空曠しくせん」(エゼキエル書廿九章三―五、十節)。

神は又示し給ふ、「エホバは速き雲に乗りて埃及に來り給ふ。埃及の偶像は其の御前に慄ひ戦き、埃及人の心は其の裏にて消え行かん。我は埃及人をたけび勇ましめて埃及人を攻めしめん。斯くて彼等各其の兄弟を攻め、各々その隣を攻め、邑は邑を攻め、國は國を攻むべし」(イザヤ書十九章一、二節)。

神はアツスリヤに依て表象さるゝサタンの組織制度に向つて最後の宣告を與へて斯く宣ふ、「禍ひなるかな、血を流す邑、その中には至き詭譎及び暴行満ち、掠め取る事息まず。萬軍のエホバ言ひ給ふ、視よ、我汝に臨む。我汝の裳裾を掲げて面の上にて及ぼし、汝の陰所を諸民に示し、汝の耻づる處を諸國に示すべし。凡て汝を見る者は皆汝を避けて走り去りニネベは滅びたりと云はん。誰か汝の爲に哀かんや。何處よりして我汝を弔ふ者を尋ね得んや」(ナホム書三章一、五、七節。ミカ書五章六節)。

神の大預言者イエスはサタンを以て「彼は始めより人を殺す者なり」と聲明してゐられるが、サタンの組織制度も矢張り之と同様の道を歩んだのである、(ヨハネ傳八章四十二―四十四

節)。サタンの組織制度は残忍粗暴、傲慢不遜なる人々で充ちてゐるが、其の前方の席を傲然と占むる者は即ち宗教的指導者等である。各國の大美術館に掛けられたる油繪肖像は此の事實に對する沈黙の證人である。世界の歴史は之等の人々が如何に残忍暴戾であつたかを明瞭に立證してゐる。其の一實例として見るにジョン・カルピン(Presbyterian) 即ち長老派の團(祖)は大宗教家として有名であつたが、彼は同僚セルヰタスがカルピンと聖書の見解を異にするとの理由によつてセルヰタスを斷罪し、其の死刑執行狀に署名して彼を生きたら火刑にかけて焼き殺して了つた。猶ほ此の外にも宗教的指導者の手によつて生き乍ら焼き殺されたり、其の外虐殺されたる殉教者の數は世界に亘つて甚だ多いのである。

神はバビロンによつて表象されてゐる悪魔の組織制度に對して最後の宣告を下して斯く宣ふ、「そは彼(バビロン)はイスラエルの聖者なるエホバに向ひて驕りたればなり。主なる萬軍のエホバ言ひ給ふ、驕傲者よ、視よ、我汝の敵となる。汝の日、我が汝を罰する時來れり。驕傲者は躓きて仆れん。之を扶け興す者なし。我火をその諸邑に燃やし、その四圍の者を焼き盡さん」(エゼキヤ記五十章廿九―卅二節)。然る後に神は此の悪魔の組織制度に向つて宣言し特にサタン自身に向つて示し給ふ、「多くの水の傍に在り、多くの財寶を有する者よ、汝の終末、汝の貪婪の限り來れり。エホバ言ひ給はく、全地を滅ぼしたる滅ぼす山よ、視よ、われ

汝の敵となる。われ手を汝の上に伸べて汝を巖より轉ばし、汝を燒山と爲べし」(エレミヤ記五十一章十三、廿五節)。サタンに向つて與へられたる此の宣告は即ち其の惡しき組織制度に對して與へられたるものである。エホバは其の預言者を通じて斯く示し給ふ、「我はベルをバビロンに罰し、其の呑みたる者を口より取り出さん。國々はまた川の如くに彼に來らじ。バビロンの石垣は倒れん」(エレミヤ記五十一章四十四節)。

今日地上の諸國、特に國際聯盟を形成しつゝある諸國の多くは自ら「キリスト國」を名乗り、クリスチャンと稱してゐるが、之ぞ即ち彼等は「主の名によつて互ひに呼び交はして」ゐるのである。神は惡魔の組織制度の見ゆる部分を形成する此の世の諸國と特に「キリスト國」と自稱しつゝある諸國に向ひ其の預言者を通じて斯く示し給ふ、「視よ、われ我が名を以て稱へらるゝ此の邑にすら災禍を降すなり。汝等如何で罰を免がるゝ事を得んや。汝等は罰を免れじ。そは我劍をよびて地に住めるすべての者を攻むべければなりと萬軍のエホバ言ひ給ふ。汝彼等に此の諸國の言を預言して言ふべし。エホバ、高き處より呼號り、其の聖き殿より聲を出し、己の住所に向ひて呼はり、地に住めるすべての者に向ひて葡萄を踏む者の如く咥ひ給はん。號叫地の極まで聞こゆ。そはエホバ列國と争ひ、萬民を審判き、惡人を劍に付せばなりとエホバ言ひ給へり。萬軍のエホバ斯く言ひ給ふ。視よ、災禍出で、國より國に

至らん。大なる暴風(戰爭)地の極より起るべし」(エレミヤ記廿五章廿九一卅二節)。

エホバは審判の谷に集合せる惡魔の組織制度に向つて特殊の宣告を降したる後に戦ひを開始し給ふ。エホバは其の大能の代理執行者たるキリスト・イエスに向ひ敵に對する攻撃を命じ給ふ、「エホバ命じ給へば暴風(戰爭)起りて其の浪を擧ぐ。彼等、天に昇り、また淵に降り、艱難によりて其の靈魂とけ去り、こなた彼方に傾き、酔ひたる者の如く踉蹌ひてなす所を知らず」(詩篇百七篇廿五―廿七節)。暴風又は旋風は戰爭を表象す。全能の神の大なる戦ひは今正に進行中であつて頓て其の終極に達せんとす。

神の預言者は此の大戦の進行と結果とを叙してゐる。之等預言者が神エホバに忠實なるを立證されてゐる以上、彼等の爲したる證言は絶対に重要なるものである。エホバはイエス・キリストの右腕を支へて戦ひに進ましめ給ふ。之に就て神の預言者は示す、「主(エホバ)は汝の右に在りて其の怒りの日に王等を撃ち給へり。主は諸々の國の中にて審判を行ひ給はん。此處にも彼處にも屍を充たしめ、寛濶なる地を統ふる首領を撃ち給へり」(詩篇百十篇五、六節)。

エホバはエホバのみが唯一の全能なる神に在す事を示す爲に其の御力を顯はし給ふ。「誰が

眞の神か」と云ふ問題を解決すべき時が到来するのである。「誰か其の憤恨に當る事を得ん。誰か其の燃ゆる忿恚に堪ふる事を得ん。其の震怒の注ぐ事火の如し。巖も之が爲に裂く。エホバは善なる者にして艱難の時の要害なり。彼は己に依り頼む者をよく知り給ふ。かれ漲る洪水を以て其の處を全く滅ぼし、己に敵する者を幽暗所に逐ひやり給はん」(ナホキ書一章六―八節)。「我人々に艱難を蒙らせて盲者の如くに惑ひ歩かしめん。彼等エホバに向ひて罪を犯したればなり。彼等の血は流されて塵の如くになり、彼等の肉は捨てられて糞土の如くなるべし。彼等の銀も金もエホバの烈しき怒の日には彼等を救ふ事能はず、全地そのねたみの火に吞まるべし。即ちエホバ、地の民を悉く滅ぼし給はん。其の事誠に速かなるべし」(セバニヤ書一章十七、十八節)。

エホバの大預言者イエス・キリストは示して、全能の神エホバの大なる戦ひの日は地上に於ける空前絶後の大艱難であると示して置かれた、(マタイ傳廿四章廿二節)。此の戦ひは悪魔の組織制度の正體を暴露して之を破却し、悪の行爲と行爲者の全部を一掃するものなるは預言者の示す處に見るも瞭かである、「その日、エホバの戮し給ふ者は地の此の極よりの極に及ばん。彼等は悲しまれず、集められず、葬られずして地の面に糞土とならん」(エレミヤ記廿五章卅三節)。

此の日は「牧者」たちの悲み歎く日であり、彼等の屠らるゝ日である。預言者は明示して云ふ「牧者よ、哭き叫べ。群の長等よ、汝等灰の中に轉ぶべし。そは汝等の屠らるゝ日満つればなり。我汝等を散らすべければ汝等は貴き器の如くに落つべし」(エレミヤ記廿五章卅四節)。貴き器が落ちて碎くる時にそれを所有せる者は苦み困却す。之ぞ誠に適當なる形容であつて、人々を永らくの間、救いて來た牧師や神學者等は斯くの如く落ちて碎け去る事となる。

悪魔の組織制度の上に更に臨む大災禍に就て神の預言者は續いて示す「牧者は避場なく、群の長等は逃ぐる處なし。牧者の呼號の聲と群の長等の哀哭聞ゆ、そはエホバ其の牧場(教會制度)を滅ぼし給へばなり。エホバの烈しき怒りによりて平安なる牧場は滅ぼさる」(エレミヤ記廿五章卅五―卅八節)。

バビロンによつて表象されたる悪魔の組織制度が陥落して荒廢するは預言者の示す通りである「大なるバビロンは倒れたり、倒れたり。且つ悪魔の住所、諸々の穢れたる靈の檻、諸々の穢れたる憎むべき鳥の檻となれり」(改譯黙示録十八章二節)。バビロンは最初から悪魔の組織制度であつて、諸々の汚れたる靈と協同してゐた。此の預言に見るもバビロン陥落の後に其の上に荒廢状態が臨む事が明示されてある。故に此の形容辭は神がそれを破却された後

の状態を示すのである。
 多数の善良なる男女がサタン及び彼の仲間の詭辯、欺瞞に乗つて永らくバビロンの中に封じ込められてゐた。バビロンの崩壊後、其處には最早男女の住む者なく、バビロンは唯憎むべき鳥類や、獸類の住所となる。バビロンは人々より忌み嫌はる。エホバの他の預言者は此の結論を斯く裏書してゐる。「すべての國の中にて美はしく、カルデヤ人が誇り、飾りとなせるバビロンは昔神に滅ぼされたるソドム、ゴモラの如くならん。此處に住む者永く絶え、世々に至るまで居る者なく、アラビヤ人も彼處に幕屋を張らず、牧人もまた彼處には其の群を伏さずする事なく、唯猛き獸彼處に伏し、吼ゆる者其の家に満ち、駝鳥かしこに住み、牡山羊かしこに躍らん。豺狼その城の中になき、野犬は榮華の宮に叫ばん。其の時の至るは近きにあり、其の日は延ぶることなかるべし」(イザヤ書十三章十九-廿二節)。「バビロンは頽墜となり、山犬の巢窟となり、詭異となり、嗤笑となり、人なき所とならん」(エレミヤ記五十一章七節)。此の故に惡魔の組織制度は完全に壊滅に歸すべく、斯くしてエホバが全能者に在してエホバ以外にはそれに比ふべき者の絶無なる事が明示されるのである。

エホバは其の御目的を示す爲に適當なる模圖を用ひ給ふ。イザヤ書六十三章にエホバの預

言者は斯かる模圖を示してゐる。此處に示されある所はイザヤ書六十二章十節にある大證言が神命によつて行はれた時より間もなき後に發生を見るのである。預言者は異象を得て、エドムとボズラに大屠殺を終り、其の衣を血に染めて凱旋し來る一人の者を見る。此の者こそ即ち「かれ血に染みたる衣を纏へり。彼の名は神の言と云ふ」(黙示録十九章十三節)とある者と同じなるは明かである。
 此の預言中に顯はれてゐる名稱の意義を先づ知る事は此の預言を諒解する上に必要なる事である。

「エドム」の名稱は神に反對する者を表象す、(オマテヤ書一節)。之は「エサウ」と同一の意味であつて、即ち宗教分子を中心とするサタンの組織制度を表象す。神の怒りは特にエドムに臨む、(エゼキエル書卅五章十五節)。之は黙示録十九章十九、廿節に示されある惡しき組織制度と同一のものである。

「ボズラ」はエドムの首都である。故にボズラは惡魔の組織制度の最も中心なる支配階級を表象す。此の支配階級は商業、政治、宗教の三權者を以て形成され、就中宗教分子は自ら神を代表すると稱してゐるが故に神の前に最も峻嚴なる刑罰を受くべきものである。「地酒醉」とはエホバが地の野葡萄を踏み碎く爲に用ひ給ふ道具即ち組織制度である。「地

の葡萄」は悪しき野葡萄である、(黙示録十四章十八、十九節。命はエレミヤ記二章廿一、廿二節を見よ)。之は地の葡萄即ち地の果物を出だす。「地」とは悪魔の組織制度の肉眼に見ゆる部分である。「地の葡萄」は「眞の葡萄の樹」とは正反對であつて悪魔の組織制度の幹部である。此の預言は對話を以て始まり、最初の話者は預言者であつて、第二の話者は神エホバの代理執行者として敵を撃滅する權威者イエス・キリストである、(イザヤ書六十三章一―六節)。

最初の問は先づ斯く發せらる、「このエドムより來り紅き衣を着てボズラより來る者は誰ぞ。その服飾はなやかに、大なる能をもて殿めしく歩み來る者は誰ぞ」

第二の話者は答ふ、「之は義を以て語り、大いに救ひを施す(全人類の救ひ主なる)我(エホバの代理執行者にして大預言者なるキリスト・イエス)なり」

第一の話者は云ふ、「汝の服飾は何故に赤く、汝の衣は何故に酒酔を踏む者と等しきや」

第二の話者は答ふ、「我は獨りにて酒酔を踏めり。諸々の民の中に我と共にする者なし。われ怒りによりて彼等を踏み、忿恚によりて彼等を踏み踏りたれば、彼等の血は我が衣に濃き、我が服飾を悉く汚したり。それは刑罰の日我が心の中に在り、教團の歳既に來れり。われ見て扶くる者なく、さそふる者なきを奇めり。この故に我が臂われを救ひ、我が憤怒われを支へたり。我は怒りによりて諸々の民を踏み抑へ、忿恚によりて彼等を醉はしめ、彼等の血

を地に流れしめたり」(イザヤ書六十三章三一―六節)。

「酒酔」はエホバが「地の葡萄」を粉碎するに用ひ給ふ器なるが故に、之は即ちサタンの組織制度を撃却する爲にエホバによつて使用される神の組織制度を表象す。大預言者キリスト・イエスは此の神の組織制度の首位者として戰闘を指揮し給ふ、「天使その鎌を地に入れ、地の葡萄を刈り集めて神の怒りの大なる酒酔に投げ入れたる」(黙示録十四章十九節)。「彼はまた全能の神の甚しき怒りの酒酔を踏む」(黙示録十九章十五節)。

神エホバの偉大なる代理執行者キリスト・イエスが其の行動を開始して敵なるサタンの組織制度を粉碎する豫定の時は遂に到來した。主イエスは云ひ給ふ、「我見て扶くる者なく、さそふる者なきを奇めり」。之は實際の攻撃が未だ開始を見ざる以前の事である。即ち此の世のキリスト教會制度中にエホバの側に立つ者なく、其の全部がサタンの組織制度の側に屬してゐる事を示す更に有力なる證據である。一九一四年(大正三年)の世界大戰は此の事實を明確に立證した。キリスト教を名乗る宗教分子は永遠の契約に背反逆行して、戰時に流血の悪行爲を擁護した。一九一八年に所謂「キリスト教」の座なる英國倫敦に於ける宗教指導者の少數は彼等の信仰を告白して、戰爭其の他の事實に基き、神の國は近づいたと聲明した。此の告白は「キリスト國」の教職者の全部によつて拒絕され、斯くて「キリスト教會制度」は一九一

九年一月、公然と國際聯盟を承認して之は神の國の地上に於ける政治的顯現なりと聲明した。所謂「キリスト教會制度」は公然とサタンの側に立つたのである。大預言者キリスト・イエスは戦ひに行き、凱旋の途上にて示し給ふ、「我は獨りにて酒酔を踏めり。諸々の民の中に我と共にする者なし」。之は天使を意味するものに非ざるは無論であつて、又キリストの體の成員をも意味してゐない、何故なれば體の成員はキリストの一部となつてゐるからである、(詩篇六十九篇五節)。又他の預言者は示してキリストの體の成員はその怒の日に於て自發的に己を獻げると告げてゐる、(詩篇百十篇三節。尙ほ黙示録十九章十四節を見よ)。故に以上の言は「キリスト教會制度」中には此の戦ひに於て主の味方になる者が皆無であると云ふを示してゐる事が瞭かである。唯「遺殘者」を形成する者即ちキリストの體の成員たる者のみが主イエスと共に在り、戰爭が進行中エホバを讃頌する事となるのである。

大戰はサタンの組織制度の全滅を以て終了す。サタンの組織制度の見ゆる部分は「獸」を以て象徴され、政治、商業、宗教の三權者を以て形成される。而して宗教權者は特に「偽預言者」の名稱を以て呼ばれる、(黙示録十九章十九、廿節)。神は示して惡魔を「底なき坑に投げ入れ、閉ぢ込めて其の上に封をなし、千年過ぐるまで諸國の民を惑はす事なからしむ」(黙示録廿章一―三節)と告げ給ふ。斯くしてサタンの惡しき組織制度は壊滅して最早再び起る事なきに至るのである。

此の大戦に際して忠信なる「遺殘者」級の受け持つ部署は神エホバの聖名を讃頌する事である、(マテオ福音書二章九、十節)。彼等は此の任務に服するに當りてエホバを絶対信頼し、神の聖名と其の御目的とを人々の前に勇敢に語り告げるのである。彼等は神を愛するが故に之を爲す、而してエホバは「其の日」彼等の爲に「榮の冠」となり給ふ。此の戰爭は「遺殘者」の戦ひに非ずしてエホバ御自身の戦ひである。そして遺殘者は神エホバの證者として神と其の御目的に就て人々に宣明するのである、(イザヤ書廿八章五、六節。ヨハネ第一書四章十七、十八節。歴代志略下廿章十五―廿二節)。

此の大戦に於て多數の人々が殺戮される事は預言者の言に見るも確實である、「其の日、エホバの戮し給ふ者は地の此の極より地のかの極に及ばん。彼等は哀まれず、集められず、葬られずして地の面に糞土とならん」(エレミヤ記廿五章卅三節)。之ぞ全地に對する空前絶後の大艱難である、(マメイ傳廿四章廿一、廿二節)。又多數の人々が此の空前絶後の大艱難を通じて救ひ出され、主に服従して生命を受くるの機會を授けられるに至るべきは亦聖書の明示する處である、「弱き人を顧みる者は幸福なり。エホバは斯かる者を禍害の日に援け給はん。エホバは之を護り、之を存へしめ給はん。彼はこの地にありて福祉を得ん。汝彼を其の仇の望

に任せて付し給ふ勿れ」(詩篇四十一篇一、二節)。
 今日地上に住みて自らはサタンの組織制度には直接屬せずとも、尙ほ其の支配下に在る多數の人々に力を附けん爲に、神エホバは彼等に示して、彼等が大戦の開始されざる以前に於て先づ謙遜と義を求めよと勸告し、其れを爲す者に約束して斯く宣ふ、「其の日は穢批の如く過ぎ去る。然ば詔言の未だ行はれざる先、エホバの烈しき怒の未だ汝等に臨まさる先、エホバの忿恚の日の未だ汝等に来らざる先に自ら省みるべし。すべてエホバの律法を行ふ此の地の謙遜る者よ、汝等エホバの公義を求め、謙遜を求めよ、さすれば汝等はエホバの忿恚の日に或ひは隠さるゝ事あらん」(セカリヤ書二章二、三節)。
 人々が此の眞理を知る事は彼等にとつて今最も重要な事である。此の眞理を人々に語り告ぐる責務と特權は今、神の「遺殘者」の肩の上に置かる。而して此の小さき一團の人々は今より後、神の證者として忠實に其の任務に服するのである。此の故に眞に神を愛する者は皆「汝等をして召して幽暗より出し、其の異なる光に入れ給ひし者」エホバの徳を顯はすべく各自その最善を爲すべきである。此の仕事は最も大なる反對を前にして行はる。エホバの爲し給ひつゝある事と其の御目的とを宣明する事によつて人々は現在地上に於ける出來事の理由と意味を諒解し、又頓て來らんとする事と、其の結果を悟り知るに至るのである。

第十一章 平

和

エホバは全ての事の爲に其の豫定の時を有し給ふ。而して其の預言者を通じて斯く示される「戦ふに時あり、和ぐに時あり」(傳道書三章八節)と。全地に空前絶後の大戦が迫つてゐる事は前章に於て立證したる通りである。之は全能の神の大なる戦ひであつて之に敵對し得る者は絶無である。エホバは其の預言者を通じて、大戦の終了後と永久の平和とに就て示し給ふ、「エホバは地の極までも戦闘を止めしめ、弓を折り、才を斷ち、戦車を火にて燒き給ふ」(詩篇四十六篇九節)。「我はエンライムより戦車を絶ち、エルサレムより馬を絶たん。戦争弓も絶たるべし。彼は國々の民に平和を諭さん。其の政治は海より海に及び、河より地の極に及ぶべし」(セカリヤ書九章十節)。サタンの惡しき組織制度の存續する限り其處に永久の平和

なきは明かである。エホバの大戦の眞の目的は悪魔の組織制度を撃滅する事によつて全地を潔めんが爲である。然る後に平和と義は河の水の如くに人々に注ぎて彼等を喜ばしむ。

此の大危機の到来をサタンは今や必死となりて各種の欺瞞方法により人々を惑はし、彼等をエホバより離れ遠ざからしめんと努む。今は偽物の平和が行はれてゐる時である。正直なる人々が眞理を求めてゐる事をサタンはよく知つてゐる。政治家は常に民意を尊重して之を實行せんと願つてゐる様子を装つてゐる。政治権者の多数にしても、又暴利資本家すらも平和を願ひ求めてゐることは事實である。然し彼等はエホバと其の御目的とを知らざるが故にサタンによつて容易に欺かれるのである。サタンは嘘言の父であり、殺人者であつて、彼が全地諸國の上に其の權威を揮ふ以上其處には平和が絶無である。

一九二八年(昭和三年)八月廿七日、全地十五ヶ國の全權は佛國の首都パリに會して所謂「不戦條約」なる一協約を制定した。日本と米國は當時其の平和條約に署名し、後に他の四十四ヶ國が同條約を承認した。

所謂「キリスト教會制度」に屬する教職者等は自ら先頭に立つて各國が同條約に批准する事を運動斡旋した。彼等教職者は人々に告げて、此の平和條約は眞にクリスチャン的協約であると示した。彼等は地上諸國の自稱クリスチャンの支持を此の條約の上に求めんが爲に之

をなしたのである。米國教會聯盟は一九二八年十一月十一日、米國上院議會に一書を送つて米國議會が同條約を批准せん事を要求勧告した。其の書面の一節に曰く「本年の降誕節の近づける今日此の頃、本條約は更に善き贈り物を米國に與ふるものなると共に、上院議會が早速一致して此の偉大なる方法を批准するは即ち米國を通じて全世界に更に善き贈り物を爲すに候はずや」と。

更に一九二八年十二月三日、ワシントン府に本部を有する全國戦争防止會より米國上院議會に送附した一書面に曰く「我等は米國上院が無條件にて本條約の批准を通過し、以て全世界に對する我等の降誕節贈物とされん事を要望致す者に御座候」と。

全米國の牧師等は本問題に就て其の講壇から盛んに宣傳運動し、此の條約が神とキリストの承認を得たるものなるかの如くに裝ふて之をキリストの名に結び附けたのである。之は多くの人々の心を捉へるに最も都合よき好餌であつて、彼等は米國上院議會が此の條約を批准するやう國民の代表者に勧告するはクリスチャンとしての彼等に與へられたる嚴肅なる責務であると考へたのである。

一九二九年(昭和四年)一月十五日、米國議會は所謂「キリスト教會制度」に屬する「貴人」等より更に他の一書を受け、同平和條約を批准する決議を通過し、而して其の二日後に國務

解は威儀を正して大統領の前に行き、議員列席の上にて其の裁可を得たのであつて、斯くして凜然たるお芝居の幕は閉ぢられ、人々はホット一息して歸途につき「之で戦争はお仕舞ひだ」と考へたのである。

然し同條約に賛成した議員は其の心の中にさうは考へて居なかつた。彼等は此の平和條約位で戦争を防止する事は出来ないとの意見を平氣で發表してゐる。彼等は斯摩紙片で戦争を防止する事は不可能なるを知つてゐた、而して僅か數日後に、同じ議會は米國未會有の海軍大擴張案を通過して戦備の充實を急いだ。

エホバはサタンが彼の代理者特に其の中の宗教分子を用ひて人々を欺き、永遠の平和に就て人々を邪導する事を豫知されてゐた。そしてその預言者を通じて斯く示し置かれた。「それ彼等は小さき者より大なる者に至るまで皆貪婪者なり。又預言者より祭司に至るまで皆詭語をなす者なればなり。彼等は淺く我が民の女の傷を醫し、平康からざる時に平康平康と言へり」(エゼキヤ記六章十三、十四節)。

普通思慮ある人々は皆諸國の全權が署名し、米國議會が批准した一片の紙切が戦争防止に絶對無能なるを熟知してゐる。全地諸國は其の小より大に至るまで他の者の上に自己の優勢を誇らんとする貪婪の念を中心にして行動してゐる。又牧師や司祭等の宗教的指導者等が欺

瞞と嘘偽を以て人々を扱つてゐる事が此の預言に明示されてゐる。彼等教職者は嚴肅振つた大聲を擧げて叫ぶ「平和、平和、平和、平和樹立の爲になせし我等の功蹟を見よ」と。而して神エホバは明かに示し給ふ「平和なし」と。

神はサタンの組織制度の全滅を豫定された、そして何者も之を阻止する事は不可能である。之等諸國の平和運動は皆サタンの欺騙方法なるは使徒パウロの明示する處に見るも明瞭であつて、パウロは今、我等がゐる處の此の主イエス再臨の時に就て斯く記す、「それは主の日の來ること、盜人の夜來るが如くなることを汝等詳かに知ればなり。人々、平和無事なり、と言はん時、滅亡忽ちに來らん。粧める婦に働勞の來る如くなるべし。人々絶えて避くることを得じ。然ど兄弟よ、汝等幽暗に居らざれば、其の日、盜賊の來る如く汝等に來ることなし」(テサロニケ前書五章二―四節)。

眞に神に己を献身してゐる者は永久の平和が如何にして來るか云ふ事と、其の平和は全能の神の大ひなる戦ひに於てサタンの組織制度が全部壊滅したる後に於て來る事をよく知つてゐる。總らゆる鳴物入りの空騒ぎも、傲慢に満ちたる會議や協商も、宣傳や決議、通過も平和を齎らすは絶對不可能である。彼等が聲を揃えて「平和無事」なりと叫ぶ時、彼等の上に「滅亡忽ちに來らん」と示されてゐる。

エホバは其の預言者を通じて更に示し、如何にして地上の諸國を集合し、「審判の谷」に於て彼等の上に如何なる義しき聖怒を注がれるかを告げ置かれた。然る後にエホバは示し給ふ、「其の時われ國々の民に清き口唇を興へ、彼等をして凡てエホバの名を呼ばしめ、心を合せて之に事へしめん」(ゼパニヤ書三章八、九節)。エホバは平和を來らしめ給ふ。そして其の平和は其の聖意に適ふ方法の下に來らしめられるのであつて、それがエホバによつて來るものなる以上、其の平和は永久に存続するのである。

悪しき組織制度が壊滅する迄は地上に眞の平和の來らざるは萬人の首肯する處である。不義が支配する世に強食弱肉の悪行爲の公行は當然である。一の強者興りて榮え、頓て衰ふると共に又他の強者の擡頭を見る。不法と争鬪、暴壓と殺人とは過去幾千年の永き間人類を支配してゐた、何故なれば悪しき者サタンが支配權を揮つてゐたからである。故に今、サタンよりも更に強き一個の偉大なる者出で來り、其の者は全能の神の指揮の下に完全に一致して行動し、喜んでエホバの神命に服従しなければならぬ。其の時に其の者は彼に來る者に向つて平和と義とを興ふる事が出来る。エホバは遙かの大昔に於て斯かる大能者の必ず出現すべきを預言して置かれた。其の者は人類に對する平和の授與者であり、和解の道であり、人類の贖ひ主でなければならぬ。

エホバは其の御旨を以て、愛子ロゴスが天界を離れて人間の子として地上に生れ出で、成人して後、人間に對する贖價を備ふる爲に死を苦み、然る後に全世界の大統治者となつて人間の間永久の平和を樹立せしむるの方法を立てられた。此の故にイエスは預言者の預言せる如くベテレヘムに生れた、(ヘカ書五章二節)。其の時エホバはその大能の天使をして天界より此の預言をなさしめられた、「われ萬民に開りたる大なる歡喜の音信を汝等に告ぐべし。それ今日ダビデの邑に於て汝等の爲に救ひ主生れ給へり。之主たるキリストなり」。此の告示の後、天使の全軍は神エホバ讚頌の歌を歌つた。之は人間の耳にも聞こえたが、此の歌は預言であつた、何故なればこれは人々の上に平和の來る事と、エホバが其の日ダビデの邑なるベテレヘムに於て生れたるイエス・キリストを通じて地上全人類に此の平和を來らしめられる事とを預言したからである。天使の全軍は歌ふ、「至高き所には榮光神に在れ、地には平安、人には恩澤あれ」(ルカ傳二章十一、十四節)。

此の偉大なる預言は必ず成就するのであつて、之は全能の神の大なる戦ひの結果として成就するのである。神は平和の爲に戦ひ給ふ。而して平和は必ず來るのであつて、エホバは此の仕事に愛子イエスを通じて爲し給ふ。光の衣の如くに平和は全地を包み、人類に對する恩澤は永久に確立されるのである。平和は此の方法以外には來らぬのである。エホバより先

走りなし、己が智能によつて平和を設立せんとする者はエホバの前に憎まるゝものである。

人の子イエスの誕生より遙か以前に神は其の預言者をしてイエスの誕生と、後にイエスの爲すべき事とを預言して置かれた。過去千幾百年の間人々は暗闇の中を歩み續けて來た、何故なれば「暗の権威」なるサタンが人々を盲まして邪導してゐたからである。(ヘブライ書二章二節。六章十二節)。ペテレヘムより偉大なる全地の救ひ主出て來り、大統領者として豫定の時至りて地上全人類を照すのである。(マテオ傳一章九節)。神の預言者は未來に就て預言し、何事が發生するかを豫告したが、我等は此の預言が部分的に成就したる事と、其の完成的成就が今我等の眼前に進行中なるを悟り知る。神は其の王キリストを王座に擁立し、全權能を其の手に委ねられたが、偉大なる平和の日は既に近づいてゐる。イエスを通じて人々に平和と光輝と祝福が齎らされる事は預言者を通じて示し置かれたる通りである。「幽暗をあゆめる民は大なる光を見、死の蔭の地に住める者の上に光出たり。獨りの嬰兒我等の爲に生れたり。我等は一人の子を興へられたり。政治は彼の肩に在り。其の名は奇妙、謙士、大能の神、永遠の父、平和の君と稱へられん。その政治と平和とは増し加はりて窮りなし。且ツダビデの位に坐りて其の國を治め、今より後、永遠に公平と正義とを以て之を立て、之を保ち給はん。

萬軍のエホバの熱心これを成し給ふべし(イザヤ書九章二、六、七節)。

キリスト・イエスは全地の正當なる王にして、義しき統治者に在し、義を以て支配さるゝのである。人々を彼は「謙士」(彌爾)と呼ぶ、何故なれば主イエスは彼等を義しき道に導き給ふからである。彼は父エホバより天地の全權を委ねられし故に「大能の神」である。又イエスは「永遠の父」である、何故なればエホバはイエスを通じて地上の人々に對し、恵みの賜物として生命を興へらるゝからである。(ローマ書六章廿三節)。イエスは「平和の君」である、何故なれば地上に永遠の平和を到來せしめらるゝからである。(ナホム書一章九節)。

人々は互ひに戦ひ合ふ事を學んだ、何故なれば彼等の心と精神の中には敵サタンによつて惡しき害心が満たされてゐたからである。キリストが全地に王たる時、地上人類は眞理を學びて、軍備を永久に撤廢し、其の軍器や武器を改作して、地上を耕作するの農具となすに至るのである。(イザヤ書二章二一四節。ミカ書四章一四節)。

然らば何故に地上諸國の支配者等は一方に於て軍備に熱中しつゝ、他方に於て戦争防止を爲し得たりと稱しつゝあるのか。何故に人々は人力によつて此の地上に永久の平和を確立せんとするが如き「虚しき事」を妄想してゐるのか。神の預言者は預言して、豫め今日の現狀に對する之等の質問に答へてゐる。此の預言的答はサタンの組織制度の見ゆる部分を構成

してゐる地上諸國の支配權者が集合して協議し、神エホバと其の受膏者に敵對する虚しき事を語り合つてゐる光景を述べてゐる、(詩篇二篇一、二節)。彼等はエホバを以て唯一の眞の神なりと受け容れる意志は毛頭も無いのである。彼等は平和の爲の協約や條約、聯盟を設ける事を自ら傲然と誇つてゐる、「惡しき人は誇り顔に云ふ、神は探り求むる事をせざるなりと。凡て其の意に神なしとせり」(詩篇十篇四節)。此の理由に基きて、エホバの代表者なる主イエス・キリストは敵なるサタンの組織制度を破却して、惡を行ふ者を一掃し、地上に義と平和を全く確立するものである、(詩篇二篇九節)。

地上人類の切なる望は平安と和合であつて、何等の恐怖なくして相共に住まはん事である。エホバは其の代理執行者キリストを通じて人類の切望する所を満足せしめ給ふ、「謙遜る者は地を嗣ぎ、また平安の豊なるを樂まん」(詩篇卅七篇十一節)。「彼の世に義しき者は榮え、平和は月の失するまで豊かならん」(詩篇七十二篇七節。イザヤ書卅二章十七、十八節)。

埃及人とアツスリヤ人

エホバは埃及人とアツスリヤ人の名を示して、平和の君なるキリストの義の統治期間を通じて彼等の上にも祝福が及ぶ事を告げて置かれる。然しエホバはバビロンに對して此の種の約束をされなかつた。此の點に就ては其處に理由がなければならぬ。人々が偉大なる富を集

積したり、軍備を大ひに整へたりする事は其の本來の目的が神エホバの聖名を汚漬せんが爲ではなかつた。唯彼等は其の行爲に冷酷残忍であつて、我利私慾の念に動かされたのである。彼等は權力と尊榮を得んとするの野心を有してゐた。彼等は惡魔の組織制度の宗教分子に捕へられて、偉大なる神エホバに關しては全く盲目となつて了つたのである。然し聖書は示して、彼等の盲目状態が取り除かるゝ時に彼等は眞の神を見るを得て其の心は柔かになると告げてゐる。牧師や神學者等によつて傳へられた神が眞のエホバ神にあらざるを學び知る時に、彼等の多數は更めて神エホバに其の心を歸順するのである。

アツスリヤの組織制度と其の歩みし道によつて預言的に示されたる此の世の主權者や政治家は其の歩みに於て常に我利と私慾によつて動かされてゐた。彼等の我利的慾望は他の人々の上に權力と尊榮とを得んとするにあつた。彼等は惡魔の宗教の擧となり、己が私慾を満足させる爲の便利を求めてその宗教制度に加入するに至つた。彼等は講社に参加すると同一の理由で教會制度に入會したのである。そして其の範圍から來る投票を期待してゐた。彼等は惡魔の宗教と其れを行ふ教職者の正體に就ては全く無知であつた。而して之等の政治家が今、キリスト教會の名義を詐稱して行はれてゐる惡魔の宗教の正體を悟り知ると共に、一方眞の神を知つて彼等の盲目状態が除き去られる時に彼等の多數は心の歡喜を以て神エホバに

率仕するに至るであらう。

然し悪魔の宗教、特にバビロンと名付けられたる悪魔の組織制度によつて代表されたる所のそれは常に神エホバの聖名の上に誹謗を到来せしめてゐた。之は組織的方法を以てエホバの聖名を汚濁し、人々を神より離反せしめてゐたのである。大戦の後間もなくして悪魔の宗教は、偽キリスト教會制度は元より佛教其他の全部は崩壊滅亡して最早起たざるに至る。斯くして暴逆不法の悪行爲は罷むべし。

悪魔の組織制度中商業と武力とを中心とする埃及の精神は武斷的征服の行爲を隆盛にした。人間は本能的に何者かを崇拜す。眞に崇拜すべき者は神エホバである。悪魔の宗教は人々を偶像崇拜に向け、悪鬼の靈と通信せしめて人々の心を眞理より盲ました。神はイスラエル人を埃及より救ひ出された時に斯う示された、「埃及の諸々の神に罰を蒙らせん、我はエホバなり」(出埃及記十二章十二節)。又全能の神の大戦に關して斯く示し給ふ、「埃及人の靈(靈魂)は悪魔即ち精神を意味す。失せて其の中むなしくならん。我その謀略を滅ぼすべし。彼は偶像及び呪文を唱ふるもの、巫女、魔術者に求むる事をせん」(イザヤ書十九章三節)。

武斷征服の精神の粉砕される時に、人々は巫女や悪鬼の靈に援けを求め事となるが之等も皆失敗に歸す。彼等は何れの點にも絶望の状態に陥る時に、始めて神に叫び求めるのであ

つて、即ち斯く記し置かる「斯くして困苦の中にてエホバに呼ばふ。エホバは之を艱難より携へ出で、狂風を鎮めて浪を靜謐になし給へ」(詩篇百七篇廿八、廿九節)。

エホバの預言者は「其の目」地上には太極的の證言が行はれて人々に神エホバを知らしむる事と、應げらるる者の叫びがエホバに聞き容れられる事を預言してゐる。「エホバは己を埃及に知らせ護る者を遣はしてこれを助け給はん」と。而して預言者は續く「エホバは己を埃及に知らせ給はん。其の日、埃及人はエホバを知り、犠牲と祭物とを以て之に事へん。誓願をエホバに立てて成し遂ぐべし。エホバは埃及を撃ち給はん。エホバは之を撃ち、これを醫し給ふ。此の故に彼等はエホバに歸らん。エホバは其の懇求を容れて之を醫し給はん」(イザヤ書十九章廿一、廿二節)。之即ち人々が己の益の爲にエホバに歸り、服従して祝福を受ける事を立證してゐるのである。

埃及人に關して記されたる事はアツスリヤ人にも等しく適用されるべきである。アツスリヤはサタンの地的組織制度中政治權者を中心としたるものを表象してゐた。エホバによつて建設される平和の政府は「平和の君」なるキリストイエスの支配下に運用されて、人々をエホバに歸順さする道を開く事となる。エホバは示して、其の時に大路が開かれんと預言して置かれた。即ち預言者は斯く記す「彼處に大路あり、其の路は聖き道と稱へられん。穢れたる者

は之を過ぐる事能はず。唯主の民の爲に備へらる。之を歩む者は愚なりとも迷ふ事なし」(イザヤ書卅五章八節)。此の預言は、神が如何にして人々の爲に大路を開き、人々をして全き信頼をもつて神に復歸せしむる道を教示されるかを美しく形容してゐる。而して其の時には最早何等の妨害邪魔する者なきに至る、何故なれば「彼處に獅子居らず、暴き獸も其の路にのほることなし。然ば其處にて遇ふ事なかるべし。唯贖はれたる者のみ其處を歩まん」(イザヤ書卅五章九節)。

偉大なる贖ひ主イエス・キリストは全人類の爲に贖價を備へられた。而して全人類はイエスを通じてエホバに復歸する事を得せしめらる。「エホバに贖ひ救はれし者歌うたひつゝ歸りてシオンに來り、其の首に永遠の歡喜を戴き、樂みを歡びとを得ん。而して悲哀と歎息とは逃げ去るべし」(イザヤ書卅五章十節)。

惡魔の組織制度中武力と商業とを中心とした部分を表象する埃及と、政治權者を中心とした部分を表象するアツスリヤの民衆の何れもが惡魔によつて欺かれ、惡魔の宗教によつて神より離反せしめられたると云ふ事を心に止めて置いて、而して神の預言者の此の言に聞く、「其の日、埃及よりアツスリヤに通ふ大路ありて、アツスリヤ人は埃及に來り、埃及人はアツスリヤに行き、埃及人とアツスリヤ人とは相共に(神エホバに)事ふることをせん」(イザヤ

書十九章廿三節)。其の時埃及人は甲冑を捨て、アツスリヤに行き、アツスリヤ人は武器を捨て、埃及に行き、斯くて相共に親み、睦み合ひて靈と眞理とをもてエホバに奉仕し、互ひに助け合ふ事となるのである。

埃及よりアツスリヤに通ずる以前の大路はカナンの土地を経なければならぬ事となつてゐたが、之は即ちイスラエル人が受けると同じ祝福を彼等アツスリヤ人も埃及人も受ける事を預言してゐたのであつて、即ち共に平和の君なるキリストを通じて祝福される事を示してゐる。「其の日、イスラエルは埃及とアツスリヤとを共にし、三つ相並び、地の上にて福祉を受ける者となるべし。萬軍のエホバ之を祝して言ひ給はく、我が民なる埃及、我が手の工なるアツスリヤ、我が産業なるイスラエルは幸福なるかな」(イザヤ書十九章廿四、廿五節)。

神エホバは示して、惡魔の宗教より脱して、エホバに來り、之に事ふる者に對しては、彼等を受け容るゝの道を開き、永久の幸福を以て彼等を祝福せんと告げられた。此の世の人々は皆惡しく、特に政治家や大資本家、武斷家は其の自ら歩みし道に見て甚だ惡しかりし事を證明してゐる。彼等の惡は彼等が惡魔の宗教と結び附いて神エホバの聖名の上に誹謗を到來せしめたる事が其の主なる理由となつてゐる。神の恵みによつて平和の君キリストが人々の

眼を開き給ふ時、彼等の多數が假令甚だしき罪を犯してゐたにしても尙ほ永久の生命と祝福とを受くる機会を與へらるゝのである。之に就て神は其の預言者を通じて斯く示し置き給ふ。「若し惡人その爲せる惡を離れて律法と公義を行はば其の靈魂を生かしむる事を得ん。彼若し視て、其の行ひし諸々の咎を離れれば必ず生きん、死なざるべし」(エゼキエル書第十八章廿七、廿八節)。其の時神は心の直き状態を示して神に來る者に愛と恵みを與へ給ふのである。若し大政治家や大資本家が眞理を學び知らされ、其の有する權力を行使して民衆を指導してエホバを崇拜せしめ、神に歸順せしめたならば甚だ善き結果を擧げ得たる筈である。然るに各派教會制度の教師や司祭等は之等の政治家や資本家を邪導して惡魔の宗教を行はしむるに至つた。エホバは人間が教會制度の偽善的教師に邪導されたる事實を知悉し、其の大なる憐憫を以て之等邪導されたる人々の前に眞理を學び知るの道を開き、彼等をしてエホバに歸順せしむるの機会を與へられた。此の故に今日人々に向つて神に關する眞理を語り告ぐる事は最も重大なるものとなつた。

教會制度の指導者等は眞理に反對す、何故なれば彼等はサタンの惡感化の下にあるからである。偽善なる教職者等は種々の欺瞞と譏詐を弄して政治權者や商業權者を邪導して、今日神の眞理を誠實に語り告ぐる者を以て善き政府に對する敵なりと思惟せしめ、之によつて眞

理を宣明する者の仕事を破壊せんと熱心に焦燥努力してゐる。然し彼等の反對も結局失敗となつた。神は其の眞理を人々に與へ始められた。而して如何なる權力も之を阻止し、妨害する事は絶對不可能である。

神の眞理を宣明する者は何人かを何かの制度や團體に引き入れんとする意志は毛頭無い。彼等の唯一の目的は神エホバと其の全人類祝福の御目的に關する事を人々に告げ知らせんと欲するのみである。エホバは斯く神を愛する者に向つて地上に此の證言をなすべきやう命じられた。エホバは今此の證言を行はしめて、所謂「キリスト教會」より偽善の假面を剝ぎ取り、其の他の惡魔の宗教の正體を曝露し、以て人々に眞理を學ばしめて、神の豊かなる祝福に與らしめんとされるのである。エホバは平和の君キリストの統治下に於て神に服従し其の聖名を崇むる多くの人々に之等の祝福を授け給ふ。

ダビデ王はパレスチナの土地からイスラエル人の敵を驅逐した。而して此の事實は王なるキリストが全地より敵なるサタンの組織制度を一掃するゝ事を預言してゐるのである。ダビデに續いて王となつたソロモンは其の統治期間を通じて、威嚴と智慧と平和とを以て有名であつた。此の事實は「ソロモンよりも大なる」王キリストの下に於ける榮えの統治を預言してゐるのである。此の大預言者イエス・キリストは御自身とその統治の事に就て語り、ソロモン

より大なるべしと示された。それと共にキリストの治下に於て埃及人やアツスリヤ人が復活するに至らんと告げ、又偽善なる宗教指導者は罪せられんと教へ示された。(ルカ傳十一章卅一、卅二節)。

ソロモンに就て斯く記さる、「エホバはイスラエルの目の前にてソロモンを甚だ大ならしめ、彼より前のイスラエルの王の未だ得たる事あらざる王威を之に賜へり」(歴代志略上廿九章廿五節)。ソロモンの名は「平和の者」と云ふを意味す。ソロモンの統治が平和と智慧と富と榮光とを以て有名であつたと云ふ事實は、之即ちソロモンよりも更に大なる平和の君キリストの統治が、ソロモンのそれよりも更に大なる平和、智慧、富、榮光を以て有名であると云ふ事を表象してゐるのである。

エホバはキリスト・イエスを以て首位者とする神の組織制度に就て斯く示し置かる、「エホバ斯く言ひ給ふ。視よ、われ河の如く彼に平康を興へ、漲ぎる流れの如く彼に諸々の國の榮を興へん。而して汝等は之を吸ひ、背に負はれ、膝に置かれて樂むべし」(イザヤ書六十六章十二節)。

諸國諸民が神と其の義と平和とを知るに至る時、彼等はシオンと呼ばれたる神の組織制度を求めて之に來る、「彼等は面をシオンに向けて其の路を問ひ、來れ、我等は永遠忘るゝ事な

き契約をもてエホバに連ならんと言ふべし」(エニヤ記五十五章五節)。其の時服従する者はキリストの子となる、何故なれば彼等は平和の君なるキリストを通じて生命の祝福を受けるからである。

人々よ、所謂「キリスト教會制度」によつて地上に救済と平和と繁榮を到來せしめんとするの妄想を捨てよ。而して自らサタンの悪しき組織制度より脱出して神エホバの側に固く立ち、己が全部を以てエホバに事へよ。其の時に何が起るかを預言者は告げて言ふ、「我が神エホバの語り給ふ事を聽かん。エホバは其の民と聖徒とに平和を語り給へばなり。されば彼等は愚なる行爲に再び歸る勿れ。實に其の救ひは神を畏るゝ者に近し。かくて榮光は我等の國に止まらん」。平和の君キリストの統治が全地に行はるゝ時正義を愛する者の云はんとする事を預言者は示して云ふ、「憐憫と眞實は偕に合ひ、義と平和とは互ひに接吻せり。眞理は地より生え、義は天より視下せり。エホバ善き物を興へ給へば我等の國は産出物を出さん。義はエホバの前に行き、エホバの行み給ふ跡を我に踏ましめん」(詩篇八十五篇八一十三節)。

人々が眞理を聞くべきエホバの豫定の時は今既に來た。此の眞理は神命に服し、己が全部を神に獻げてゐる少數者の手にて今全地に宣明されてゐる、何故なれば今が其の豫定の時であるからである。所謂「キリスト教會制度」は此の眞理に敵對す、何故なれば此の制度はサタ

ンの支配下にあるからである。人々は今、エホバが唯一の眞の神なる事、キリストは平和の君にして人類の贖ひ主であり、地上の正當なる支配者なる事を告げ知らされなければならぬのであつて、又今現に知らされつゝあるのである。神は人間の利益の爲に諸々の預言を顯示し給ひ、光輝はその上に日々増し加はりつゝあるのである。

地上の正當なる王キリストは既に其の權を執り給ふた。全能の神の大戦終結と共にキリストは地上全人類を照らして之に義の審判を與へ給ふ。其の時公平は荒野に住み、正義は善き田に居らん。斯くて正義のいさをは平和、正義の結ぶ果は永遠の平穩と平康なり。我が民は平和の家に居り、思ひ煩ひなき住所に居り、安らかなる休息所に居らん」(イザヤ書卅二章十六―十八節)。

第十二章 エホバの聖名

エホバの聖名は全被造物に對して最も重大なる問題である。神に絶對服從して全ての光榮と尊貴をエホバの聖名に歸して此の問題を解決しつゝある者は極めて少數である。永久の生命を愛好して之を望む者は皆斯くしなければならぬ。神はその組織制度の最高級に入れて神性の靈者たるの尊き位を與へんとする人々に關して其の預言者を通じて斯く示し置かる。「彼我が名を知るが故に我之れを高き處に置かん」(詩篇九十一篇十四節)。之等受膏者の希望成就の時迫る時に就て神の預言者は受膏者等の言を代り告げて云ふ、「其の日ユダの國(神の聖名を極力讃頌しつゝある者の状態)にてこの歌を歌はん。我等に堅固なる邑(組織制度)あり。神は救を以て其の垣、その藩となし給ふべし。汝等門を開きて忠信を守る義しき國民を入れよ」(イザ

ヤ書廿六章一、二節)。預言者イザヤはエホバに對する受膏者の言を預言して云ふ、「義しき者の道は直からざるなし。汝は義しき者の途を直く平らかにし給ふ」(イザヤ書廿六章七、八節)。
 エホバと其の組織制度にある受膏者たちとは互ひに愛し合ふ。彼等は總らゆる反對と戦ひて義の勝利と敵の組織制度の壊滅とを證言するのである。之に就て預言者は又言ふ「其の日エホバは硬く大なる強き劍(神の偉大なる代理執行者)をもて、疾く走る蛇レビヤタン、曲りうねる蛇レビヤタンを討し、また海(不動搖の世)にある龍(龍は誤譯)を殺し給ふべし。其の日斯く歌はん。美はしき葡萄園あり、之(シオン即ち神に祝福さるゝ組織制度)を歌へよ。我エホバ、之を護りて折々に水をよぎ、夜も晝も守りて害ふ者あらざらしめん」(イザヤ書廿七章一、三節)。斯くの如く預言者は「神の聖名を執り」て之を讃頌し、宣揚しつゝある者に就て語るのである。(使徒行傳十五章十四節。マテロ前書二章九、十節。イザヤ書十二章四節)。
 斯くキリスト・イエスを通じて賜はるエホバの救の御目的に絶對信頼して己が全生命を神に獻げ、此の世に勝ち得たる者は歡び言ふ、「我等の靈魂は捕鳥者の羅を脱るゝ鳥の如くに脱れたり。羅は破れて我等は脱れたり。我等の助は天地を造り給へるエホバの聖名にあり」(詩篇百廿四篇七、八節)。「エホバよ、汝の聖名は永遠に絶ゆる事なし。エホバよ、汝の記念は萬世に及ばん」(詩篇百卅五篇十三節)。

神エホバが一の被造物に對して名を與へ給ふ時に其の名は深い意義を有してゐる。其の明瞭な證據には、神が一の名を以て己を被造物に顯はし給ふ時に、其の御名は其の被造物に對して最も重大なる意義を有する事となるに見るも明かである。即ち「神」の名で御自身を顯し給ふ時にそれはエホバが天地の創造主にして服従する者に對し生命と萬物の善きものを與へ給ふ者であることを意味してゐる。又「エホバ」の御名で御自身を顯し給ふ時には其の被造物に對する御目的を意味してゐる。又「全能の神」の名を以て御自身を顯し給ふ時には其の御能力が無限にして御前には何者も絶對無敵であることを意味してゐる。又「萬軍の主」の御名で御自身を顯し給ふ時はエホバが全勝の神に在して、敵對する悪しき者の全部を撃滅し給ふ神なる事を意味してゐる。イエスが此の地上に來られた時にエホバは新被造物に對する「天の父」の御名で御自身を顯し給ふたが之はエホバが天界に住む萬物に對する生命の根原に在す事を意味す。又「至高の神」の御名を以て御自身を顯し給ふたが、之はエホバが萬物の最高至上に在して義と公平を以て全宇宙を支配し給ふ愛なる神に在す事を意味す。之等を諒解する時にイエスの御言の力を感謝して受ける事が出来る、即ち「永久生命とは唯獨の眞の神なる汝と、其の遣し、イエス・キリストを知るこれなり」(ヨハネ傳十七章三節)。

過去數千年間に亘つて全地上に惡の跋扈跳梁を見た。サタンは惡の權化であつて、惡の實行に努力する者である。彼は強大なる組織制度を有し、人血を以て地を汚し、叛逆の惡事を遂行して人類と天使とを悲嘆の中に引き込んだ。全能の神は其の御名の意味の示す如く最高至上者に在して、遙かの大昔に於て惡魔及び其他の惡を爲す者を撃ち滅ぼし得られた筈である。何故神はそれを爲されなかつたか。神は早速サタンと惡しき者を直ちに撃ち滅ぼさず、又惡の公行に何等干渉せずしてその跳梁を放任して置かれた。然らば此の理由は抑々何であらうか。

此の問題に對して從來は斯く答へられてゐた、「經驗により人間をして罪の甚しき結果を學ばしめ、又それを視るにより天使に教訓を與ふる爲である」と。此れは惡の放任に對しての答としては適當でない。「誠命によりて罪の甚しき事は現はるゝなり」(ローマ書七章十三節)の聲明は聖書中に唯一回のみしか現はれてゐない。此の聲明は「律法の契約」下にある猶太人に對してパウロが與へたるものであつて、之は人間が死に落ちて惡の擄となつてより既に四千年後の事である。

人間は己を死と苦惱に導く惡しき事を經驗する事によつて教へられる事は事實であるにしても然し一方善き事を爲さんとして専心努力したる人々も亦苦んで死んで行く事をも忘れて

はならぬ。亦死者の多數は是非の分別を辨へざる幼兒、小兒であつて、彼等は罪の結果を悟り知る事が出来なかつたのである。亦人類の多數は假令成人しても精神的には赤兒の状態で死んだのであるが、之等も經驗によつては何をも學ばなかつた。之等の幼兒や精神的の幼兒の多數は死より目覺めさせられる時に神を學び知る、而して其の時に不從順であるならば彼等も矢張り滅亡に歸せしめらる。此故に彼等の經驗は彼等に對して何の利益ともならないのである。又天使にしても彼等の多數は罪の經驗を有してゐるが、然し天使が己が經驗や人間の行く道を注視する事によつて利益を得てゐると云ふ事を立證する聖句は絶無である。

神に全く服従する事によつて永久の生命を授けられ被造物が、惡事は死に導くと云ふ事實を悟り知るは確であるにしても、之のみでは未だ、サタンが過去數千年の長きに亘つて惡を跳梁するを神が放任して置かれし事に對する充分な理由とはならぬ。未だ何か其處には更に重大なる理由がなければならぬ筈である。

惡の放任に對する或る一理由は以上に比して遙かに強き力あるもので又聖書の支持を充分に得てゐる。即ち、エホバは其の御預定の時至るに及びて理智ある全被造物の前に御自身を至上の力、絶對の義、完全なる智、全き無私の愛の所有者なる事を充分に發揮され、それに依て道が開かれて、神を愛し、神に對する貞節を保ち、絶對の信頼を爲す者が神より永遠の

生命と諸々の祝福を受ける事となるのである。神の御言と聖名は重大問題であつて、その擁護こそ即ち悪の放任に對する正當なる理由となるのである。

ルシファアの叛逆は忽ち「エホバとルシファアの何れが神か」と云ふ問題を起した。エホバの御言と聖名は此の問題の中に抱合されてゐる。神は完全なる人間を創造し、彼に告げて律法を犯す場合に對する刑罰は死である事を示し置かれた。ルシファアは人間に對する監督者として任命されると共に彼は忽ち己が智と力を神エホバのそれと等しきものであると自負した。ルシファアは己が智慧と能力は人間の死を阻止するに充分であつて、神の言を無効ならしむる事が出来ると考へた。又假令神が人間を殺さるゝにしてもそれは神の不完全なる智慧を立證するのであつて、その死刑執行は即ち神には人間を完全に造り之を自身に服従せしむる事が出来ない事を立證するものとなると考へた。ヨブに關する聖書の記録は此の結論の正確なるを裏書してゐる。

無論神には即座にアダムとルシファアを殺して、他に完全なる人間を創造し、又他の靈者を遣はして人間の監督者たらしめ、斯くして地上の人間を新たに開始する事は極めて容易であつた。而して若し神が之を爲されたならばそれは單に神の最高至上の力と義を顯し示さるゝに過ぎない事となる。其の場合天界の他の被造物は之を見て、創造者たる神の智慧は不

完全なりしによつて人間の創造に失敗したのであるとなし、彼等の神に對する全き信頼が甚しく動搖する事となる。即ち神は人間に對して義しき者に在し、又人間を義となし給ふ方である事を立證するの機會がない譯である。それと同時にエホバが絶対無私に在す事を表示し被造物をして「神は愛なり」と云ふ事實を知らしむるの機會もない事となる。

サタンは己が智慧と力とを用ひてエホバの其に對抗した。彼は己が叛逆後義と愛とを失つて了つた。故に義と愛とを以ては彼はエホバのそれに對抗する事は出来なかつた。若し他の諸々の被造物に向つてサタンが、エホバが智と力とに於て最高に在さざる事を立證し得たならばそれによつて諸被造物の神エホバに對する信頼を破却するに充分である。彼等はそれによつて苦み、エホバに對して不忠信となり、神から離反するのである。事實は證明してサタンが人々の多數をしてエホバは力なく、智慧なき神なりと思惟せしめた事を示してゐる。同時に彼は人類の多數をしてエホバは不義にして愛なき残忍なる神であると思はす事に成功したのである。而して彼サタンは多數の天使をも此の方法で惑はしめ、己が悪しき道に従はしむるに至つた。

サタンは己が目的を達成する爲に幾多の方法を用ふ。彼は彼の最初の嘘言なる「人間の靈魂は不滅であるが故に決して死なない」と云ふ事を人々に信ぜしめ、之によつてエホバは智

と力に缺けてゐる者であつて嘘言者であると思はしめたのである。彼は又多數の人々をして神は焦熱苦惱の地獄を用意して置いて人間を苦しめるものと考へしめ、之によつて神には義と愛が缺けてゐるのだと思はしたのである。

叛逆が行はれたる瞬間に於て神はサタンと其の悪行爲及び其の他の悪しき者を直ちに撃ち滅ぼす事を得られた。神がそれをなされなかつたと云ふ事は、此の世の惡に對する責任の全部を神が有せられると云ふ理由には別にならぬ。神は人類の間に發生した悲嘆、苦惱、病氣災害及び死に對しては如何なる點より見るも決して責任を有してはゐられない。之等は皆人間が神の律法を破つた爲に發生した罪の生んだ自然的結果である。神は此の中に惡の行はれるのを放任して於て何等それに對して干渉されなかつた。之は別に神が無限に惡を放任して置かれると云ふ譯でもなく、又神が暫くの間なりとも惡を喜び給ふと云ふ譯でも絶対にない。反て神の御言は神が總ての惡と惡を行ふ者とを嫌惡してゐられると云ふ事を明示してゐる。(詩篇五篇五節、四十五篇七節、箴言六章一六―十九節)。又神の御言は明示して其の御豫定の時至るに及びて神は惡と、惡を行ふ者とを悉く破却一掃して之等を消滅せしめ給ふ事を告げてゐる。(詩篇百四十五篇廿節、ナホム書一章九節)。

人なるキリスト・イエスの偉大なる贖價の犠牲は惡の繼續問題とは全く別個の問題であ

る。贖價は神が人類の回復の爲に備へ給ふた所である。此の贖價は天界にそれを罪祭として捧げられた瞬間から有効となつて人間の復興を可能ならしめたに拘らず、惡は依然繼續して今日にまで及んでゐる。贖價が罪祭として神の御前に獻げられた時より後、神はキリストの「體」なる教會の成員を選択し始められた。惡の放任公行は教會の選擇に何等の支障を來さず、却て教會は惡の眞つ只中に於て選擇されて來たのである。神がなされた事は之である、即ち、神はサタンが惡しき道を進展せしめ行くを放任して置いて、御豫定の時至るに及び、其の全き義に基いてサタンと其の惡しき代表者を忽ちにして撃ち滅ぼされるのである。サタンの歩んだ道は常に神に對する挑戦であつた。サタンはヨブに就て神に斯う告げた「ヨブを試みに合はして御覽なさい。彼は必ず神に向つて呪ひますから」と。神は其の時サタンが其の手をヨブの上につけて充分に彼を試むる事を許された、而してヨブは其の苦惱の只中に於て神に對する己が貞節と信頼を失はなかつたのである。

サタンは神が地球を人間の爲に創造し、人間に地の領有權を與へたと告げられた御言を知つてゐた。彼は又神の御言に依て地球は完全なる人間を以て満たされ、人間は常に神に服従しなればならぬ事になつてゐるのを知つてゐた。(イザヤ書四十五章十二、十八節。創世記一章廿八節。二章十七節)。其處でサタンは神に言つた「地上の人間の貞節を保つて置いて、律法

に從はし、地上に於て永久の祝福を受けしむる事は神に不可能です」と。斯くしてサタンはエホバの御言に挑戦したのである。神は宣言された「我が口より出づる言も空しくは我に歸らず、我が喜ぶ所をなし、我が命じ遣りし事を果さん」(イザヤ書五十五章十一節)。斯くして神とサタンの兩者の言が對抗する事となつた。其の結果は如何。神はサタンに向つて告げられた「汝の最悪を爲して見よ、我は我が言の確實なるを立證せん」と。

神の言

エホバに忠信なる預言者は記した「我は汝の聖き宮に向ひて伏し拜み、汝の仁慈と眞理との故に依て聖名に感謝せん、そは汝その聖言を諸々の聖名に勝りて高くし給ひたればなり」(詩篇百卅八篇二節)。神は最初の人間に向つて示し、豫定の時に「裔」を立て、サタンと彼の仕事の一部を滅ぼさんと約束されてゐる。神は此の御言を固く守られるのである。神はアブラハムを召して約束し、一の「裔」を起してそれにより地上の全人類を祝福せんと告げられた。神は又モーセに告げて、モーセの豫表する偉大なる預言者を起して人類の救済者たらしめんと約束された。神はその忠信なる預言者たちに聖言を委ねて彼等を遣はされたが、之等の預言者は忠實に任務に服して預言し、神に絶対に忠實なる一個の人間の出現すべき事、その人は神に忠信なるが故に非常なる迫害を受ける事、人類の罪を負ふ事、己が罪の爲ならず

して耻辱的の死を遂げる事、死より甦らされて後に天に擧げられる事、而して其の死によつて人間の爲に贖價を提供し、生命を得しむる爲に人々を義たらしむるの道を開く事を示した、(創世記廿二章十七、十八節。申命記十八章十五、十八節。ホセア書十三章十四節。ミカ書五章二節。

詩篇十六篇十節。イザヤ書五十三章一、二節。五十五章一、四節)。之等の預言は神の愛子なるキリスト。イエスに於て悉く成就したのである、(ヨハネ傳三

章十六節。マタイ傳廿章廿八節。ヨハネ傳十章十節。テモテ前書二章三、六節)。

若し神が罪の甚しき結果を経験によつて人間に學ばしめん爲に惡を默許して置かれたと云ふならば、其れはエホバが此の世の惡の跳梁跋扈を承認された事となる。而して若しエホバが承認されたとなると此の世に於ける惡の行爲に對する責任を神に歸さなければならぬ事となる。斯くの如きは神に於て決して有るべきではない、何故なれば神は惡を喜び給はず、惡しき者は神と共に住む事は出來ないからである、(詩篇五篇四節)。神は惡を嫌忌し給ふ、而して其の嫌忌する惡を神が承認し給ふが如きは絶対にないのである。

パウロは人間が經驗によつて罪の甚しきを學び知ると云ふが如きに關しては絶対に何も云つてゐない。パウロは其の時に神の律法と誠命とを論じてゐたのである、(ロマ書七章七一、三節)。神はイスラエル人に對して此の律法と誠命とを與へられた。神の律法の意義は以下

の中に全部包含されてゐる、即ち曰く、「汝我が面の前に我の外何物をも神とすべからず。汝自己の爲に何の偶像をも彫むべからず。又上は天にある者、下は地にある者並びに地の下の水の中にある者の何の形状をも作るべからず」(出埃及記廿三、四節)。

神の誠命の中の最も重要なものに就てイエスは示し給ふ、「汝心を盡し、精神を盡し、意を盡して主なる汝の神を愛すべし、これ第一にして大なる誠命なり」(マタイ傳廿二章卅七、卅八節)。

神の律法と誠命は罪人を二大別して神と悪魔との何れに服従するかを決定せしむるやうになつた。猶太人は神の律法と誠命とに従ふべき義務を有してゐた、何故なれば彼等はそれを行ふ事に同意したからである。彼等は其の義務に忠實でなかつた、故に神は彼等を打ち棄てられた。使徒パウロの論點は、彼が若し律法を知らなかつたならば何が罪であり、悪であるかを知る事は出来ぬが、然し今律法と誠命とは、神を知り、神の聖旨を爲すと稱する人々の悪が如何に甚しくして、彼等が神の律法と誠命とに全く逆行して歩んでゐる事實を瞭かに顯してゐる、と云ふにある。

神は之によつて何者と雖も神と悪魔とに兼ね仕ふる者は決して神の承認を受けざる事を明かにされる、何故なればエホバのみが眞の神に在すからである。心と精神と意志の全部を以

て神を愛する者は全く無條件を以て神エホバに己を捧ぐ。パウロが示した方則は即ち神エホバを喜ばし奉らんとする者は眞に神を愛して之に喜んで奉仕する者のみに限られてゐると云ふ點にある。故に此の方則は示して、神の御豫定の時至るに及びて各人は眞理の知識を得るの機會を受けて己が立場を全く無條件で神に歸するか、それとも全く神に敵對するか何れかを決定しなければならぬ事を教へてゐる。

神が喜んで惡の公行を默許して、其の愛子イエス・キリストの贖價を備ふる目的の爲に其に同意されてゐたと云ふ事は絶対に出来ぬ。神の智は完全であるが故に如何なる偶發事故に對しても善處する事が出来るのであつて、罪が此の世に入つた時にも神にはそれに處するの智は充分に備はり、其の場合に必要な應急處置を萬遺漏なく執られたのである。

聖書の示す事實は之である、即ち、アダムは完全なる人であつて彼は神の律法を犯す事は彼自身の死を意味する事を告げられてゐた。然るにルツファアは神の言に挑戦して斯う云つた、「汝は神の律法を犯すとも必ず死する事なし」と。己が創造者たる神に對するアダムの愛の不足は彼をしてサタンの勸告に追隨せしめた、そしてそれを意識的になしたのである。其處でサタンは考へた、「若し神がアダムを殺したならば其は神の智慧の不完全なる事を證明するものであつて、神には人間を造つてそれを己に服従さして置く能力がないと云ふ事を立證